終末　～終と始～

休利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終末　～終と始～

【Ｎコード】
Ｎ３２３７Ｄ

【作者名】
休利

【あらすじ】
時代は繰り返す。何故ならば、支配する者される者は変わらないからだ。人類と呼ばれる存在は、何処に向かっているのか？主人公のマーズを中心に描かれる世界の終末の時。人間は、生きる術があるのであろうか？

第一部（前書き）

この物語は、フィクションです。登場する人物・建物等は、実際する人物・建物等とは、何も関係ありません。

第一部

～破壊の使者～

まだ太陽が近かった時代。海は透き通り、空は紅の色を残していた。
「『人』も絶滅が近いのぉ」
「まぁ、『人間』を作ったのが失敗だったな。神が許すはずがない」
「あやつらは、欲から作られた存在。神になど成れはしないというのに…」
「『人』とて、神にはなれないぞ」
「確かに。だが、神の領域より来た『人』は、神に近い力を授かっておる」
「我々が消えたら、地上は『人間』に荒らされるのか」
「かもしれんな。だが『人間』が、神に近付けば、必ず『終末の時』がやってくる。我々の様にな」
「高度な技術を持つ『人』と知能の低い『猿』の間の存在は、そんな事には気が付かずに繰り返すのだろうな」
「『人』は、時間を飲み込んで時代を築き上げたが、『人間』は、時間に飲み込まれて時代を築き上げるであろう」
「哀しいものだな」
「これも定めじゃ。神に逆らって『人間』を創り出した『人』は、永遠の奈落に。そして『人間』には、永遠の弾劾を」
「永遠の弾劾か…」
「どうした？人間に未練でもあるのかのぉ？」
「いや。時の女王と契りを交わした愚かな人間を思い出してな…」
「そんな輩もおったかのぉ。今頃、地格界の最深部で、永遠の懺悔をしておるのであろうな」

「どうだかな。『神の書』には『地より来たる。欲望に満ち足りぬ者は、時を忘れて全知全能の神の安息の地を汚すであろう。終末の時の始まりである。』とある」
「大方、人間の行く末であろう。『人』と『人間』の違いは、そこじゃ。我らは、己を高め誇示する事で神に近付いたが、『人間』は違う。欲を望む事を高め、神に近付　こうとしている。そして、地上を空を海を…汚し続けておる。かつての恐竜時代の繰り返しじゃ」
「恐竜時代？また、随分と古い話だな」
「そうか…お前達は知るはずもないのぉ。封印された神の歴史だからのぉ。だが、もうじき消えるお前達には話しても良かろう」
「是非、聞きたい物だな」
「かつて、地上に君臨した恐竜達は、神を恐れぬ超生命体を創り上げた。神により禁じられた手法――異種族交配じゃ」
「異種族交配？つまり、他の遺伝子同士の子供が出来たって事か？」
「そうじゃ。今で言う伝説とされている者共は、異種族交配によって生まれた奴等じゃ。恐竜は、本能で神に戦いを挑んでいたのじゃ。そして、戦闘兵を創る名目で異種族交配を行った。だが、異種族交配によって生まれた者には、恐竜にはない高度な頭脳があった。基より、恐竜の良いとこ取りの奴等に、恐竜が叶うはずも無いわ」
「恐竜絶滅は、異種族交配による子孫に因るものなのか？」
「そうじゃ。その力は、ドラゴンと呼ばれる恐竜を筆頭に、地上と空にいる生物全てを三日で絶滅させる程であったと言う」
「三日…」
「恐竜が、神を目指したなら、奴等は、神をも恐れぬ地上を我が物にする為だけの殺戮集団じゃ」
「しかし、今の時代にはいないぞ」
「まぁ、聞け。地上と空を制圧した奴等は、次は海を取りに行った。その時、来たのじゃ」
「…」
「神より遣われし『破壊の使者』が…！」

「破壊の…使者…」
「その者は、大きな翼を持ち、黄金の剣と盾をドラゴン達に見せ付ける様に向け、頭には、神の使いたる印『光の冠』を掲げていた」
「人と同じなのか…！？」
「うむ。詰まる所の我々の祖先『人』の降臨じゃ。その数は、たったの七人。しかし、三日で地上と空を制圧した奴等を、一日かからずに制圧…いや、封印した」
「一日で…しかし、封印という事は――」
「生きておる。南極の氷の奥深くにな」
「な、南極…」
「奴等は、神の使いには殺せん。何故なら、物質には触れる事が出来んからのぉ」
「それで、永久氷海に封印をしたのか」
「だが、それだけでは終わらん。そもそも『破壊の使者』が、何故、地上に降臨したのか。わかるか？」
「異端の恐竜を封印する為じゃないのか？」
「それもあるが、ついでじゃ。『破壊の天使』の目的は、地上の浄化じゃ」
「地上の浄化…？」
「彼等は、空・海・大地・風・時・太陽を、それぞれが支配をした。何が起きたか？」
「生物の支配…か？」
「そうじゃ。自分達の意に反する者は、全て封印された」
「そんな事を神が許すのか！」
「…。これが『創世記』の始まりじゃ。知恵を持つ生命は根絶やしにされた。最初に、空から滝の様な雨。次に大地を切り裂く地震。全てを吹き飛ばす暴風。そして、飛ばされた者も生き残った者も洗い流す津波。残ったのは、下等生物だけ。地球はリセットされたのじゃ。そして、四人の使者が、地上に舞い降りた」
「どういう事だ？」

「神に背を向け『人』となったのじゃ。最後の時を刻む為に」
「！？」
「時を止めれば、全ての宇宙は広がりを止め、無に帰す。時を支配した者と太陽を支配した者は知っていたのであろう」
「まさか…伝説の『時の女王』？」
「ほっほっほっ。『時の女王』は、地上の時間だけを早めた。生物は早くに死に絶えて行く。その結果、進化は後退し荒廃して行った。」
「地上に降りた他の者も死んだのか？」
「焦るでない。…神に背を向けて『人』となった彼等に、神の使いの『使者』には勝てん。地上に降りた者達も死んで行くはずだった。しかし――」
「…」
「創ってしまったのさ。『人間』を」
「『人間』…」
「最初は、『人』同士の交配だったが、時の速さの前では、生まれては死んで行くだけの存在だった。彼等が、どう思ったかは知る由もないが、神の名の元に背徳までした彼等からして見れば、時の女王の行為は許せんかったのかもしれん。比較的生命力の長かった猿との異種族交配をしたのじゃ」
「何て事を…」
「猿の遺伝子が強すぎたのか、人の力の三割程しか使えない人間だったが、生命力だけは長かった。一応、成功したという事じゃ。そして、四人の使者は死んだ」
「太陽を支配した者はどうした？」
「ええ所に目を付けたのぉ。太陽を支配した者は、地上を哀れんで、雲を作り適度な雨を降らせ、緑を作った。そして、夜を創り地上に休息の時を作った。しかし、夜とは、神の目が曇る時だと知った悪魔が地上に這い上がるきっかけを作ってしまったのじゃ」
「悪魔まで…」

「さて、怒りに満ちたのは『時の女王』じゃ。彼女は、太陽の支配者にも牙を剥いた。地球の時間軸を狂わせたのだ。これによって、地球の気候は激変をする事になる。せっかく芽生えた命は、壊滅に近い状態となった。『人』は、死んで、尚、嘆いたという。そして、地球は、太陽から近くなったり遠くなったりする軌道に乗る事になる」

「なるほどな。だが、あと一人『破壊の天使』がいるはずだろ？」

「気が付いたか。恐竜から始まった一連の事象を、傍観していた者――その者こそが『全知全能の神』だったのじゃ！！」

「なっ…！？」

「神は悲しみに満ち溢れていたという。何故なら、それぞれが神の名の下に動いた結果が、身内同士の争いになってしまったからじゃ」

「神にも予測出来ない事態だったという事か」

「神は結果を与えるのではない。きっかけを与えて下さるのじゃ。目の前に存在する無数の点の一つを選べる権利――これこそが、皆に平等に与えられた『自由』なのじゃ」

「自由…」

「話が反れてしまったのぉ。『神』は、背徳した彼等の亡骸を天に向けて放り投げた。すると、彼等の体は、光を放ち、空・海・大地・風の守り神になったという」

「ん？背を向けたのに許されるのか？」

「翼を持たぬ天使じゃ。神の領域にいながら神になれぬ者達」

「神格…か」

「うむ。そして、神は言った。地上に生きる者達よ。彼らを崇めよ。そうすれば、地上の釣り合いは保たれ、永遠の楽園を目指せるであろう。と」

「永遠の楽園とは…」

「そして、更に神は言った。今、残る四人の猿人よ。お前らは、神の『希望』人の『知恵』悪魔の『絶望』を併せ持つ存在となった。地上を楽園にするか空虚にするかは、お前達に託そう。『人間』と

名乗るがよい―とな。『人間』の始まりじゃ。」
「待てよ？そいつらが人間ならば、俺達は、何なんだ？『人』が絶滅しているんじゃないか？」
「絶滅などしておらん。神格とは『人』じゃ。地上に降りる事も出来れば、神の領域に近付く事も出来る。彼等は、人間に高度な技術・知恵を授け、時には、神の言葉の代行も務めておる。かつての超古代文明に君臨した彼等が『人』であり『破壊の使者』じゃ」
「！あの伝説の文明は、存在したのか！？」
「もちろんじゃ。しかしながら、神の言葉を守れんかった人間は、裁かれたのじゃ」
「誰にだ？神は託したんであろう？」
「神格じゃ。それぞれの神格は、仲間ではない。海が覇権を取ろうとすれば、大地が黙っておらん…という様にな」
「そんな…それじゃ、超古代文明が消えたのは、自然災害でも神の意思でもなく、同じ神格だというのか？」
「そのまさかじゃ。均衡を破れば、他が許さん。まぁ、当たり前の事じゃな。そうこうしている内に、人間が神格に挑む様になっていく」
「地上だけを見れば、神格は、最も神に近かったのではないのか？」
「人間の一番の能力は、進化出来るという事を忘れたかの？」
「なるほどな。人の知恵も持つ人間なら、力がなくとも神で無ければ、勝てる確率が上がるという事か」
「そういう事じゃ。そして、地上で神と勘違いをしてしまった神格は、自らが作った人間に因って滅ぶのじゃ」
「…」
「『人』の最後の王、クフ王よ。今、まさに『人』の時代は終わる。しかし…『人間』の時代も同じ様に終わるであろう。我々は、眼を見開いて見届けようぞ」
「そうだな。『人』も『人間』も『神』にはなれぬ。これより…人間は、争い血を流し、永遠の弾劾を歩み続け…終末を迎えるであろ

う」
「良き永き眠りを…」
「…地上が我々に還る日まで…」

～炎の術者～

「リト…人間の心に善悪がある限り、天使と悪魔の戦いは終わらないんだよ」
司祭は、そう言い残して奥の間へと消えて行った。
司祭が入って行った部屋から聞こえる最後の説教…
ドアの隙間から閃光にも似た光が一瞬漏れた。
「…！司祭様っ！」
リトは司祭が入って行った部屋へと駆け出す。しかし、リトの兄のヤーヴェに引き止められた。
「離して！司祭様を助けなくちゃ！」
「お前には無理だ。それに、司祭様はもう…」
ヤーヴェはうつむきながら、言葉を濁した。自分を掴む腕が震えているのがわかると、彼女は床に身を預けた。
「リト…法王様に報告しなくちゃ…」
ヤーヴェは、リトに手を差し伸べた。
「私達はどうなるの？」
「……」
ヤーヴェは、遠くを見つめながら呟く。
「滅び…」
リトは、ヤーヴェの見る方角へゆっくりと振り向いた。

ギィィィ――　…

不意にドアが鈍いきしみ音と共にゆっくり開き始めた。我に返ってドアの方を向く二人。ドアはゆっくりと開いている。が

「司祭様…？」

リトは問いかける。しかし、返事はない。

「リト、逃げろ…逃げるんだ…」

ヤーヴェは開くドアから視線を逸らさずに、押し殺した様な声でリトに訴えかける。リトは、ドアとヤーヴェを交互に見ながらも現状を理解出来なかった。

（中から出て来るのは何？）

この状況下で好奇心があるはずも無いのだが、体が動かない。まるで、ドアの向こうより出てくる存在からの金縛りにでもあったかの様に。

「逃げろ！リト！！」

その呪縛を解いたのはヤーヴェの叫び声だった。と同時に、二人は身を翻して走り始めていた。

走りながら後ろを振り向くヤーヴェの視界に入ったのは、『目』が黒く潰された司祭の顔半分だった。生きていないであろう肌の色は赤黒く焼け焦げていた。

（逃げ切れるのか！？）

ヤーヴェは、自分達に向かって来る司祭の気配に焦りを覚えた。

（神よ…！我等にお力をお貸し下さい…！！）

リトは現実に起きている出来事にパニックになりながらも信仰を進める。

普段、歩き慣れている廊下は決して長くない。しかし、今走っている廊下は長く感じた。まるで、迷宮の回廊に迷い込んだ様に…

ヤーヴェは、不意に立ち止まった。それに気が付いて止まるリト。

「リト。先に行くんだ。」

「え…？」

リトはヤーヴェの言葉の意味を理解出来なかった。
「司祭様は、亡くなられたはず。しかし…生きている」
「どういう事？」
「わからない。それを調べる。だから、リトは先に法皇様の所へ行くんだ」
「嫌っ！私は、お兄様と一緒に行きます！」
リトは、泣きそうな顔でヤーヴェに訴えかけた。
「リト…よく聞くんだ。これは、人類存続の危機かもしれない。はっきりとは言えないが、あってはならない事が、現実に起きようとしているかもしれないのだ。人類が消えれば、俺もお前も居ても居ない様なものになるだろう。だから、今は、法皇様に事態を伝えに行って欲しい。俺は必ず追い着く」
ヤーヴェは、リトの両肩に手を添えて、小さな子供を慰める様に、優しい口調で話し掛けた。リトは、大きな選択を迫られ苦悶の表情を浮かべている。
「さぁ…行くんだ。俺には『術』がある。いざとなれば、封印を解く。だから心配するな」
ヤーヴェは、手のひらを開いてリトに見せる。すると、一瞬、炎の様な物がヤーヴェの手のひらの上で踊った。
「…うん…」
リトはそれを見て渋々頷く。
「お兄様に神の御加護があります様に。そして…死なないで下さい！」
ヤーヴェは、軽く頷く。リトは、その返事を見て身を翻して、出口へと走り出した。
リトを見届けるかの様に見つめるヤーヴェ。しかし、束の間の兄弟の時間は引き裂かれた。
何かを擦る様な不気味な音。耳で聞いているというよりも、心に直接、響いてくる音――
ヤーヴェは、その音を確かめる様に辺りを見渡す。そして、目を閉

じる。暫くして何かを悟った様に目を開くと、自分達が走ってきた通路をゆっくりと歩きながら引き返す。ヤーヴェの手の平には、小さな炎が燃えていた。
「司祭…いや、カインよ！お前の望みの『リト』は消えた！もう、この神聖な場所に用は無いはず！早々に立ち去るのだ！」
見えない相手に叫ぶヤーヴェ。勿論、返事は無い。聞こえるのは、不気味な擦る音だけだった。
周りに細心の注意をしながら、自分達が最初に居た場所――司祭を最後に見た場所まで戻ってきた。
（…おかしい。確かに何かが追って来る気配を感じたはずなのに…誰もいない？）
辺りを見渡すが、人の姿は見えない。動く物すら無い。
（ドアが閉まっている…？確か開いていたはずなのに…？）
ヤーヴェは、司祭が出てきたドアが何事も無かったかの様に閉じている事に疑問を感じた。そして、天井に向けて声を張り上げる。
「かつて、この神聖なる神殿において、法王様より最高の称号を貰いし４人の賢者の一人『カイン』よ！このヤーヴェを恐怖に陥れようとしても無駄だという事は承知のはず！その禍々しい姿を我の前に見せよ！」
ヤーヴェは目を閉じて、炎を携えた手をドアの方へとかざす。炎は段々大きくなっていき、最後は、ヤーヴェと同じ位の大きさになる。ドアが軋み音と共にゆっくりと開き始めた。
「神を愚弄する者よ！闇に帰るのだ！」
ヤーヴェが目を見開くと同時に、炎はドアへと向かって発射された。

どごぉぉぉぉ――――――ん！！！！

轟音と爆風。炎を解き放ったヤーヴェが吹き飛んで壁に激突する程だった。

～お調子者～

リトは法王のいる神殿へと走っていた。神殿は『４賢者』の管轄する四つの宮殿の真ん中に位置する。リトがいた宮殿は、東の方角にあたり『天空の理』を象徴している。
その他の宮殿は『大地の理』『風の理』『海の理』を象徴し、中心の神殿は『時の理』を象徴している。
「ちょっと、そこのかわいいシスターさん？」
走っているリトの横にピッタリ付いて走ってくる男は軽い口調でリトに話し掛けてきた。
「…」
兄の生死に係わる非常事態に、リトは相手にする余裕も振り向く気も全くなかった。
「ちょっと、ちょっと！シカトしないでよ！東の宮殿から来たんでしょ？」
リトは立ち止まる。信仰から程遠い感じの男は、薄汚れた革ジャンにジーンズというラフな格好をしている。
「すみません。私、急いでいるので…」
リトは、そう言って走り出す。
「終わりかよ！？急いでいるのは、司祭様に何かあったんだろ？」
男は、リトの背中に真実を投げつけてきた。動きが止まるリト。そして、ゆっくりともう一度、男の方へ振り向く。
「あなた…見ていたの？」
リトは、訝しげに男を見つめる。男は、ゆっくり首を横に振る。
「当たりのようだな。だが、見ていた訳ではない。推測さ。東の宮殿で大きな爆発があったという情報が入ってきた」

その言葉を聞いた瞬間に、リトの鼓動は一気に高まった。ヤーヴェの優しい顔が脳裏を横切る。
「お兄様…！」
宮殿の方へと走り出すリト。しかし、それを制するかの様に男が行き先を塞いだ。
「どいて下さい！兄が…兄が…」
リトは、男を睨む。しかし、怒りよりも兄を慕う気持ちが抑えきれずに涙が溢れてきた。
「俺は『任務遂行中』は、それ以外の事には関与しない主義なんだが…酒と女の涙には弱いんだよな…」
男は頭を掻きながら、在り来たりの言葉を放ち、空を見上げる。
「何が言いたいのですか？」
リトは、男のわからない話に苛立ちを覚えた。まるで全てを知っているかの様な男の態度に釈然とせず、涙で濡れた顔で睨み付けた。
「シスター、君は君の使命を全うするんだ。東の宮殿…君の兄ちゃんは俺が見に行ってこよう。だから…」
男の表情が険しくなる。予想外の言葉にリトは戸惑いながらも、男の口から出てくる次の言葉を待って息を呑む。
「後で上司に一緒に謝ってくれ」
リトは呆れ返った。そして、一瞬でも男の言葉を真面目に受け止めた自分が恥ずかしかった。
（こんな素性のわからない男の話を聞くべきじゃなかった！時間の無駄だった！）
リトは、東の宮殿へと走り始めた。
「おいおい、君の行く方向は逆だろう？」
リトは聞こえないフリをして走る。リトは、自分の唯一の肉親の安否は、どんな事よりも優先すべきだと言い聞かせていた。法王の下へは、ヤーヴェと二人で行けば良い。そうすれば、こんな男も関係ない、と。男はリトの後ろ姿を見つめている。
「しょうがねぇなぁ…」

呟いた瞬間に男は消えた。そして、走っているリトの目の前に突然、姿を現せた。リトは、言葉も出ずに立ち止まる。目を大きく見開いて、辺りを見回す。勿論、男は同一人物だ。
「そんなに驚くなよ。『術者』がいるなら、俺みたいなのが居ても不思議じゃないだろ？」
男は、肩を竦めながら軽い口調で言った。リトは動揺の色を隠せないらしく、こめかみに手を当てる。
「何故『術者』の存在を知っているのですか？存在を知る者は、殆どいないはずなのに…」
「殆どいないだけで、全くいない訳じゃない――だろ？」
得意気な男は、軽くウィンクをして見せる。
「…あなたは、何者なの？」
リトは、男に詰め寄る。
「これは失礼。俺の名前はマーズ。ちなみに君達『神の使い』が嫌う『人造人間』だ」
人造人間という言葉を聞いて、リトの顔が強張る。しかし、次の瞬間、
「人間が知り得る、ありとあらゆる知識・情報を持っているという事ですね…」
「それだけじゃ無いけどね」
マーズは人差し指を横に振る。リトは、寂しげな表情へと変わった。マーズは表情の変化を見逃さなかった。
「拒絶するかと思ったけど、同情してくれるのかい？」
リトは、マーズをじっと見つめながら言う。
「あなたは、罪深き人間の子…哀れむは罪を犯した人間であり、あなたではありません」
リトは、そう言い残して走り始める。
「あれ？また話終わりなの？」
大きな溜め息を吐くマーズ。
「どうやら、『任務』の遂行は先延ばしになりそうだな…クレス将

軍すまんっ！」
マーズは、リトの向かう東の宮殿を目指して消えた。

〜予兆〜

「ソルジャー。マーズから連絡は来たか？」
「いえ。追跡センサーを信じるならば、東の宮殿を目指している様ですが…」
ソルジャーは、目の前のコンピューターを見ながら返事をする。
「東？時の神殿に向かっていないのか？」
「はい…マーズさんは、気まぐれですからね…」
「また女が絡んだな…」
「クレス将軍に同情します」
「同情するなら、あいつを何とかしてくれ」
クレスは、頭を抱えながら言った。
「ん？クレス将軍。監視衛星からメッセージが来ました」
ソルジャーは、将軍に席を空ける。クレスは、パスワードを打ち込んで画面に注視する。
「どうやら、只の女絡みではないみたいだな…」
「と、言いますと？」
「ソルジャー、すぐに特殊部隊の出撃準備に入ってくれ。私は、大統領に会ってくる」
「了解。マーズはどうしますか？」
「あいつなら、心配はいらない。問題なしでやらせておけ」
クレスは、そう言い残して、足早に歩いて行った。
「こりゃ、相当な緊急事態かな…」

クレスの後ろ姿を見送りながらソルジャーは呟いた。そして、見事なブラインドタッチでパソコンと睨めっこを始めた。

「大統領、失礼します」
「クレスか。お前がこんな所にくるのは珍しいな。」
「監視衛星より、東の宮殿が爆発したとの事です」
「お前がここに来ると、必ず、嫌な知らせだな」
「東の宮殿は『天空の理』つまり、空の異変が起きるという事です」
「…他の宮殿は？」
「今の所、報告は何もありません」
大統領は、徐に受話器を取る。
「私だ。すぐに、空軍全団に緊急配備を要請しろ。それと、海軍に連絡をして各地の空軍施設に向かわせるんだ。…そうだ。非常事態宣言で構わん！とにかく緊急だ！」
受話器を荒々しく置く。
「行政は堅いのが好かんな。クレス、『神格層』と連絡取れるか？」
「４人の司祭が揃わなくては、『神格層』にコンタクトはとれません」
「カインが死んだという事か？」
「恐らく――」
「成る程。隔離された現格層という事か」
「マーズが東の宮殿の辺りにいる様です。私の推測に過ぎませんが、カインの弟子の兄妹といる可能性が高いです」
「それはラッキーかも知れんな。連絡は取れるのか？」
「今は無理ですが、マーズなら状況を正確に読めます。後、特殊部隊に現地入りさせます」
「分かった、許可しよう。クレス、君も現地に飛んでくれ」
「そのつもりです。失礼します」
クレスは、一礼をして部屋を出て行く。ほぼ同時に、電話のベルが鳴り響く。

「どうした？」
大統領は、受話器の向こうの声を聞いて、目を閉じて首を横に振った。
「遅かったか…」
それは、空軍壊滅状態の知らせだった…

「早く残った機体を中に入れろ！」
目の前に広がる光景は、今まで見た事のない光景だった。雷鳴が響き、稲妻が地上に降り注ぐ。雨は足場を水で流す。戦闘機、貨物機、ヘリコプター…飛び立つ事なく、爆発・水没して行く。兵士達の悲鳴は、轟音に掻き消される。誰も予期せぬ事態に、戦慄する。『最強・最速』と言われる、第一空軍も例外では無かった。
「何なんだ…この天候の変化は…？」
管制塔の指揮官は、窓に張り付いて凝視する。
「指揮官！全機、発進不能です！ここも危険です！すぐに撤退を！」
「各地の部隊も同じ状況の報告が入りました！天候に空軍が狙われているとしか思えません！」
「終わった…終わりだ…撤退？退路も絶たれ、手段も無い状態で撤退が出来るのか？無駄だ！」
「指揮官…？」
管制室の全ての兵士が、指揮官に目が行く。
「いいか…よく聞くんだ。我々は、籠の中の鳥だ。ははは…！何もかも終わりだ！空を制する部隊が、空に負けたのだ！ははは――！！！」

～穴～

「随分、派手に吹っ飛んでるなぁ」
マーズは、瓦礫の山を見渡しながら呟く。
「ここから、兄ちゃんを探すのは厳しいな…」
リトは、細い腕で、一生懸命に瓦礫を退けている。
「お兄様…どうか無事でいて下さい…！」
マーズは、その姿を見て
「シスター。ちょっと下がって」
「…？」
リトの横をすり抜けて前へ出る。そして、膝間付いて、地面に右手を沿えて目を閉じる。
「一体、何をしてるの？」
リトは男の奇怪な行動に眉をひそめる。
「もっと離れた方が良いぜ？」
マーズは、振り向く事なくリトに忠告する。その声は先程までの軽いトーンではない低い声だった。リトは、その違いに気付き後ずさる。
（何で、勝手に付いて来た、こんなヤツの言いなりになってるんだろ…）
リトは、思わず後退してしまった自分に苛立ちを覚える。マーズは――――お構い無しで同じポーズをしたまま動かない。
しばらく、時間が止まった様に全く二人は動かないでいた。
「ちょっといい加減にして下さい！」
リトは我慢しきれずに歩み寄ろうとする。
（やっぱり関わるんじゃなかった。お兄様の安否の方が優先よ…！）
「きたぜ…」
不意にマーズが呟く。リトの動きが止まる。次の瞬間――――
地響きと共に辺りでパチパチと音がする。
「何これ…」
リトは辺りを見回すが、地面の大きな揺れに耐えきれずにしゃがみ

込んでしまった。
「ハァァァー…」
マーズは腹の底から絞り出した声をあげる。すると、マーズの周りに、時折、閃光が見える。膨大な量の静電気だった。リトは、茫然とマーズを見つめる。
「いっけぇ――――っ！！！！！！」
目を見開き、瓦礫と化した宮殿を睨みつける。すると、マーズの周りに帯電していた電気が、一気に瓦礫を目指して地面を擦りながら向かう。
次の瞬間、リトは非現実の世界を瞳に焼き付ける事になった。
瓦礫達が宙に浮き始めたのだ。瓦礫は更に空中で粉々になり、風に浚われて行く。
「凄い…」
リトは、無意識で呟いていた。そして、震える体。驚きと同時にマーズという人造人間への恐ろしさも感じていた。

十秒程で瓦礫は全て消え去った。
マーズは立ち上がり、一息吐きながらリトの方を向く。
「ふぅ～。シスター終わったぜ。捜索さいか…ん？どした？」
見つめる先には、動く事も声を出す事も忘れて、自分を見つめるリトがいる。
「なるほど…こういうのは見た事がなかったか」
マーズはシスターの方へと歩きだす。
「地面に帯電した電気を使って瓦礫を除去しただけだぜ？そんなに驚く事でも無いと思ったが…」
リトは未だに動けない。ヤーヴェの術とは明らかに違う力だった。
「人造人間は、そんな事まで出来るんですか？」
「あん？まぁ、ありとあらゆる化学現象を自発的に誘発させる事は可能らしいが、何処まで何が出来るのかは俺も知らねぇなぁ」
マーズは肩を竦めてみせる。

「一体、あなたみたいな人を何人造ったの？」
「説教かよ…生憎、俺は同じ輩にあった事がねぇからわからん話だな」
「そうですか…お気を悪くしてすみませんでした」
リトは、しょんぼりとうな垂れる。
「いや、別に悪い事したわけじゃないし…いいんじゃねぇか？」
「はい、すみません」
「とりあえず…兄ちゃん捜ししねぇ？」
マーズは、気まずい雰囲気に耐えきれなくなって本題を切り出す。
「そうですよね。お兄様を探さなくちゃ…」
リトは、我に返る様に慌てて宮殿跡地に向かう。マーズは、溜め息一つ吐いて、リトの後ろを追う。
「……」
「ん？どした？発見したか？」
突然、止まるリトにマーズが問い掛ける。
「ここって宮殿があった所ですよね…？」
リトは、マーズの方をゆっくり振り向く。
「ん？あぁ、瓦礫が嘘付いていなければな。違和感があるのか？」
「あの…違和感というか…」
リトは、ゆっくりと向きを宮殿の方に戻す。
「あ……あれ！？俺は瓦礫しか退けてないぜ！？兄ちゃんは瓦礫じゃないだろ！？」
二人の目の前には、宮殿の跡地。そこにあったであろう土の変色だけを残す、宮殿跡地…
「……」
どうやら、リトは信用していないらしい。
「予定では、瓦礫が消えて、秘密の地下室でも発見してぇ――みたいな…？…ダメ？？」
目が泳ぎ、焦りがバレバレのマーズ。しかし、その言葉を聞いて、リトの顔が変わる。

「あ…地下室！あります！いえ、正確にはあるはずです！司祭様に聞いた事があります！」
リトは、興奮気味の声で喋る。
（お兄様なら、きっと、地下室に隠れて爆発を凌いだはずよ！）
「マジで？アドリブだったのに…（汗）でも、こんな広い土地から、どうやって隠し地下室を捜すんだ？」
「マーズさんでしたっけ？手伝って下さい！私に良い考えがあるんです！」
リトは、マーズの手を引っ張る。
「おいおい。随分と積極的になったなぁ。『でしたっけ？』は余計だけど…でも、悪かねぇな♪」
マーズは、リトに翻弄されながらも笑みが溢れる。どうやら、女性に手を握られたのが、余程嬉しいらしい。
「ここに立ってて下さい」
リトが導いた場所は、宮殿跡地内の一ヶ所だった。
「え？立ってるだけ？」
「はい。立ってるだけで充分です」
「何か、トゲがない？？」
「そんな事ありません。マーズさんじゃなくちゃ出来ない事ですから」
（俺って…あんまり、頼りにされてないのか？）
マーズは、頬を指で掻きながら、ジレンマに困惑する。

マーズを立たせてから一時間程が経つ。リトは、マーズと空を見ながら色んな場所に立っては敷地内を移動していた。。
「お～い、シスター？俺はヒマだぞぉ～」
立ってるだけに耐えきれなくなったマーズが、リトに申し出る。
「もう少し我慢して下さい、マーズさん。あと、遅れましたけど、私はリトと申します。。」
リトは、自己紹介をしながら、空とマーズを見る事を繰り返してい

る。
「へぇ、リトちゃんか。かぁいい名前じゃん。リトちゃんは、何処の生まれなの？俺の睨みだと、ヨーロッパと東洋のハーフなんだけど」
「何処かは知らないんです。物心付いた時には、シスターとして、この協会にいましたから」
（しまったぁ！ヘビーな話を持ち出しちまったか！？）
「そうなんだ。…すまん。変な事を聞いちまって」
マーズは、頭を掻きながら謝る。
「あら、別に気にしていませんよ？お兄様もいましたし…シスターとして、沢山の人と触れ会う事も出来ましたし。マーズさんって、意外と気を使ってくれるんですね」
「俺が？？」
マーズは驚きの表情をする。
「はい。私、ちょっと安心しちゃいました」
「信用されてねぇなぁ」
「冗談ですよ。」
「冗談は、安心ｏｒ不安？」
「両方です」
リトはからかう様な仕草でマーズに笑顔を向ける。眩しい笑顔。マーズは、本当に眩しい笑顔という物を体験するのは初めてだった。その映像に吸い込まれる。
「マーズさん、どうしました？」
動きが止まったマーズに気が付く。マーズは、心の中の何かが、高鳴り抑えきれない。彼は、必死に平常心を捜す。
「マーズさん？」
二度目の呼び掛けにやっと我に返る。
「あ、いや…その、リトちゃんが『冗談』なんて言うから、ショックだったのさ（焦）」
言葉が浮かばず、心を見透かされない様に下手なフォローをする。

「マーズさんが悪いんですよ…だって、第一印象が悪かったですから…」
リトは、マーズの最初の言動を思い出しながら、呟く。
「俺の第一印象って、どんなんだったの？」
「…言っていいんですか？」
「ずばり言ってくれ」
「怒ったり、落ち込んだりしませんか？」
「もちろん。男に二言は無いんだぜ？」
「じゃ…不埒者…軟派な人…遊び好き…後は…」
「リトちゃん、もういいや。俺、落ち込みそう」
マーズは、ガックリ肩を落とす。
「やっぱり落ち込みますか？」
「…」
（やべぇ。俺、マジで好きになっちまいそうだぜ…）
めまぐるしく変わるリトの表情と感情の一つ一つに、新鮮な想いをはせる。
「ごめんなさい！でも、マーズさんは優しいかったし、初対面の私を元気にさせようとしてくれたり…あと、お兄様とは違う温かさみたいな…きゃっ！」
先程まで離れていたマーズが、リトの目の前にいる。瞬間移動だ。
「いきなりビックリするじゃないですか！」
マーズは、涼しい顔をしている。
「俺、今まで女に誉められた事無いんだぜ。…優しい？下心さ。紳士？女の笑顔を見る為さ。」
「それは本心ですか？」
「…あぁ。」
しばし、マーズの目を、じっと見つめるリト。そして、目を反らして言う。
「私、言いましたよね？沢山の人と触れて来たって。その中には、哀しい事ですが、心無い人達もいました。だから、わかるんです。

そういう人達は、違う瞳と雰囲気を持っているんです。」
「…」
「最初に会った時は、あなたが言う様な気持ちもあったのかも知れません。でも、断言出来ます。」
リトは、真っ直ぐな視線でマーズを見つめる。
「今のあなたには、そんな気持ちはありません。私には、孤独に身を置く事を選んだ哀しい人に見えます。」
リトの視線に、自分の気持ちが見透かされている錯覚を覚えるマーズ。
「……買い被り過ぎだ」
「え？」
マーズは、ポケットに手を突っ込み、踵を返す。
「俺は自分の身を守るので精一杯だ。人の面倒見れる程、余裕なんかありゃしねぇよ。それが俺の全てさ」
精一杯の虚勢を張る。
「つまり、私は、あなたにとって、お荷物で迷惑って事ですか？」
「…」
「言いたい事は理解出来ました。今日は、私に付き合って頂いて、あり――」
「ただ、兄ちゃん捜しは、俺の仕事の領分でもある。だから、最後まで付き合わせて貰うぜ」
リトの言葉を遮る。
「マーズさん…」
マーズの後ろ姿は、何処か寂しく、それでいて逞しく見えるリトであった。
「マーズさんは、やっぱり優しい方ですね」
「！？…リトちゃん、人良すぎじゃね？」
「あら。お互い様だと思いますけど？」
ニッコリ微笑むリト。その笑顔にマーズは、完全に持っていかれた。
「一本取られたかな…？リトちゃん、俺、マジで好きになっちまい

そうだぜ？」
リトの顔に緊張が走る。意味を理解して顔が紅くなっているのが分かった。
「と、突然何ですか！？」
「深い意味は無いさ。俺なりの愛の告白」
「…（汗）」
「まぁ、シスターと人造人間じゃ釣り合いが取れねぇから、いちファンだと思ってくれ」
マーズは、リトが困る反応を見てフォローを入れる。
「あの…私は、マーズさんの事、嫌いじゃないですよ」
「微妙な返事だなぁ。でも、あんがと」
マーズの目に映るリトの笑顔は、全てを忘れさせてくれそうな慈愛に満ちた笑顔に見えた。
（俺ってば、完全に堕とされたな…）
「初めてなんです。お兄様意外に私に、こうやって接してくれた人が…」
「こうやってって？」
「私に言い寄って来る人達は、物でしか自分の気持ちを表現出来ない人ばかりでしたから。マーズさんみたいに、ちょっと捻くれているけど、ストレートに行動された事が無いんです」
「それって誉めてるの？」
「いえ、誉めてません。」
「あら…（落）」
「シスターは、恋愛ご法度みたいな所がありますが、シスターだって恋愛をしたいって思っています。そういう意味で、マーズさんも一人の男性として見れるかも知れませんし…」
「それって、恋愛対象内って事か！？」
マーズの顔が一気に溢れんばかりの笑顔に変わる。
「え！？例えばですよ！？マーズさんがいきなり変な事を言うから、考えただけで…！」

リトの動揺が手振りに現れる。
「例えばかよ！俺ってば、ショック←」
地面に座り込むマーズを見て、思わず吹き出すリト。そのリトを見て、マーズも笑いだす。どの位、笑っていなかっただろう。二人は、久々に心から笑う事に生きてる事を実感していた。…二人の時間。マーズは、心地好い時間に、ずっと身を任せたいと思っていた。そして、リトも――
二人の間を木枯らしが吹き抜ける。身震いをするリトを見て、マーズは、自分の革ジャンを脱ぐ。
「あ。私は、寒くないから平気ですよ」
自分に羽織を貸してくれるのを気遣って言った時には、マーズは、目の前から消えていた。
「あ…」
後ろから温もりのある革ジャンが、優しく、フワッと掛けられる。
「風邪引かせる訳にはいかねぇからな」
「本心ｏｒ下心？」
「半分づつだな」
「ありがと。マーズさんは、寒くないのですか？」
「寒いに決まってる。」
「フフ…マーズさんらしいですね。」
「否定しないという事は、ＯＫって事かな？」
マーズは、リトに被せた革ジャンの中に滑り込む。と同時に、リトは革ジャンからスルリと抜けた。
「あり？」
マーズの予定では、二人が一つの革ジャンで体を温めあう図が浮かんでいただけに、予想外の展開に呆然として、そっぽを向いているリトを見つめる。
「隠し部屋探さなくちゃ…それに…初対面の人と…出来ません…」
リトの顔は、紅く染まっている様に見える。それは、夕日のせいでは無いと思いたいマーズであった。

「…そうだったな。部屋探しするか。だけど――」
マーズは、立ち上がり、革ジャンをリトの肩に掛ける。
「マーズ…さん」
「男は、女に一度出したモンを返されるとショックなんだぜ？」
マーズは軽くウィンクをする。
「まぁ、ちょっとサイズがあっていないが、寒さ凌ぎにはなるだろ」
そう言いながら、背伸びをするマーズ。
「マーズ、ありがと。」
リトは、革ジャンに微かに残る温もりに心の鼓動が踊り出していた。
「今、マーズって言った！？」
「え…はい。ダメでしたか？」
「いやっ！それがいい！さん付けだと、よそよそしくて耐えらんなかったんだよなぁ」
「アハハ…」
まるで子供の様に話すマーズに、リトは笑いを堪えられなかった。
「俄然、やる気が出たぜ！？もう隠し部屋は見付かった様なもんさっ！」
マーズは、両腕を横に伸ばす。どうやら、また自然現象の力を使うようだ。
「リトちゃん、俺の後ろに来て、しっかり捕まっているんだぞ」
リトは、マーズの言葉に従う。
「今度は何をするの？」
二人の周りに風が沸き起こる。
「竜巻を作る」
「竜巻！？」
マーズは、ニヤリと笑う。伸ばした腕を頭上に持っていき、両手のひらを合わせる。すると、風は、勢いを増しながら上昇して行く。
そして、砂を巻き上げて形を現した。
「飛んじゃいそうだよぉ！」
リトは必死にマーズにしがみつく。

「俺に捕まっていれば大丈夫だ。」
風の轟音と風圧で目を開ける事も出来ない。マーズの力は凄いが、毎回これでは身がもたない、という思いを口にする事も出来なかった。

――竜巻は、程無くして止む。
「大丈夫か？」
まだ、しがみついて目を閉じてるリトに、マーズが話掛ける。
「終わったの？」
「あぁ、終わったぜ。さぁ、目を開けて」
「何…？これ…」
リトは、恐る恐る目を開く。
目の前には、十メートル四方位の巨大な『穴』が出現していた。
言葉が見付からないリト。
「聞いた話だか――古代人は、特殊な力を持ってして、『人間』を統治した『五体の人』だったと聞く。だが、知恵を付けた『人間』が、『人』を葬る為に、五つの冥界に通じる『穴』を作って『五体の人』を幽閉したらしい。」
マーズは、穴に近付きながら話す。
「五つって…もしかして、神殿と宮殿…？」
「可能性はあるな。東の宮殿の司祭が地下があると言っていたのは、この事かもな」
マーズは、穴の奥を指差す。リトの表情が青ざめていく。
「そんな…たった五人の人間を葬る為に、こんな事を…」
「違うぜ？」
マーズは、ゆっくりと首を横に振る。
「え？」
「五人の人間じゃなく『五体の人』だ。人間と人は別だ。人間は、人になる為の過程であり、人間の完全体が『人』だ」
「人間の完全体…確かに経典にも似たような存在があったけど…マ

ーズは、そんなに詳しい話を何処で聞いたの？」
「何処だったけなぁ。誰かに聞いた様な気がするんだがな」
マーズは、腕を組みながら考える。
「…」
「リト…ちゃん？」
リトが震えているのをマーズは、見逃さなかった。
「ねぇ…」
「他の宮殿が心配か？」
マーズが先に制する。リトは、マーズを見ながら頷く。
「今の所、他で何かあったという情報は入ってきてない。推測だが、クレス将軍の部隊がそれぞれの宮殿に出向いているはずだから心配は無いと思うが」
「クレス将軍…？マーズは、兵士なの？」
「まぁ、そんなモンかな。とりあえず、中に入ってみっか。リトちゃんは、此処で待っててくれ」
「危ないよ！それに…私一人だと…」
リトは、余程、心細いらしい。革ジャンを持つ両手に力が入る。
「大丈夫さ。すぐに戻るし、ヤバくなったら逃げるしな」
マーズは、不安なリトを元気付ける様に、お得意のウィンクと笑顔を見せて、穴の中に入って行った――ドスッ！！！

「何だこりゃ！」

「マーズ！？」
マーズの叫び声を聞いて、穴へ駆け寄るリト。視界にうっすら映るのは、穴の中でうつ伏せになっているマーズであった。
「マーズ？…何やってるの？」
「ぺっ、ぺっ…くそ…漆黒の闇の先は行き止まりかよ…ってか、浅過ぎだろっ！」
リトは、力が抜けて座り込む。

「とりあえず、上がってきたら？」
「そうするわ…」
マーズが何とか立ち上がると、首から上は、地面から飛び出ていた。
「ホントに浅いね…」
笑いを必死に堪えながら、リトはマーズに同感を示す。
「くそっ。結局、迷信は迷信かよ」
マーズは、やりきれない怒りを伝説に向ける。そして、身軽にジャンプして穴を出る。
「でも、この穴は何だろ？」
リトは、穴を覗き込みながら呟く。
「どうせ、建築の何かだろ？それよりも、隠し地下室なんか無いって事だぜ？」
泥を落としながら、マーズは言う。
「でも、この穴、変じゃない？」
リトの横に来て、マーズも覗き込む。
「ホントだ」
穴の表面に、うっすらと黒い幕が張っている。その黒い幕が土の色と重なって漆黒を作りあげている様だ。
「これって、やっぱり地下室に繋がるんじゃないかな」
リトは、穴から目を背けずに話す。
「それっぽいな」
マーズも同感の様である。
「よしっ。ここは一丁、気合いで見てみるか。」
マーズは、立ち上がる。
「また入るの？」
「まさか。とりあえず、暗闇と言えば、光だろ？リトちゃん、念の為、離れてて」
リトは、穴から離れる。マーズは、空を見上げて太陽の位置を確認する。そして、左の掌を太陽に向けて、右の掌を穴に向ける。すると、右手が光出す。

「マーズって、ホントに何でも出来そうだね」
横で見てるリトが感心している。
「便利だろ？暗い部屋で二人きりになった時に便――アブねっ！」
マーズに向けて石を飛ばすリト。
「当たったら痛いだろ！？」
「くだらない下心を話すのが悪いのっ」
リトは、ツンと横を向く。
「冗談も言えねぇ…（涙）…ん？」
マーズの変化に気が付き、リトが近寄り穴を覗く。
「マーズ。やっぱりこの穴、変だよ」
マーズの表情が変わる。穴を見ると闇は光を受け入れる事なく闇を築きあげている。
（光の意味が無いのか？）
マーズは、光の出ている右手を見る。確かに光は穴を照らしている。しかし、闇は変わらない。
「この幕のせいか」
よく見ると、光は幕で反射している。
「何なの？この幕は」
「さぁ？確実に言える事は、ただの穴じゃないって事だな。」
（嫌な予感がビンビンしてるぜ…）
マーズは、自分の直感で感じていた。この穴が、一連の災いをもたらした事象と関係している事を。
「マーズ、お兄様の事は心配だけど…とりあえず、一度、この場所を離れない？」
どうやら、リトも危険を感じている様だ。
「そうだな。瞬間移動と行きたい所だが…限界越えちまったみたいだ」
「マーズ？」
マーズの右手の光が次第に小さくなっていく。
「俺の力って、体力に比例してっから、使い過ぎるとダメなんだわ」

マーズは、座り込んでしまい動けない。
「何で、そんな大事な事を早く言わないの！？」
リトは、何とかマーズを立たせようとする。
「リトちゃん、とりあえず先に神殿に向かってくれ。俺は、チコッと休んだら瞬間移動で追い付くから」
リトの脳裏に兄・ヤーヴェの最後の言葉と映像がよぎる。
「…いや…絶対に行かない！絶対にいやっ！」
叫びながら、リトはマーズの胸に飛び込む。
「リト…？」
マーズは、突然のリトの取り乱しに息を呑む。リトから返事はなく、震えながらマーズにしがみついている。
（兄ちゃんを思い出したのか…）
マーズは、そんなリトを優しく両手で抱え込む。いや、その位の力しかマーズには残っていなかった。
「わかった。じゃぁ、俺の革ジャンの裏ポケに携帯があるから取ってくれ」
リトの耳元で囁く。一瞬、動きが止まるリト。そして、ゆっくりとマーズの方を見る。
「携帯…？どうするの…？」
リトは、思考回路が止まった様に聞き返す。
「仲間に連絡をするのさ。」
「私だけを連れて行かせるの？」
「いや。俺も一緒に連れて行って貰うぜ。約束だろ？兄ちゃんを探し出すまでは協力するぜ」
マーズは、リトの頭を撫でる。柔らかくしなやかな栗色の髪は、手に心地好い感触を与えた。
「マーズ、ごめんね」
リトは、マーズの胸に埋もれたまま、か細い声で言う。
「謝る事なんかねぇぜ？仲間来たら、自慢になるしな。こんな美人と知り合いなんだってな」

マーズは、ニンマリ微笑む。
「ありがと」
リトは、マーズの方を向く。二人の距離は近い。
「リト…」
マーズが顔を近付ける。二人の唇が重なろうとした時――
「ダメっ！」
リトは、マーズを押し返す。
「えぇ～…またぁ？」
力が入らないマーズは、そのまま穴に落ちる。
「マーズ！？」
慌てて穴を覗き込むリト。
「リトちゃん…実は小悪魔？」
マーズは、穴に、二度のダイブとリトに転がされてる自分の惨めさに泣きそうだった…

ようやく這上がったマーズは、携帯でクレス将軍に連絡を取った。
「マーズか。」
「マーズです。神殿に向かう途中で東の宮殿での爆発があり、調査するも、原因の特定は出来ませんでした。」
「先程、特殊部隊をそれぞれの宮殿に配置した。今の所、異常は無いようだ。」
「さっすがぁ。俺が見込んだ男だけの事はあるな」
「お前が言うセリフじゃないだろ。それよりも一緒にいる女は、カインの弟子か？」
「女ってよくわかりましたね（汗）」
「お前が任務から反れると必ず、女絡みだからな」
「恐れ入ります。ちなみにカインの弟子というよりも、カインの所のシスターです」
「なるほどな。弟子の方は？」
「捜索中でしたが、予期せぬ事態が発生した為、連絡しました」

マーズは、穴を覗く。相変わらず、漆黒の闇が映る。
「予期せぬ事態？」
「穴です。光を反射する穴です。東の宮殿の跡地から出現してきました」
「…すぐに、その場所から離れろ。今、そっちにダガースを向かわせているが、あと十分はかかる」
クレスの声が興奮を帯ている。
「了解。」
マーズは、携帯を切る。
「さぁて、仲間も来てる様だし行くか？」
非常事態を悟られない様に明るい声で言う。フラフラしながらも重い体を無理矢理立たせる。
「マーズ、大丈夫なの？」
その姿を見て、リトが心配そうに手を貸す。
「少し休めたからな。さ、行こう」
マーズは、歩き出した。リトは、マーズが倒れない様に、しっかり体を押さえている。
「何処に向かうの？」
「とりあえず、神殿を目指す。恐らく、神殿の方向に向かえば、一本道だから仲間が発見してくれるんじゃねぇかな？」
マーズは、後ろの穴を気にしながら歩く。クレスが急に退却を命令する事など一度もなかった。いや、クレスに退却の文字は無いと思っていただけに、それをさせる『穴』とは何だったのか？疑問を残したマーズは、歯がゆさを感じていた。

～仮想世界～

東の宮殿を去って、歩く町並みは、いつもと変わらなかった。
「あんな大きな爆発があったのに、何で、皆、普通なのかしら…？」
リトは、不思議そうに呟く。
「関係ねぇ――って事は、ねぇもんな」
マーズも同感のようだ。さすがに、宮殿が潰れて消えたら、気が付く者がいてもおかしくはない。むしろ、気が付かないはずがない。
しかし、人々は日常の生活をしている。マーズは、一人一人を注視するが、変わった所は無かった。
「リトちゃん怒らないでね」
「何で？」
突然のマーズのセリフに意味を理解していないリト。
「そこのカワイイおねぇさん♪一緒に楽しい大人の遊びしなぁい？」
マーズは、横を通り過ぎそうな女性にナンパを仕掛ける。リトは呆然と見ているが――

ドン！

思いきりマーズを突き飛ばす。マーズは、前へ弾かれる。
「怒るなって言ったのに…よしっ…すんませぇ～ん♪」
マーズは転ぶのを利用して、前から来る女性に抱きつく作戦らしい。
「マーズの馬鹿っ！（怒）」
リトから、罵声が出る。
「あれ…？？？？？」
マーズが女性に触れる事はなかった。何故ならすり抜けたからだ。
そして、地面とキスをする。
「マ……ズ？」
「いてて…ど、どうなってるんだぁ…！？」
リトは、すかさず、過ぎて行った女性を追い掛ける。
「すいません」

肩を触ろうとしたが――すり抜けた。
「やっぱり！」
「マジかよ？」
リトは、他の人にも触れてみる。しかし、ここにいる人間は、全て実物ではなかった。
「どうなってるんだぁ！？」
何が起きているか全くわからずに、リトは動揺する。
「こいつら…生命反応がねぇ」
マーズが真剣な顔で分析する。
「死んでるの？」
「それはわからんけど、いわゆる幽霊ってヤツさ」
「幽霊？」
リトは、周りを見てマーズにしがみつく。
「さっき、散々、すり抜けるのを確認してたのに今更…？（汗）」
「幽霊だって知っていたら、触らなかったもん」
マーズの冷ややかな目に動じる事はない。それよりも近寄って来ない様に、警戒をしている。
「リトちゃん、爆発以前に変な事がなかったか？全ての始まりは、そこの様な気がするぜ」
マーズは、リトに切り出す。兄の事を考えて、避けて来たが、そうも行かなくなったようだ。
「…祭壇がある部屋で全てが始まったの」
リトは、一瞬、躊躇するが、起きた事を話し出す。
「祭壇の神像が全て、縦に切られていたわ」
「切られていた？あれって特殊合金だろ？」
「うん。でも縦に綺麗に切られていたの。何で切ったか分からないけど」
「縦に綺麗に…ねぇ」
マーズは、想像する。
「司祭様が言ったわ。とうとうこの日が来た、と」

「この日？今日は何の日だっけ？」
「経典に因ると『天地明暗』の日らしいけど…」
「天地明暗って、天と地が別れて、空は天に、地は奈落にってヤツか？」
「そう。司祭様が最後に私に言った言葉が、人間に善悪がある限り、天使と悪魔の戦いも終わらない――だったわ。そして、司祭様は、祭壇部屋に入って行き、説教が聞こえて、光がドアの隙間から見えて…」
「よくわかったぜ。サンキューな」
マーズは、リトが辛くなってきたのを悟り、話を終わらせる。
「ちなみに祭壇があった部屋は、さっきの『穴』の所か？」
「違うと思う。マーズが立ってる所が祭壇だったはずよ。太陽と位置確認したから、間違いないと思う。」
「なるほど。あの一時間な…。じゃ、あの『穴』の真上は何処になるんだ？」
「多分…司祭様の部屋の下だと思うの」
「状況が解ってきたぜ。次に狙われる宮殿もな…」
「え？」
「リト、携帯を貸してくれ。早くクレス将軍に伝えないと手遅れになる」
リトは、素早く携帯をマーズに渡す。だんだんマーズの行動に慣れてきた様だ。
「早く出ろ…早く…」
しかし、クレス将軍からのリアクションは無い。
「くそっ！いつもは用が無くても連絡してくる癖に…！」
マーズは、携帯を睨みながら怒る。
「何かあったのかしら？」
その様を見て、リトがクレスを案じる。
「将軍がダメなら、指令室か」
マーズは、諦めてソルジャーのいる指令室に連絡を試みる。電話は、

すぐに取られた。
「マーズ。今何処だ？」
ソルジャーの声を聞いて、多少の安堵を覚える。
「俺の居場所、確認出来ないのか？」
「東の宮殿までは追跡していたが、その後からわからない。」
「やっぱり、そうか。恐らく、地上にはいるが、変な空間に紛れたらしい」
「了解。そっち方面を探ってみる。後、空軍が壊滅した。原因は、天変地異と言った所か」
「空軍が！？…ソルジャー、よく聞いてくれ。次に狙われる宮殿は、南の宮殿だ」
「南？大地の象徴がか？」
「あぁ。詳しく話をしている暇は無さそうだから、単刀直入に言う。今回の一連の事象は、全て終末の時と同じだ。まずは空に因る隔離。次は大地に因る隔離。そして、風に因る無駄の排除。最後は、海に因る全ての洗い流し」
「極め付けが、時の巻き戻しでご破算か…」
「正解。後、クレス将軍に連絡が付かないんだが、どうなってる？」
「俺も連絡が取れない」
「最後の連絡は？」
「南の宮殿に行く――だ」
マーズの緊張が高まる。
「さすが、クレス将軍。気付いていたか…それじゃぁ、まずは、この幻想から醒めるのが優先だな。全てはそれからだ。ダガースはどの辺だ？」
「ダガースなら、東の宮殿付近でうろついている。お前らを見付けられないみたいだ」
「マジかよ！？あそこはヤバイ！すぐに撤退させるんだ！」
「マーズ？…分かった。指令を出そう。また、連絡する」
電話口のソルジャーは、冷静ながらも焦りを隠せない口調だった。

電話を切ったマーズは、一息吐いて、リトを見る。
「ここは異次元なの？」
横で聞いていたリトは、不安な顔で聞いてきた。
「多分な。電波は届くが居場所がわからないという事は、隔離された空間といった感じかな」
「私達、どうなっちゃうの？」
「…心配するな。必ず脱出出来る。近くにダガースもいるしな」
マーズは、ウィンクをする。
「まずは、ダガースに連絡を取ってみるべ」
マーズは、慣れた指で携帯を操作する。
「マーズかぁ？何処だよ？ソルジャーから撤退を言われるし、お前はいないし。意味がわかんねぇぞぉ？」
ダガースの低くて太い声は電話を近付けるとうるさい。だが、どうやら、ダガースは無事だったらしい。
「相変わらず、品の無い声だな」
「フン！品の無い○○○のお前よりはマシだ」
「ばぁか。俺のは、女性を喜ばせる為に磨き上げた成果さ」
「言ってろ。んで、何処なんだよ？」
「東の宮殿から神殿までの一本道だ」
「俺が通った道じゃん」
「その途中で、異空間に迷ったみたいだ。瞬間移動で出られると思うが、体力が切れた。何とか、そっちから探せねぇか？」
「女に精力出し過ぎたんだろ？まぁ、状況は理解した。今から捜索開始する」
「宜しくなぁ」
マーズは、軽い口調で言って、電話を切る。
「ダガースさんって、元気な人なんだね。ここまで声が聞こえたよ」
「あいつは、元気だけが取り柄だからな。俺は、耳が痛くなるから、いつも電話は離してるんだぜ」
マーズは、携帯を使ってゼスチャーをしてみる。

「ぷっ…マーズって、ホントにどんな状況でもジョークを忘れないよね」
「そりゃ、女をリラックスさせるのは男の役目だろ？」
「私をリラックスさせたいの？」
「？」
マーズは、リトの顔をマジマジと見つめる。妖艶な笑みを浮かべている様にも見えるリトも、マーズをじっと見つめる。
「でも、何もしないよ？」
リトの言葉に、崩れ落ちるマーズ。
「てっきり、良いムードだと思ったのに…迂濶だった…」
「私は、そんなふしだらな女じゃありません」
リトは、ちょっと顔を紅くしながら言う。
「俺は、リトちゃんにフシダラになって貰いたい…」
肩を落として呟く。
（表情でここまで読めない女は、初めてだぜ…）
「ねぇ、それよりも、ダガースさん大丈夫かな」
リトは、ダガースの身を案じる。
「あいつは、クレス将軍の特殊部隊でもトップレベルの兵士だ。大丈夫さ。そんな事より、俺よりもダガースの方が気になるのか！？」
マーズはヤキモチを妬く。ダガースの話が出て来た事が、相当に悔しいらしい。
「マーズって、ホンッとに子供だよねぇ」
シラケ顔のリトが言う。
「幽霊を怖がるリトちゃんに言われたかねぇぞぉ！？」
「幽霊は、大人だって怖いもん！」
「ってか、忘れてない？俺らの周りを見てみ？」
ギクッとなり、背筋が伸びるリト。油が切れたロボットの様に、ぎこちなく周りを見る。何食わぬ顔で行き来する人々。そして、一点で目が止まる。
「ま、ま、マーズ…」

「あん？」
リトのどもり具合にニヤニヤしているマーズ。
（やっぱり俺の方が大人だな）
マーズは、余裕を見せながら、リトが向く方を見る。
「げ…」
その視線の先を見て、マーズの顔色も変わる。
「あ…あれも幽霊なのかな…？」
「幽霊じゃなかったら、嫌だな…いや、幽霊であっても嫌だな…」
二人が見つめる先には、狼の様な顔に人間の胴体。足は四足歩行。
手には剣と盾を持っている。つまり、現実にいないであろう生き物が、二人を見ている。
「とりあえず、どうする？リトちゃん？」
「私は逃げたい…それが出来ないなら、眠ってしまいたいわ…」
マーズの後ろに周り込み始めるリト。
「わかり易い方向性を示してくれて、ありがと。お嬢さん、その行動は、頼りにされていると解釈してもいいのかな？」
マーズは、不適な笑みを浮かべながら、リトに質問する。
「動けない人に頼りたくないけど、マーズしかいないんだもん」
リトは、マーズの肩から、こっそりしながら、異生物を伺う。
「やっぱり、とりあえずなのね…（涙）あ――――――――っ！！！！！！！！！！！」
「！？」
奇声を上げるマーズに驚く、リト。
「やぃ！化け物！今日の占いで、俺はラッキーだったんだよ！なのに、ロクな事がねぇ！ちったぁ、同情して消えろっ！」
マーズは、今日1日、トラブルに見舞われたストレスを爆発させる。
（やっぱり、マーズって…いつも、このノリなのね…）
リトは、マーズの後ろから顔を覗き込む。
「………」
異生物は、反応しない。

「あれ…？もしかして、ただの飾りか？」
マーズは、辺りをチラチラ見る。そして、石ころを手に取って、異生物に投げつけてみる。
「マーズ！？」
触らぬ神に祟りなし――リトは、石ころが届く前に目を閉じる。
「どうやら、興味はあるけど、接触はしない感じだぜ？」
マーズの言葉に、恐る恐る目を開ける。異生物は、同じ場所から見ているだけだった。
「何でいるの？」
「さぁ？暇だから、困ってる俺らを見物に来たんじゃないか？」
「何か、よく見ると…私達を見てる感じがしないんだけど…」
「そうか？」
マーズは、目を凝らして見てみる。確かに少し上を向いている様に見える。マーズは、その方向を見てみる。
「時の神殿…？」
マーズ達の遥か後ろには、時の神殿が、そびえたっていた。
「ねぇ！神殿のてっぺんに人がいるわ！」
リトは、指を差して促す。
「ホントだ。しかも、女か？」
はっきりは見えないが、剣らしき武器を持った、髪の長い女性に見える。彼女も、こちらを見ている様に見える二人であった。

「グガァァァァー！！」

突然、異生物が雄叫びをあげる。焦る二人。
「リト！俺の後ろから動くなよ！」
マーズは、リトをかばう様に後ろに手をまわす。
「くそ…前には化け物で後ろには得体の知れないヤツかよ…！」
異生物は、後ろ足で地面を蹴って砂を巻き上げる。
（来る！）

マーズが思ったと同時位に、異生物は動き出した。
「マジ！？」
一瞬だった。異生物は、三十メートル程の距離を一気に駆け抜けて、マーズ達の前に姿を現した。その目に感情は無い。
（ヤバイ！）
異生物が剣を振り上げる。マーズは、ありったけの集中をする。剣が振り下ろされる。剣は、地面に突き刺さった――

「はぁ…はぁ……アッブねぇ！」
マーズとリトは、現実世界に戻って来た。
「ここは、現実…？」
リトは、何が起きたか理解出来ずにいる様だ。
「あぁ。はぁ…ありったけの…力で脱出…はぁ…出来たみたいだぜ？」
マーズは、途切れ途切れの息遣いで話す。
「マーズ、大丈夫？」
「何とか…はぁ…仮想世界は…懲りたぜ」
「また助けて貰っちゃったね。ありがと」
リトは、マーズの頬にキスをする。
「○△□！？」
不意打ちのキスに動揺するマーズ。リトは、しおらしくモジモジしている。
「くっそぉ！俺とした事が！一瞬過ぎて、何も出来なかったぁ！」
「何もしないでいいから…」
リトは、悔しがるマーズに呟くが、その声は届かなかった…
「リトちゃん、もう一回ダメ？」
マーズは、人指し指を立てて懇願する。
「ダメ」
「お願い」
「嫌よ」

「頬がダメなら、唇でもいいんだけど」

パシィ～ン！

リトの平手がマーズの唇に飛ぶ。

「終わり！」

「そ…そんなぁ～…」

マーズは、口を押さえながら、完全にノックダウンしていた。

～女兵士～

「ドルシェ。司祭の護衛を頼む」

「了解。クレス将軍、緊急指令が司祭の護衛なんですか？」

迷彩の軍服を身に纏い、栗色のショートカット。長い脚を組んでソファに身を預ける女性。切れ長の目は、銃の照門と照星のピントを合わせながら言う。

「そうだ。今回は、今までのミッションとは訳が違う。武器の確実な手入れをしておけよ」

クレスは、そう言って、部屋を出る。

「将軍が、あんなに緊迫しているのも珍しいわね…」

ドルシェは、クレスの後ろ姿を見送りながら呟く。テーブルの上に置いてあるランチャーを背中に背負う。

「将軍！磁場が揺れ始めました！何かが地下から迫っているようです！」

個室に用意された部屋には、沢山の機械が並んでいる。

「来たか…！磁場の歪みが激しい所が、敵の出現場所だ！攻撃態勢に入れ！」
「了解しました！磁場の歪みが一番激しいのは、祭壇の間と思われます！緊急指令、緊急指令！Ａ班は、直ちに攻撃態勢に入れ！尚、ガスマスク・特殊スーツの着用を怠るな！」
クレスは、外を眺める。
「将軍！私も祭壇の間へと出撃致します！」
兵士は、敬礼をして走り出す。
「ここまでは、順調と見るべきか…ん？…まさか…！」
クレスは、何かを思い、顔色を変えて走り出す。そして、宮殿入り口ドアを勢いよく開け放つ。
（しまった！）
胸ポケットより小さな端末機を取り出す。画面には『ＷｈｅｒｅＭｅ？』の文字。
「くそっ…！」
クレスは、中へと走り出した。

「司祭様、どうかなさいましたか？」
外を眺める司祭に、ドルシェは話掛ける。司祭の部屋でも拳銃の手入れをしている。
「外がいつもと違う気がしまして…気のせいですかな…」
司祭は、ゆっくりと椅子に腰掛ける。
「ドルシェさん。あなたは、女性でありながら、何故、兵士に志願を？」
ドルシェは、拳銃の手入れを止めて、司祭の方を振り向く。
「たまたま兵士という職業に就いただけですわ」
ドルシェは、澄まし顔で手入れを再開する。
「そうですか。私は、ドルシェさんみたいな方を見ると自我を保つ事が出来ません」
「？？」

ドルシェは、司祭の異変に気が付き、拳銃の手入れをやめる。
「人間の根底にある物は、欲望です。人間から欲望を取り除く事は出来ません。何故なら…人間は人の欲望から生まれたからです…」
「司祭様？大丈夫ですか？」
ドルシェは、訝しげに司祭を見る。さっきはあった、司祭の手と足が見えなくなっている。
「…お前は、かつて、地上に君臨した女王に似ている…私を地獄に落とした憎き存在…辱めて我の子を孕ませて、その子供ごと喰らってやるわ…！」
司祭の声が変わり、顔の肉が、溶ける様に落ちていく。しかし、ドルシェは動揺しない。
「エロい化け物が正体だったのですね。」
躊躇する事なく弾丸を撃ち込む。
「あら？やっぱり効かなかったみたいね」
弾丸は、間違いなく司祭の心臓を貫いた。しかし、司祭は、倒れる事もなく、それ処か、全く効いていない。
「無駄だ。我の肉体は不滅なり」
司祭は、ドルシェを睨み、ゆっくりと動き出す。
「確かに、無駄玉を使ってしまいましたわ」
ドルシェは、焦り一つ見せない。そして、素早く左手でホルダーから違う拳銃を取り出す。
「魔物には魔物専用じゃなくちゃ失礼でしたわね」
そのまま左手で頭を狙い撃つ。轟音一発。
「ぐふッ」
鈍い声と共に司祭の顔が吹き飛ぶ。同時に動きが止まった。
「終わり――じゃないですわよね？」
続け様に弾丸を撃ち込む。轟音四発。
弾は、胴体に四発とも命中した。
「魔物って、ホントに粘着気質ですわね。嫌になりますわ」

ドルシェは、右手の拳銃をしまうと、手際良く、背中のランチャーを取り出す。女性とは思えない程の動きと装備だ。そして、顔の無い司祭の変わり果てた姿に向かって狙いを定める。
「これで終わりにしましょう」
ドルシェは、ランチャーの引き金を引く。
司祭の体は、破裂して砕け散る。
「おやすみ。エロ司祭様」
その様を見ても冷静なドルシェ。
「これで、終わりと思う…ブシャ！」
ドルシェのランチャーが炸裂する。
「言ったはずよ。おやすみって」

「ドルシェ！」
クレスが勢い良く部屋へ入ってくる。
「あら？将軍、どうなさいました？」
「……。司祭は、手遅れだった様だな。ドルシェ、気を付けろ。真打ち登場はこれからだ」
「真打ち？どういう事ですの？」
「我々が着いた時には、この宮殿自体が、既に堕ちていたという事だ」
「そんな事だろうとは思いましたわ。司祭がアレでしたし」
ドルシェは、司祭の聖衣の切端を見つめる。
「将軍！Ａ班壊滅です！」
不意に兵士が走り込んで来る。
「総員、撤退を命令する」
「将軍…！？撤退ですか！？」
兵士は、クレスの撤退の言葉に動揺する。
「撤退だ。直ちに総員、西の空き地に撤収だ」
「了解しました！」
兵士は、走り去る。

「ドルシェ。命がけの任務になるが許せ。これ以上、犠牲は出せん」
「私の命は、とうの昔に将軍に預けましたわ。華やかに優雅に散れれば本望なのですよ？」
ドルシェは、何処までも冷静さを失わない。
「戦場の貴婦人とは、良く言ったものだな」
「『戦場』は余計ですわ」
ドルシェの余裕に、クレスは笑みを溢す。
「さぁ、化け物退治と行くか」
クレスは、走り出す。ドルシェは、後ろを付いて行く。

二人は、祭壇の間に着いた。ドアを一気に蹴り破る。
静けさが空気に乗って耳を刺激する。祭壇の間には、兵士の骸が転がっているだけで、化け物らしき存在はいない。
「何処に出掛けたのかしら？」
ドルシェは、ゆっくり辺りを見回す。
「見えないが、確実にいる。化け物の悪臭が充満している」
「悪臭だけは止めて貰いたいですわ。」
「…！来るぞ！」
クレスの声が部屋に響く。ドルシェは、素早く拳銃を取り出す。二人は、背中合わせになり構える。
「上だ！」
二人は、前に飛込む。二人がいた場所に、黒い物体が落ちてくる。

「フぅー…フぅー…フぅー…」
それは、二メートルはありそうな、真っ黒な『ネズミ』だった。
「まぁ、可愛くない事…」
ドルシェは、嫌そうな顔で化け物を侮蔑する。
「ドルシェ、油断するなよ！」
クレスの激が飛ぶ。『ネズミ』は、クレスを睨み付ける。
（来るか！）

『ネズミ』は、一気にクレスの前へ到達する。
（早い…！）

『どごぉぉぉーん！』

轟音と共に、クレスの頭上にあった『ネズミ』の頭が吹き飛ぶ。
「ネズミは、レディーファーストって言葉を知らないみたいね」
ドルシェは、ランチャーを肩に掲げて、再度、トリガーをひく。
爆音が鳴り、今度は腹に風穴があく。
「ドルシェ。俺が死にそうだぞ？」
『ネズミ』の風穴から、顔を覗かせてクレスが言う。
「あら？将軍なら避けて頂けると思っていましたわ」
ドルシェは、更に撃ち込む。右足が吹き飛ぶ。
（こりゃたまらん！）
クレスは、横に飛び避ける。
そして、ランチャーを取り出して、ドルシェに加勢する。
二人のランチャーの轟音が静まると『ネズミ』は、原型を留める事なく散っていた。
「一匹目は、終わりの様だな」
クレスは、ランチャーを背中にしまいながら言う。
「将軍。二匹目ですわ」
ドルシェは、部屋を確認しながら、訂正する。
「そうだったな。さて、次はどんな化け物だ？」
二人は、均等の距離を保ちながら、周りを見渡す。
「あら。次は『巨大コウモリ』かしら？群れる習性なんて正にって感じですわね？」
ドルシェは、天井を見つめながら言う。
「上だけじゃないみたいだぞ。下にも何匹…いや、何十匹かいるな…恐らく『ネズミ』だ」
床を見るクレスの額からは、汗が滴り落ちる。

「キィ――――――――！」
天井にぶら下がっていた『巨大コウモリ』が、一斉に襲ってくる。
「上は任せるぞ！」
クレスは叫び、床から這い出てくる『ネズミ』にランチャーを発射する。
「ネズミよりは、好きなタイプですわ」
ドルシェは、右肩にランチャー、左手に魔弾銃を構えて、トリガーを引きまくる。次々に倒れ落ちる『ネズミ』と『コウモリ』。二人のトリガー捌きは、尋常ならぬスピードだった。
「うっ！」
しかし、巨大コウモリの猛攻に、とうとうドルシェは、腕を爪で斬られる。
「いったいわねぇ！」
ドルシェは、違うコウモリをランチャーで撃ちまくりながら、傷を追わせたコウモリを、魔弾銃で確実に殺す。どうやら、傷を付けられるとキレるタイプらしい。
一方のクレスは、ネズミが完全に這い出る前に、頭を潰して確実に床下で処理している。
「こりゃ、モグラ叩きだな」
クレスは、真剣にジョークを飛ばす。
「将軍、うらやましいですわ。こちらは、大量の円盤射撃ですわ。私、さすがに頭に来ましたわ」
ドルシェは、そう言って、思いっきりジャンプする。そして、コウモリの大群の中に消えて行く。
「充分、楽しんでいるな」
クレスは、ドルシェを見る事なく射撃に集中する。
『スパ――――ン！！』

何かが弾ける様な音がする。『巨大コウモリ』の大群は、一斉に地面に落ちた。そして、『巨大ネズミ』は、全て消滅した。
「！？」
さすがにクレスは、顔を向ける。
（あいつは、何の霊を呼んだんだ…？）
ドルシェは、霊を自分に憑依させる能力がある。憑依させる事によって、霊の持つ能力を使う事が出来るのだ。しかし、ドルシェの性格的に憑依が我慢出来ないらしく、滅多に使う事がない。
クレスが見る先には、光のオーラを纏い、栗色の長い髪がなびく女性がいた。右手には、細く長い剣を持ち、背中には、両端に鋭い刃の付いた槍を背負っている。切長の瞳は、力強くも優しい愛に満ちた目をしていて、祭壇の間に置いてある神像を見つめている。ドルシェに負けない位、細くしなやかだがグラマラスな体型の女性が、地面に降り立った。その様は『女神降臨』と言っとも過言でない輝きを放っていた。
「まさか、私の受け皿が此処にいるとはな…」
女性は呟く。
「ドルシェじゃないのか？」
ドルシェに似ているがドルシェじゃない。クレスは、訝しげな顔で聞く。いつもなら、精神だけはドルシェのままだが、今回は、存在が消えているようだ。
「ドルシェ？あぁ、受け皿か。大丈夫だ、安心しろ。ちゃんと生きている。私は、エイシス。遥か昔に大陸を生きた者だ。」
「…」
クレスは、驚愕したまま動けない。
「本来なら、物質化した物には触れる事は出来ないのだが、受け皿が居たおかげで、戦える兆しが見えてきた。感謝する」
「戦える？何と戦うんだ？それよりも、お前は、霊じゃないのか？」
「私は霊じゃない。神格界と現格層の間で生きていた。まぁ、この世で言う、転生の準備をしていたのだ」

「転生！？理解し難い話だな」
「とりあえず、あちらさんの相手だ」
エイシスは、神像の方を見る。クレスも吊られて神像を見る。
「なっ…！」
神像は無くなり、そこには、二本の大きな角を持ち、赤い目と鋭い牙を剥き出した怪物がいた。その肉体は、隆々とした筋肉が力をみなぎらせ、太い右手には、人間では持てないであろう大きな斧が構えられていた。怪物は、二人をじっと見ている。
「まだ、いたのかっ！」
クレスは、ランチャーをぶっ放す。怪物は、砲弾を素手で受け止めた。クレスは、怯まずにトリガーを引く。一発、二発、三発…尽く素手で遮られた。
「くそっ！」
クレスは、届かぬ砲弾に苛立つ。クレスを見ている怪物が笑った様に見えた。
「人間の無駄なあがきに興味ない。今欲しいのは…お前の肉だぁ！！！」
怪物は、クレスに一気に詰め寄る。そのスピードは、ネズミとは比較にならない。
「頂きまぁす」
クレスは、動くどころか考える事も出来ない。巨大な斧が降り下ろされる。

『ガキッ！』

斧とクレスの間に細く長い剣が入り込む。エイシスだ。彼女は、剣を間に刺し込みながら、空中で宙返りをする。
「お前に食わせる肉はない」
「ぬぅ…やはり貴様か…奈落の女神…！」
怪物が睨む先には、剣を抜きながら着地するエイシスがいた。

「そう思うなら、私から始末するべきだったな」
「お前は我等と同じ身でありながら、何故に我等の邪魔ばかりをする？」
「…」
「応えよ！奈落の女神――エイシスよ！」
「簡単な事だ。私の遊び場をお前らに荒らされたくないだけだ」
「人間ごときの肉体を支配しただけで、図に載るなぁ！」
怪物は、エイシスに向かって突進する。
「お前じゃ話にならん」
エイシスは、振り向き様に剣を一文字に振るう。怪物の動きが止まる。
「お…おのれぇ…必ず…存在を…ぐはっ！」
クレスの前で左右に割れていく怪物の間から、エイシスの姿が映し出される。
「何て強さだ…」
ランチャーの砲弾を尽く止め、尋常じゃないスピードで簡単に自分を殺そうとした圧倒的な怪物を瞬殺したエイシスに驚嘆する。
「キリがないな」
エイシスの言葉に後ろを振り返ると化け物の大群が祭壇の間を埋め尽す。
「これ程とは…！」
クレスは、ランチャーを構える。
「私に任せろ。」
エイシスがクレスを制する。
「？」
クレスの横を歩きながら前に出る。そして、剣を顔の前で横に突き出す。
「退け！魔に見魅いられた神々よ！」
「神々！？」
エイシスの剣が光り出す。眩しい程の輝きを放つ剣を、一気に振る

う。光りの閃光弾が怪物達を喰らう。強烈な地響きと轟音がクレスの五感を奪う。

「現格層に戻ったぞ」
エイシスの声で目を開けるクレス。目の前は、壁が崩れ、外と直通になっている。呆然と見つめるクレス。怪物達は、影もなく消えていた。
「私は、行かねばいけない所がある。ドルシェに代わろう」
「待て！」
クレスは山程の謎を聞こうとしたが、エイシスは、一瞬の閃光と共に消えた。それを見て、呆然とするクレス。
「…将軍？大丈夫ですか？」
クレスは我に返る。
「ドルシェか？」
「見ての通りですわ」
「エイ…憑依させた女はどうした？」
クレスは、周りを見渡すがエイシスの存在は無かった。
「強い気力を感じたから、憑依させたんですけど、記憶がありませんわ。あんなの初めてですわ。でも居心地が良かった様な…」
ドルシェは、全く覚えていないらしい。
「エイシスに似ている…謎だらけだな…」
ドルシェを見るクレス。エイシスとドルシェが、余りに似ているのは偶然か？エイシスとは何者なのか？そして、魔に見いられた神々とは…？クレスは、多くの謎を抱きながら、外に向かう。
「エイシスって誰ですの？」
「…」
クレスは、ドルシェの質問が聞こえない程に思い更ける。
「ドルシェ。他の宮殿が気掛かりだ。行くぞ」
「…はい。ここはどうしますか？」
「我々が着いた時には、既に異空間に紛れていた。司祭も死に何者

かの手に落ちていた。つまり、手遅れだったという事だ」
クレスは、拳に力を込める。
「無駄足だったという事ですか？」
「そうとも言い切れないがな…」
自分を助けたエイシスを思い出す。
「将軍？」
遠い目のクレスに気が付くドルシェ。クレスは、何も言わずに歩き出す。ドルシェは、後を付いて行く。不意に止まるクレス。
「やはり…」
クレスの目の前には、撤退した兵士達の骸が転がっていた。
「ひどい…」
ドルシェは、その光景を目にして怒りを覚える。手足が散乱し、食い千切られた体は、骨が痛々しく見えてる。泣き叫ぶ者もいたであろう。恐怖に身を委ねた者もいたであろう。
「今回は、収穫もあった。だが、完全に私のミスだ。許せ…友たちよ…」
ドルシェには、クレスが涙を流している様に見えた。クレスは、拳に力を込める。
「時代とは、多くの犠牲の上に成り立っている――という事なのか…」
「将軍？」
クレスは、兵士の骸を黙って見詰めていた。

～奈落の女神～

「ん…ん！？」

マーズの目に、リトの顔が下から見える。
「良く寝れた？」
リトの優しい笑顔が入り込む。
「もしかして…寝てた？」
マーズは、起き上がる。
「ぐっすり寝ていたよ」
「しかも、リトちゃんの膝枕？」
自分の頭があった所を見る。
「あの後、すぐに寝ちゃったからね」
リトは、照れ隠しをする。
「また失敗したぁ～（泣）ってか、大丈夫だったのか？」
「とりあえずは、何にも無かったよ。ただ、ダガースさんが来てないの」
マーズは、周りを見てみる。
「なぁにをやってんだかぁ…クレス将軍が聞いたら泣くぜぇ」
愚痴を溢しながら、携帯を取り出すマーズ。相変わらずの手際で携帯を押す。電波が届かない。
「おかしいなぁ。またかぁ？」
マーズは、起き上がり一本道を見渡す。
「またって…変な空間の事？」
リトも立ち上がり、マーズに寄り添う。
「可能性は高いな…」
マーズは、携帯をしまい、リトの左肩を抱き寄せ歩き出す。
「マーズ…」
完全に不安な状態に陥るリト。また、あの怪物が出て来たら、生きていられるのだろうか？もう永久に戻れないのかも…不安が手に籠り、マーズのシャツを握る力が強くなる。
「安心しろ。さっきは燃料切れで無様な姿だったが、今度は違うからよ」
リトを抱くマーズの左腕は、しっかり離れない様に引き寄せていた。

「…うん…」
（今は、マーズを信じよう）
リトは、その言葉、行動に身を委ねた。
「ったく。ムードが良くなると現れやがる」
マーズは、右手を前に出す。リトには、何も見えていないらしく、キョロキョロしている。

『ドゴォォォォォン！』

マーズの手から、何かが光ながら飛んで行く。そして、何も無い場所で爆発する。
「なに？」
リトは訳がわからずにしがみつきながら、爆発した方向を見る。
「出て来たぜ」
マーズは、立ち止まる。その先には、あの怪物がいた。
「あ…」
言葉に詰まるリト。
「リトちゃん？俺から離れるなよ？」
マーズは、そう言うとニヤリと笑う。
「やぃ！化け物！さっきの借りは返してやっから来なっ！」
怪物を挑発する。マーズの手には、炎が踊っている。
（お兄様と同じ！？）
リトは、マーズの手の平を見ながら驚いている。目の前に、陰が走る。怪物だ。またもや、恐ろしいスピードで間合いを詰めて来た。
「おせぇよ」
マーズは、一言吐いて右手を怪物に向ける。
「！」
怪物の表情が一瞬変わったのを見逃さなかった。
「遅いんだって（笑）」
炎が怪物に向かって走り出す。

「グゴォォ――――！」
悲鳴にも聞こえる声をあげる。
「まだだぜ？」
続け様に手の平を、一旦、閉じてまた開く。すると、今度は先程の光が飛び出す。今度はリトは、しっかり見ていた。まるで、光の矢のように見えた。矢は、近距離で怪物の喉元に刺さる。
「ストライク♪でも、怒りのマーズ君は、三倍返しが基本だからね♪」
マーズは、おちゃらけながら怪物を睨む。
「ハァァァ――――」
マーズは、気合いを溜める。
「消えろぉ――――――――っ！」
叫びと同時に、怪物の地面から何本もの光が火柱の様にたつ。そして、先端が一気に怪物に襲いかかる。
「グギャ――！！」
地面をえぐる様に潜り混んで行く光の柱に、怪物も連れて行かれる。
怪物は、マーズを見ている。
「体力戻れば、敵にもなんねぇな」
怪物と目が合いながら、マーズはサラッと言う。リトは、言葉も出ずに眺めている。光と怪物は、二人の前から完全に消えた。
「な？余裕だろ？」
マーズは、ウィンクをして見せる。
「お兄様と同じ術が使えるの…？」
リトは、今起きた出来事に面食らいながらも聞く。
「ん？火の攻撃か？」
リトは頷く。
「あれは、術っていうよりも、空気中の酸素を燃やして、風に乗せただけ」
マーズは、人指し指を立てながらレクチャーする。
「光は？」

「あれも基本的には一緒で、電気を集約して風に乗せたのさ」
得意気になってくるマーズ。
「むやみに使わないでね」
「あれ？そう来たか」
マーズは、テンションの違いにペースを乱す。
「お兄様も…あんな怪物と戦ってたら…」
リトの表情が暗くなる。
「リトの兄ちゃんは、あんな化け物に殺られる様なヤツか？」
一瞬、動きが止まるが、リトの顔付きが変わる。
「お兄様は負けない！…負けるはずがない！」
その言葉を聞いて、笑顔になるマーズ。
「なら、兄ちゃんは、旅行に行ってる位に思っておくんだな。必ず、リトとの約束は果たしてやっからよ」
得意のウィンク。
「マーズ…」
リトは、マーズをマジマジと見る。
「ちったぁ、好きになってくれたか？」
「全然」
「はぁ～」
リトの即答に頭を抱えるマーズ。
「ねぇ、まだ異空間にいる気がするんだけど…」
リトは、周りを観察する。
「あら、気が付いた？実は、そうなんだよな。さっきの化け物倒したから、戻れると思ったんだけどなぁ」
マーズは、こめかみ辺りを掻きながら言う。
「随分、呑気なのね…」
リトは、マーズに冷ややかな視線を送る。
「いやぁ～、せっかくのリトちゃんと二人きりの世界だ――」
「怒るよ？」
リトは、膨れ面をする。

「冗談です…（・―・；）」
「お楽しみの所に悪いな」
背後からの突然の声に、一気に振り向く二人。そこには、黒いマントを羽織った男がいる。
「また…ありきたりの悪党が出て来たぜ」
マーズは、ウンザリしながら言う。
「悪党？生憎だが、俺には善も悪も無い。それと、マーズ…お前にも用は無い。」
「何で俺の名前を知ってるんだ？」
マーズは、男を睨む。
「リト様。貴方を守る兵士が、こいつだけで心細いと思いますが、どうかお許し下さい。」
男は、膝まづいて頭を下げる。
「リト様…って、どういう事ですか？」
「私は、ハインズと申し上げます。この空間を作り出した本人でございます。」
「はぁ！？」
マーズは、すかさず間に入る。
「突然、出て来て何を訳の解らん事を言ってるんだぁ！？」
切れ気味のマーズ。
「マーズ！話を聞いてあげて」
リトが制する。マーズは、リトの言動に不満そうに引き下がる。
「私は、遠き昔に大陸で生きた者です。長きに渡り、神格界と現格層の間に存在していました。一連の事象は、現格層で言う所の『終末の時』にあたります。しかし、本当の『終末の時』では、ありません。神格界を追われた『背徳の者』達の計画です。『背徳の者』達は、『終末の日』を早める事によって、全ての破壊を求めています。空が破壊され、大地も破壊されました。残る二つも間も無く破壊されるでしょう。そうなれば、五大王のうちの四大王が現格層に降り立ち、時を破壊する事になります。」

「ちょ、ちょい待った。これまでの体験で、あんたの話は否定しない。だが、余りに説得力に欠けてねぇか？」
マーズは、不信感を募らせる。
「私も同感です。つじつまは、合っていますが…」
「ならば、現実をお見せしましょう」
ハインズの言葉に、顔を見合わせる二人であった。

第二部

～時の女王～

「海軍は間に合わなかったか」
ゼビーは椅子に座り込む。
「ゼビー大統領。クレス将軍より連絡が入っています」
「クレスか…」
ゼビーは、受話器を取る。
「大統領。南の宮殿はダメでした」
「そうか。こっちも空軍が壊滅した。原因は雨だ」
「空の崩壊…」
「まだある。鳥の大量死が始まった。インフルエンザという事だが、気にならないか？」
「気流の流れが変わったという事ですか？」
「そうだ。東から西へ被害が拡がっている。そして、鳥は、北へ逃げている様だ」
「北…ですか？」
「恐らく『永久氷海』だ。そして――ウィルスの発生地だ」
「何て事だ…対策は何かありますか？」
「ない。空軍を失った今、残念ながら鳥に追い付ける術がない」
「…私が行きます。何が出来るか分かりませんが」
「…クレス、任せたぞ。私は、これより起きるであろう地震に備える」
「了解しました」
そこで電話は切れた。ゼビーは、すぐに立ち上がり部屋を出る。

「ドルシェ。北へ向かうぞ」
「北…ですか？」
ドルシェは、拳銃の手入れを止める。
「鳥の大群が永久氷海に向かっている。それを食い止める」
クレスは、銃機を装備しながら言う。
「どうやって食い止めるんですの？」
「…分からん。ただ、罪の無い命が消えて行くのを見過ごす訳にはいかん」
「…了解しましたわ」
ドルシェは、目を閉じる。
「さぁ行くぞ」
二人は、足早に小型ジェット機に乗り込んだ。

ゼビーは、指令室にいる。
「いいか。失敗は許されない。速やかに核をバミューダ基地に移動する。陸と海を使って三時間以内だ。一基たりとも残さずに移動するんだ。とりかかれっ！」
「三時間！？大統領！核を積み込むだけで、三時間以上かかります！無理です！」
大統領の側近が騒ぐ。
「いいか。よく聞け。この現格層を揺るがす大地震が来たら、ここにある核はどうなるかわかるか？」
ゼビーは、側近の胸ぐらを掴んで静かな声で言う。側近は、目を大きくして動きが止まる。
「理解出来たか？この国には、二億を越す人間と、それ以上の数の生き物が住んでる。簡単に見殺す訳にはいかんのだ」
追い討ちを掛けるゼビーの眼差しの先には、核で破壊されて行く街並みが映っていた。
「分かりました…やれるだけの事はやります」
側近は、ゼビーをなだめる様に言う。

「頼んだぞ」
側近から手を離したゼビーは、目の前の机を思いっきり叩く。
「全市民にシェルターへの移動を発令！」
「了解しました！」
指令室の騒然は、更に気を慌ただしくさせる雰囲気を作りあげていた。そんな時に一本の電話が、ゼビーの元へ届いた。
「法王のモーリスです。事態は、把握しております。直ぐに神格界へのコンタクトを試みます」
「神格界へのコンタクトは、司祭が揃わないと無理なのではないのか？」
「この神殿には、司祭クラスならゴロゴロいます」
「そうか！法王、頼んだぞ！」
ゼビーには、希望が見えていた。神格界は、言わば地球の均衡を守る為に存在している領域である。空と大地の均衡が破れれば、風と海が黙っているはずがない。
「神の御慈悲があってくれ…！」
ゼビーの拳に力が籠る。

「本当に鳥がいませんのね」
機内の窓から外を眺めながら、ドルシェは呟く。
「もう直、会えるさ」
クレスは、操縦幹を握りながらセリフを吐く。
「作戦は？」
ドルシェは、向きを戻しながらクレスに問う。
「ドルシェ。幾千の鳥が空を飛んでいて、向きを変えさせるには、お前ならどうする？私は二つしか思い付かない」
「そうですわね…全ての鳥が進行方向を変える様に音で脅すか――壁でも作って通れない様にするか…」
ドルシェは、考えながら呟く。
「恐らく、鳥達は、四方に何ｋｍにも及ぶ範囲に拡がっているだろ

う。更に、身の危険を感じて気が立っている事も考慮すると音や光の効果は薄いな」
「将軍の考えは？」
クレスは、ドルシェをじっと見る。
「一つ目は、煙幕による壁。二つ目は、鳥を威嚇攻撃して我々が囮になり誘導する」
「戦闘機一機対数万の鳥ってのもシャレていますわ」
クレスは、不適の笑みを溢す。
「よし。まずは煙幕作戦。ダメなら誘導作戦だ」
「あら？鳥ですわ。予想以上の拡がりですわね」
外を見るドルシェ。クレスは、機体を上昇させる。
「こりゃ凄いな…ソルジャー聞こえるか？」
「聞こえていますよ。ちなみに衛星からの計測で、幅は五キロ。はっきり黒い影が映っています。数は推定不能です」
「五キロか。よし…鳥の一キロ手前から、赤煙幕を放出する」
「了解しましたわ。それにしても、何故、永久氷海を目指しているのかしら？」
「恐らく、帰巣本能だ。伝説では、あの氷の中に奴らの遠い先祖が眠っているらしいからな。ドルシェ。覚えておくんだ。あの永久氷海だけは溶かしたら不味い。あの氷の中には、多種多様の未知のウィルスが眠っている。これは伝説なんかではなく事実だ」
「未知のウィルス…それじゃ、この鳥達は、人間の仕業のしっぺ返しを喰らってしまったのですわね」
「そういう事だ。何の罪もない生物が死ぬのを見過ごせん。必ず、方向を変えるぞ」
「了解。成功させてみせますわ」
二人は、一点を目指す鳥を見下ろしながら固く誓った。
「神を崇める司祭達よ！時が闇を刻む前に…何としても、神格界に！」

モーリスは、祭壇の上で十数人の弟子に訴えかける。
「しかし、我々は神格界への儀式をしりませんが…」
一人が言う。
「それに我々の法力では、神格界に辿り着く前に――」
「迷うでない。神格界へは、私が行く。お前達は、法力を最大限、この円陣に注いでくれ。そして、道を開いていてくれ」
「モーリス法王自ら神格界に飛込むと言うのですか！？危険です！万が一何かあったら――」
「シャラ――――――――プッ！」
モーリスの叫び声が、部屋に響く。
「良く聞け、我の弟子達よ。今、地上…いや、地球は病んでいる。全ての始まりが…原因が何かは理解出来ん。しかし、屈託の無い子供の笑顔を思い出してみろ。寄り添う夫婦を思い出してみろ。大自然で生きる動物を思い出してみろ。一体、誰が破滅を望む？誰も望んでおらん。弟子達よ…忘れるでない。我々は、地球という舞台で、知らない間に手を取り合って生きているのだ。だから、私は私のやるべき事をする」
モーリスは、円陣の中へと入る。
「モーリス法王…！あなたは、最高の師匠であり、最高の司祭であります！」
弟子達は、涙を流しながらモーリスを見つめる。
「行くぞ。神格界へ！」
モーリスは両手を広げて聖文を唱える。弟子達も祈りを捧げる。モーリスが立つ円陣が光り出す。
「良いか！何があっても、何が起きても祈りを止めてはならぬ！地球を救える唯一の手段なれば、誰にも出来ぬ事をお前達は成し遂げるのだ！」
円陣の光が更に強くなりモーリスの姿が霞んでいく。
「ぬぅぅぅ…」
モーリスの顔が歪む。一層、強くなる弟子達の祈り。

「もうすぐ…もうすぐで…ぐはっ！」
モーリスは、吐血をする。
「モーリス法王！」
弟子の祈りが乱れ始める。
「いかん！祈りを続けるのだ！」
（やはり、四賢者の法力でなければ、円陣が耐えられんのか！）
モーリスの腕が弾け飛ぶ。
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
弟子達は涙が止まらないが、それでも祈りを続ける。最大限の祈りを。そして、一人また一人と息絶えて行く。
「弟子達よ！頑張るんだぁ！」
弟子達は互いに励まし合う。モーリスを包む光が揺らぎ始める。法力が足りない様だ。
「お前達の力はこんな物ではない！私の事など考えず、全ての神経を祈りに捧げるのだぁ！」
モーリスは、すぐに激を飛ばす。その体は、右腕が消え、肌は火傷の様にただれ始めている。
「偉大なるモーリス法王の弟子達よ。よく頑張ったな。手を貸すぞ」
弟子達の間をすり抜けながら前へ出る男。
「あなたは…！コルライ教皇！」
「全ての事象は聞いている。法王は好かんが、地球を想う気持ちは同じだからな。さぁ、一気に行くぞ！」
モーリスと目が合うコルライ。
「まさか、異端と言われるお前に助けられるとはな…」
モーリスは、激しい苦痛に耐えながらコルライを見る。
「私も同感だ。だが、弟子達を見れば、お前が間違えた事をしていない事だけは理解出来る。行ってこい！神格界へ！」
コルライの体から無数の光が飛び交う。
「す…凄い…！」
弟子達は、その凄まじさに驚嘆する。

「まだ始まったばかりだぞ？さぁ祈りを続けるのだ！」
コルライは、弟子達を後押しする。

『そこまでだ――』

誰もが心で聞いた声。
「ぬぅ…？」
コルライが周りを見る。弟子達が全員倒れている。コルライは、それでも祈りを続ける。

『神格界へは行かせる訳にはいかぬ――』

「誰だか知らんが、今これを止める訳にはいかぬ！」
コルライは叫ぶ。
「んぶっ！」
一瞬の出来事だった。コルライの体は、壁に激突する。しかし、祈りは止まらない。コルライの光は、より一層強く光る。
「何が来ようとも退かぬ！」
コルライは、起き上がり円陣の前へと向かう。
「コルライ…！時の女王だっ！逃げろっ！」
モーリスは、叫ぶ。しかし、モーリスの声は届かない。

『無駄だ…エデンを汚した罪を償う日が来たのだ――』

「成程な。封印された『神の歴史』に記された『時の女王』だな。だが、退く訳にはいかぬのだ！」
コルライの光は、一気に爆発する様に膨張する。

『ならば、消えろ――』

倒れるコルライ。
「コルライ！何故、時の女王が…！」
モーリスを包んでいた円陣の光が消えて行く。
「はぁ…はぁ…はぁ…」
モーリスは、ひざまつく。そして、周りを見渡す。動く気配すらない弟子。そして、倒れても微かな光を放つコルライ。よろめきながらモーリスは歩き出す。
「神は我々を見放したのか…？神は罪のない人間の命まで奪うのか…？」
『我は時を支配する者…エデンを汚した罪を償う日が来たのだ…』
モーリスの体を光の矢の様な物が貫く。声を出す事も出来ないまま倒れる。その目からは、涙が溢れ落ちていた。

～偽りの偽りの本物～

「さぁ、これが現実です」
ハインズが指を鳴らすと周りの景色がガラスが割れる様に崩れ落ちる。
「どんな手品だよ」
マーズは、それを眺める。
「あ…あ…」
リトは、崩れた後に出現した景色に言葉を詰まらせる。地獄――崩れ落ちた建物。下敷になった母親の前で泣き叫ぶ子供。血まみれで歩く者。息絶えた者…そして、漆黒の曇と降り注ぐ雨

「どういう事だ…？」
マーズも状況が理解出来ずに立ち尽くす。
「これが現実です。空と大地が崩れた今、制御の効かない破壊が始まったのです」
リトの目から涙が溢れる。
「何故…何故…」
「リトちゃん。しっかりするんだ」
マーズは、リトの両肩に手をかけて揺さぶり抱き締める。
「ハインズとか言ったな。本当に現実なのか？」
「……そうだ」
マーズは、携帯を取り出す。画面は正常の様だ。
（くそ…）
マーズは、電話をかける。
「マーズかぁ？お前ら何処に隠れてるんだぁ？いい加減に頭きたぞぉ！？」
「！？…成程な…ハインズ。そろそろ本当の現実に帰らせてくんねぇかぁ？」
リトは、マーズを見る。
「何を訳の分からぬ事を言っている？これが現実だ」
「あ、そう。じゃ、自力で帰るぜ？」
マーズの手から光の矢が飛びハインズに向かう。
「はっ！」
ハインズは、ジャンプをしてかわす。しかし、次の矢がハインズに襲いかかる。間一髪避けるハインズ。そして、背中から弓矢を素早く取り出し、一気に反撃をする。飛んでくる矢を手で掴むマーズ。
「精霊使いか？」
ハインズは着地してマーズを睨む。
「精霊？どう見ても、そんな高貴な人間には見えないだろぉが」
マーズは不適な笑みを見せる。次の瞬間、ハインズの前から二人が消えた。

「なっ！？」
さすがに驚きを隠せないハインズ。
「逃げられたか…」

「いやぁ～流石に危なかったなぁ」
「今度は本当の世界なの？」
リトは、辺りを見回す。
「あぁ。あの野郎、空間の上に空間を作っていたのさ」
マーズは、汗を拭いながら言う。
「何者だったのかしら？」
「さぁな。とりあえず、悪趣味な性格ってのはわかった」
「最初から嘘を付いていたって事？」
「いや、あれは現実だ。ただし――未来のな」
「どういう事？」
「あそこにいた奴等は、リトちゃんに会う前に出会った町の連中だったからな」
「え？」
「まぁ、宮殿が破壊されたという事を考えれば、予測不可能な事態でもないって事さ」
「そ、そんな…それじゃ、あれが未来だと言うの？」
リトの体が震える。
「まだ、わからねぇさ。未来なんて出来事一つで変わるんだからよ」
リトはマーズを見つめる。
「マーズって、時々、司祭様みたい…」
「あん？俺が？？」
「みぃーっけた！」
突然、太い声がする。
「ダガース！」
リトの目の前には、声の主のダガースがいた。
「い…犬！？」

「正解♪こいつがダガースさ」
マーズは、親指を犬の方へ向ける。
「ハッハッハッ！びっくりしたかい？そう！俺がダガース！皆は、喋る犬って呼ぶぜ！」
「まんまじゃねぇか…」
得意気に喋る犬――ダガースに白い視線を送るマーズ。
「…可愛い！凄い声だったから、もっと怖い人だと思ってた！」
「おい…誉められてるのか？けなされてるのか？」
「気にするな。両方だ。」
マーズは、そっぽを向きながら答える。
「私はリトです。宜しくダガース…さん？」
「ダガースでいいよ」
（とりあえず、元気になって良かったかな？）
マーズは、ダガースになついてるリトを見ながら微笑む。
（なつくのが逆だろ…（ー．ー；））
「よしっ！出発するかぁ？」
マーズは、背伸びをする。
「そうだね。今は、考えるよりも出来る事をしなくちゃ！だよね！」
リトに笑顔が帰ってくる。それを見て、笑顔を返すマーズ。
「何か俺が入れねぇ空気じゃね？」
ダガースは、二人を交互に見ながら呟く。
「お？空気読めるのか、お前？成長したなぁ」
「てめぇ…」
ダガースが、マーズに噛み付こうとした瞬間――
「よく逃げきれたな」
聞き覚えのある声がしてくる。
「またかよ…（萎）」
マーズは、後ろ頭を掻きながら振り向く。そこには、先程のハインズが立っていた。
「一体、何なんですか！？」

リトは、ハインズを睨み付ける。
「リト様。先程は失礼致しました。真実を見せる事で、リト様の心の強さと兵隊の技量を見させて頂きました」
ハインズは、膝まついて詫びる。
「おめぇ、何処までが本心なんだ？」
「マーズ。お前には、先程の映像が、偽物に見えたか？」
「あん？偽物と言えば偽物だが、本物と言えば本物…」
「リト様、申し上げます。今ある現在から導かれる未来が、あれです。しかし、何か一つ事象が起きれば、未来は変わるはずです」
「…」
「あ～。更に言っておくと、背徳者の話は大嘘だろ？」
マーズの突然の言葉に、動揺が隠せないハインズ。
「くっ…そこまで知っていたか…リト様！お願い致します…時の…時の女王を止めて下さい！」
「え？」
リトは、時の女王という言葉を聞いて、驚きの表情を見せる。
「…やっぱりな。背徳者の存在は、俺の部隊がキャッチしていたが、そんな大反れたモンじゃなかったからな」
「おい、マーズ。話に着いていけない俺はどうしたら良いんだ？」
「骨でも食ってろ」
「ほぉぉぉぉ？」

ガブッ！

「いってぇぇぇぇ！何しやがる！このドラ声犬！（怒）」
「のけ者にした貴様が悪い」
ダガースは、そっぽを向きながら言う。
「焼いて食ってやる！」
「おう！かかってきな！スケコマシ！」
「スケコマシだとぉ！？許せん！」

「うっっっっるさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁいっっっっっ！！！！！！！」

声の主の方を向く一人と一匹。
「リトちゃん…目が怖い…（O＿O；；）」
「この犬は…？」
ハインズの興味が、ダガースに向けられる。
「気づいちまったか…フッ…俺は、ダガースだ」
「犬が気取ってんじゃねぇ」
「マーズ？」
リトの拳が見える。
「失っ礼しましたぁ！」
「ダガース！？君は…獣人なのか？」
「獣人！？なんだそりゃ？俺は、昔から喋れる犬だぜ？」
「そのオーラは間違いない。そして、ダガースという名前…転生に失敗したんだな」
「おい。こいつ大丈夫なのか？」
「さぁ？ここまでの点数付けると、かなり危ないヤツだな」
「やはり、神は見捨てていない！リト様！戦いましょう！」
「あの…何一つ疑問が解決していないのですが…」
リトは申し訳ないなさそうに言う。
「確かに」
マーズは、大きく頷く。
『ひゅ～～～～～～～～……』
三人と一匹の間を、木枯らしが吹き抜けた。

～ドルシェの作戦～

「準備は良いか？ドルシェ」
「ＯＫですわ」
ドルシェは、大きなバズーカを掲げて、後部ドアの前に立つ。
「ハッチを開けるぞ」
クレスは、コクピットのボタンを押す。すると、ドルシェの前のドアが開く。
「さぁ、鳥さん。煙幕を避けて、方向を変えてちょうだいね」
ドルシェは、トリガーを引く。巨大な銃口から、赤い煙幕がモクモクと沸き立つ。
「距離は、五キロ以上だと思え」
「大丈夫ですわ。きっちり、六キロ計算していますのよ」
赤い煙幕は、ジェット機の後に壁の様に広がっていく。遠くに黒い物体が見える。鳥の大群のようだ。
「ドルシェ。もう一横断する余裕があるか？」
「大丈夫そうですわ。結構、沢山積んであるのですね、この煙幕」
「この国は、無駄買いが好きだからな」
「あら？鳥が助かれば、無駄じゃなくなりましてよ？」
「どっちでもいいさ。もう一横断に入るぞ」
機体は、旋回をする。
「…？将軍。どうやら、横断させて貰えないみたいですわ」
「ん？何だ？あの生物は？」
「俗に言う『ユニコーン』に私は見えますわ」
二人が乗るジェット機の前方に浮かんでいる物体は、羽の生えた馬であり、額には大きな角がそそり立っている。
「おいおい。怪物の次は、伝説か？」

「伝説の馬に会えるなんて、素敵ですわ」
どうやら、ドルシェは、恐怖とかの感情は持ち合わせていないらしい。
「しかし、一匹で飛行機と勝負しようってのか？」
「将軍は知らないのですか？『ユニコーン』の角は、どんなに硬い物質でも貫き砕いて、高速に近い巡航速度を保てるのですよ？」
ドルシェは、目を輝かせてレクチャーする。
「成る程。つまり、運搬用の小型ジェット機では、歯が立たんという事だな」
「そういう事ですわ」
嬉しそうなドルシェを見て、首を振るクレス。気を取り直して前を向く。
「！？ユニコーンが消えたぞ！」
クレスは、見える限りの視界を確認する。
「機体の真下に着きましたわ」
ドルシェは、人差し指を下に指す。
「ドルシェ…ぐわっ！」
機体が大きく揺れる。
「何とかならないのか！このままじゃ墜落必至だぞ！」
クレスは、懸命に操縦桿を操作しながら叫ぶ。
「やってみますわ。下に向かえに来て下さいね」
ドルシェは、開いたドアから身を投げ出す。飛び出したドルシェの視界に、機体に角を刺そうとしているユニコーンが映る。そして、ユニコーンもドルシェに気が付く。
「ユニコーンさん。私達は、遊んでる暇は余りないのですわ」
ドルシェは、すばやく魔弾銃を構える。そして、一気にトリガーを引く。命中するはずの銃弾を、すばやく避ける。
「まぁ、早い動きです事」
ドルシェは、続け様に撃つ。尽く避けきるユニコーン。ついに、ユニコーンがドルシェに反撃に出る。一気に落下していくドルシェの

下に入り込む。
「串刺しで死ぬのは、綺麗じゃないわ」
一気に首を振り上げるユニコーンの角を掴むドルシェ。そのまま、ユニコーンの背中に乗り上げる。
「さぁ、ユニコーンさん？角を吹き飛ばされたい？それとも、私を乗せてたい？」
ドルシェは、魔弾銃をユニコーンの後頭部辺りに突きつけて選択させる。
「ガルッ…」
ユニコーンは、払い落とそうとするが、全く落ちる気配がないドルシェ。
「言うの忘れましたけど、こう見えて、毎日『ロデ〇ボーイ』で鍛えているのよ？女性は見えない部分には、気を使うものですわ」
「ガ…ル…？」
「良い子ねぇ。さぁ、時間を無駄にした分、ちゃんと働いてもらうわよ？」
「ガル～（涙）」
ドルシェの横にクレスの飛行機が到着する。
「大丈夫か！ドルシェ！」
「見ての通りですわ。ユニコーンさんも是非、協力したいみたいですわ」
笑顔で答えるドルシェ。
「わからんヤツだ」
軽く鼻を鳴らして、ユニコーンを見るクレス。
「どう見ても、服従だな」
ユニコーンの悲しげな顔を見て呟くクレスであったが、気を取り直して前を向く。
「将軍。私に良い考えがありますわ。防弾ネットを使って、鳥さんの進行方向を変えられるかもしれませんわ」
「防弾ネット…か？長さが全く足りないぞ？」

「フフ…ユニコーンさんがいるから大丈夫ですわ」
ドルシェはユニコーンの頭を撫でる。
「ガル…（汗）」
「…わかった。俺はどうする？」
「ガル～っ（涙）」
「将軍は、煙幕をばらまきまくって、永久氷海を鳥さんの視界から消して頂ければＯＫですわ」
「…なるほどな。振り落とされるなよ、ドルシェ！」
クレスは、そう言い残して機体から防弾ネットをドルシェの元に落として行く。そして、煙幕をばらまきながら、旋回しまくる。
「さぁ、ユニコーンさん？出番よ？」
ドルシェは、防弾ネットを広げる。
「ガル～」
ユニコーンは、煙幕の下で四角形に高速で動き始める。
「見事な計算だな」
上空から見ているクレスには、巨大な防弾ネットが広がっている様に見えていた。
「ユニコーンさん！素敵だわ！もっと頑張るのよ！」
「ガルルルぅ～」
ドルシェは、高速に近いスピードを楽しんでいる。そして、防弾ネットは、もはや残像とは思えない程に巨大化していた。
「来たか！」
煙幕をばらまき終わったクレスが、鳥に注視する。鳥の先頭集団が煙幕の前に到達する。そして、下に網があるのを見つけて慌てて上昇して行く。後続の鳥達も釣られて上昇する。
「成功か！？」
鳥の大群は、瞬く間に上昇して行った。そして、西の方へと進路を変えて飛んでゆく。
「成功ですわ！ユニコーンさん見てごらんなさい！」
「ガル～」

鳥の大群は、どんどん小さくなってゆく。
「ドルシェの体さばきと根性は、エイシス譲りなのか…？」
ユニコーンの上で喜んでいるドルシェを見ながら、エイシスを思い出すクレスであった。
「ん？」
クレスは、遠くに目を凝らして見る。
「ドルシェ。私の見間違いじゃなければ、あれは鳥か？」
クレスが見る方向をドルシェも見る。
「よく考えてみれば、世界中の鳥さんが、あれで終わりの訳ありませんわ」
「困ったもんだ。煙幕は使い切ったぞ」
クレスは、薄くなった煙幕を見ながら言う。
「困りましたわ。防弾ネットもボロボロですわ」
ドルシェは、あちこち切れかけている防弾ネットをクレスに見せる。
「万事休すか――」
落胆の色を隠せないクレス。
「まだですわ。」
ドルシェはクレスを否定する。
「ユニコーンさん？もう一仕事だけ頼まれてくださる？」
「ガルルル…」
「私を鳥さん達の群れの中心の真上に連れて行って」
ユニコーンの頭を撫でるドルシェ。ユニコーンは、一瞬にして鳥の大群の上部に到着する。
「本当に早いわねぇ」
ドルシェは、感心する。
「クレス将軍。今度こそ迎えに来てくださいね」
ドルシェは、無線でクレスに言う。
「ドルシェ！何をするんだ！」
ドルシェは聞こえないフリをする。
「ユニコーンさん。約束ですわ。ここでお別れですのよ」

ドルシェは、もう一度、ユニコーンの頭を撫でてから、一気にジャンプする。鳥の群れに消えるドルシェ。次の瞬間――
「ガル？」
鳥が一斉に上昇を始めた。たまらず回避するユニコーン。そして、落下して行く物体を見つける。ドルシェだ。
「ドルシェ…待ってるんだぞ…！」
クレスは、落下して行くドルシェの下を目指す。しかし、落下速度の方が早く、追い付ける気配すらない。
「ポンコツ！もっと早くならんのか！」
クレスの苛立ちは、ジェット機に向けられるが、速度は変わらない。
「ダメだ！間に合わん！ドルシェ！霊を呼べ！」
無線からの応答はない。
「ユニコーン！ドルシェを助けてくれっ！」
声が聞こえるはずもないのは、理解しているが、上空で見つめるユニコーンに懇願するクレス。その時――――

『バサッ』

ドルシェの体から何かが飛び出す。
「――！！あいつめ…」
すぐに飛び出た物体が、パラシュートだと分かりニヤリと笑うクレス。
「将軍？何を焦っていらっしゃるのかしら？」
無線にドルシェの声が入ってくる。
「全く…」
クレスは、溜め息を付きながらも急降下して行く。ユニコーンは、パラシュートが開くのを確認すると姿を消した。
「ユニコーンさん。心配して下さったのね。ありがとうですわ！」
ドルシェは、消えたユニコーンに礼を言う。
「あいつはパラシュートがある事を分かっていたのか？」

「ユニコーンさんは頭が良いから、気付いていたんですわ」
「分からない奴らだな…」
「あら、将軍？『ら』って、どういう事ですの？」
ドルシェの声が怒り口調になる。
「気にするな。それより、機体を真下に持って行く。着地出来るな？」
「もちろんですわ」
ジェット機は、ドルシェの真下に入る。そして、ドルシェは機体の屋根に着地して、手際良くパラシュートを回収する。

「楽しかったですわ」
「一体、何を呼び寄せたんだ？」
「鳥さんの祖先ですわ」
「始祖鳥か？」
ドルシェは、ニッコリ笑う。
「よく見つけたな」
「ここは、伝説の動物が眠る場所ですわ」
「そういう事か。ユニコーンにも随分好かれてたな」
「あら？動物は愛情を注げば、なついてくれるものですわ」
ドルシェは、マジマジと言う。
「成程な。お前には恐怖心が無いのか？」
「恐怖心？…抱いてしまったら、華麗に散れませんわ」
「そう来たか…まぁいい。とりあえず、着陸するぞ」
機体は、分厚い氷の上を目指す。

～反乱～

「市民の非難は順調か？」
「それが、問題が起きました」
ゼビーは、動きが止まる。
「何だ？」
「収容のキャパが越えていて、三割程しかシェルターに入れません」
「どういう事だ！？」
ゼビーは、報告書を奪い取って食い付く。
「封鎖とは、どういう事だ？」
「カルバン将軍に因るものかと思われます。」
「カルバン将軍？何故、奴がシェルター封鎖をしている？」
「調査中ですが…クーデターかもしれません」
「この非常時に…私が直接会って確かめる。場所は？」
「危険です！」
「危険？この地上に安全な場所があるのか？大統領命令だ。カリバンの居場所を教えろ」
「…出来ません。大統領を守るのも我々の使命です」
護衛官の瞳に迷いはない。
「そうか。悪かった。引き続き市民の安全を最優先にしてくれ」
ゼビーは、指令室を出て行く。
「大統領！どちらへ行かれるのですか！」
「執務室に戻るだけだ」
護衛官は、敬礼をする。
（カルバン…この後に及んで大統領の座を狙うのか…？）

「カルバン将軍。七割のシェルターに軍事配備終わりました。しかし、三割が作戦失敗でございます。市民の抵抗が発生した箇所がありまして…」
「行動が遅かったな。七割か…とりあえずは、次の作戦に移れるな。ご苦労であった」

兵士に労いの言葉をかけるカルバンは、徐に拳銃を取り出して兵士を撃つ。
「し…将…軍…？」
「完璧に任務をこなせない部下は必要ない」
兵士は、床に倒れる。
「片付けろ」
カルバンは、側近に命令をする。側近は、手際良く死体を片付ける。
「大統領にアポを取れ。私の声を聞きたがっている頃だろうからな」
カルバンは、不適な笑みを浮かべる。

～真実～

「じゃぁ、一万年の封印の盟約が終わって出て来た『時の女王』が、全てを仕組んだって事なの？」
「物凄い短縮だな…」
「そうです。東と南の司祭を葬ったのも、時の女王の刺客です。」
「でも、どう見ても『神』の仲間って感じじゃなかったぜ？」
「推測に過ぎないが…悪魔と盟約を交したのかもしれん――」
ハインズは、悔やみきれない表情をしながら、拳を握る。
「神と悪魔のコラボとは、正に終末だな」
皮肉を込めたマーズのセリフにハインズの目付きが変わる。
「マーズ。言葉に気を付けろ。時の女王は、神の遣いであって神ではない。神と悪魔が盟約を交わす事など、絶対に有り得ない」
「話が難し過ぎて、付いていけねぇぞ？」
「犬は、大人しく聞いてろ」
「マーズてめぇ！」

「お？ペットが飼い主に逆らうのか？」
「誰がお前のペットだぁ！？」

『ゴツン！』

「全く。口開けば、すぐ喧嘩なんだから（怒）」
「リトちゃん…どんどん狂暴になってる…」
「ハインズさん。時の女王の事は、だいたい分かりました。貴方は、何故、それを私達に？」
「人と人間の話は、知っていますか？」
リトは、ハインズの言葉を聞いて、ちらっとマーズを見る。
「えぇ。多少は、知っています」
「では、人と人間の違いはわかりますか？」
首を横に振るリト。
「教えましょう…人と人間の一番の大きな違い…血にあります」
「血…？」
「…やっぱり…」
マーズは、頭を掻く。
「そうです。人間は、『人』と『猿』の交配に寄って産まれた存在です」
「え――――――――っ！？」
声を上げてジタバタするダガース。リトも目を大きくする。ハインズは、それを見ても、話を続ける。
「『時の女王』は、降臨した『人』を滅ぼす為に地球の時間だけを早めたのです。それによって、我々の生命は、極端に短くなってしまいました。人間の一生が８０年なら、人は、一ヶ月も生きられません」
「一ヶ月！？あっと言う間に終わっちまうぜ？」
うつ向くハインズ。
「その通りだ。女王は、我々に報復の隙を与えずに滅ぼす作戦だっ

たのであろう。そこで、人は生命力が長かった猿との交配に踏み切った。そうする事で、時の女王に対抗する為の戦力を作ろうとしたのだ。しかし、生命力は延びたが、能力が三分の一程になってしまい、結局、時の女王の敵ではなかった」
「そんな…それじゃ、私達が崇めた神は、人かも知れないって事ですか…？」
「人間にとって、神とは絶対者です。動物の本能は、強い者には服従します。人と人間では、知恵も力も歴然とした差があった事でしょう。それを考えれば、『人』を『神』と思う事に迷いは無かったのではないでしょうか。そして、それが『人』と『人間』が、本来、歩むべき道を踏み外してしまう原因だったのでしょう」
「私達が信仰した神が人間の祖先…信じられない…」
「リトちゃん。リトちゃんが信じる神が実在して、人間だったとしても、リトちゃんの心にいる神は、違うんじゃねぇか？」
ダガースは、リトを見つめながら言う。
「ダガース…」
「ダガースの言う通りだ。リトちゃんの神は、リトちゃんの心を強くする為にいるんだ。実在したってしなくたって、リトちゃんが、しっかり神を描いていれば関係ねぇさ」
「…そうだよね。私が信じる神は、私の心にいるんだよね」
リトは、胸元に手を沿えて、洋服をギュッと握る。それは、自分の信じる神を再確認している様に見えた。
「やはり、リト様は強い心をお持ちでしたね。太陽の神が選んだだけの事はあります。」
「太陽の神？」
「また神話かよ？」
「…」
ダガースは、ウンザリ感を露にする。
「太陽の神は、時の女王と同じように、地上に降りなかった『神の遣い』の一人だ」

（こいつは、何で俺には、タメ口なんだ…？）
ダガースは、ぶっちょう面をする。
「その神と私が何の関係があるのですか？」
リトは、自分に忍び寄る大きな運命に不安を抱く。
「地上には、先達者と呼ばれる人間が定期的に現れます。彼等は、それぞれの支配をしている者達の意思を受け継ぐ者達なのです。そして、リト様の父上・母上は、太陽の神の意思を受け継ぐ者でした。」
「私のお父さんとお母さん…！？」
「はい。お二人は、太陽の神の元で生きておられます。」
「それは本当ですか！！」
「本当です。しかし、地上に降りる力は、もうありません。」
「え…？」
「地上で力を使い過ぎたのです。お二人は、『古代大戦争』による飢えた人間や動物を助ける為に持てる全ての力を使いました。結果、地上に住む生物は、かろうじて生き残れたのです」
「古代大戦争って…リトちゃんの両親って何歳なんだ？？」
「先達者には、生命の期限はない。触れた者達が思い続ける限り生命は続く。」
「ふぅ～ん」
（こいつは、何で俺には、タメ口なんだ…？）
マーズは、ぶっちょう面をする。
「今は会えなくてもいい…お父様とお母様が生きている…生きてるんだ！」
まだ見ぬ両親に想いをはせるリト。
「待てよ…？両親生きていたのは良しとしても…リトちゃんって何歳なんだ！？」
いくら、若く見えても、何万歳は、さすがに勘弁！といった感じで、マーズは真剣に考える。
「失礼ね！私は、二十歳よ！」

「だよな…（^―^；）こいつが、古代の時代の両親なんて言うからさぁ（焦）」
「安心しろ。お二人は、最近まで地上にいて、リト様を産んで太陽の神の下へと還ったのだ」
ハインズは、面倒臭そうに言う。
「お前に言われなくても、わかってらぃ！」
マーズは、ムキになりながら叫ぶ。
「俺…何万歳か計算してた…」
「…」
マーズは、二回程、ダガースの頭を軽く叩く。
「お兄様は…お兄様は生きているのでしょうか？」
「お兄様も生きておられます。」
「お兄様も…！」
リトの顔は、幸せを掴んだ女性の様に輝いた。しかし、ハインズの次の言葉は、容赦なくリトの笑顔を奪った。
「お兄様は、恐らく、時の女王の元へと向かったと思われます」
「え…？」
リトは、唖然とハインズを見つめる。
「おい。どういう事だ？」
マーズが、ハインズの胸ぐらを掴む。
「お兄様は、全てが時の女王の為す事だと、気が付いていたのだろう」
「お前…それを知っていて、行かせたんじゃねぇだろうな？」
「マーズやめて！」
リトの声は届かない。
「ありゃりゃ。久々に見たぜ」
マーズの真剣な顔を見上げるダガース。
「私が？笑わせるな。本来、太陽の神の力を授かる人間を、簡単に死なせる様な事をすると思うか？」
「！？」

マーズは、思わぬ返答に手を緩める。
「お兄様が…神の力を…？」
「リト様が意思を継いだなら、兄のヤーヴェ様は、太陽の力を授かったのです」
「本物の術者かよ」
「率直に言います。リト様は、神格界を動かして下さい。そして、お兄様は、唯一、神格界への扉を開けられる炎の使い手なのです」
「あれ？神格界って司祭達で行けるんじゃないのか？」
ダガースは、疑問を抱く。
「あれは話が出来る程度のコンタクトに過ぎません」
「ふぅ～ん」
「そして、運命が導くなら、お兄様は、生きておられます！時間がありません。早く神殿を目指して下さい！」
（止めたの誰だよ…）
「お兄様…」
リトは、ヤーヴェの姿を思い浮かべる。
「ハインズっつったっけ？信用出来るだけの確証はあるのか？」
マーズは、ハインズの前で仁王立ちをする。
「残念だが…ない。だが、真実だ」
「マーズ。ハインズさん、多分、嘘付いていないと思うわ。上手く言えないけど…何と無くわかるの」
リトの表情を見つめるマーズ。あの時、マーズの心を見透かした表情だ。
「そっか…よし、じゃあ、神殿に行きますかぁ！」
マーズは、勢いよく腕を回す。
「あいつ…マジで惚れたか？」
ダガースは、マーズの聞き分けの良さに感付いたようだ。そして、ハインズの方を見る。
「ハインズ。お前は『人』なのか？」
「…そうだ。私は『人』だ。この地に降り立った最初の『人』から

産まれた存在だ」
「おかしくね？何で何万年も前の奴が生きてんだ？」
「私は物質としては、存在していない。こちらの世界に素で来たら、今の私では、半月持たない。だから、冥界に本体を置いて幽子体だけで移動しているのだ。つまり、エデンで言う所の『幽霊』という奴だ。だから、通常空間では、お前に触れられる事もないが触る事も出来ない」
（こいつは、何で俺にはタメ口なんだ…？）
ダガースは、ぶっちょう面をする。
「証拠を見せよう」
ハインズは、そう言って、ダガースの頭に手を添える。しかし――すり抜ける。
「はぅ！？今、体の中をすり抜けたぞ！？俺、おかしくなったのか！？」
「ふっ…安心しろ。透けてるのは私の方だ」
「良かったぁ～！（（泣））ってか、お前は幽霊か？」
「精神レベルで現実化しているだけだ。人が作りし人は、生き延びる為に冥界へと送られた」
「じゃ、そこに行けば、時の女王に勝てる仲間が、沢山いるって事か？」
「もう居ない。人とて、冥界では、生き残るのは難しい。何百人といた仲間は、二人だけになってしまった」
「冥界に何があるんだ？」
ハインズは、息を呑む。
「冥界とは、魂を天界・獄界に送る事を許された、『オシリス神』の支配する領域だ。神の遣いの変わり身の『人』も裁かれる立場になってしまう。今まで冥界の反乱軍として戦ってきた…今も二人だけで戦っている。…もう何万年も争い続けている」
「今も？精神がここに来て、大丈夫なのか？」
「正直に言うと我々は、勝てないであろう。やはり、オシリス神の

軍団は、尋常じゃないようだ。奈落は、彼らのテリトリーだから仕方がない」
「そんな簡単に負けるとか言うなよ！？」
「これが事実だ。しかし、我々の親が背徳を冒してまで守ろうとしたエデンだけは守りたい」
「…そうか。お前も大変なんだな。もう一人は、平気なのか？」
「エイシスは、強い。一人でも簡単には負けない」
「エイシス？そんなに強いヤツなのか？」
「あぁ。光の太刀は、一撃で千人を葬る程だ」
「千人かよ！？それでも勝てないのか？」
「勝てないだろうな。それ程にオシリス神の軍団は強い」
「マジかよ…ってか、世の中は広過ぎるぜ…」
ダガースは、空を仰ぐ。
「だが、只では我々は負けない。必ず、オシリス神にも一泡吹かせてやるさ」
「そうか。力になってやれねぇけど頑張れや」
「あぁ」
「あっ！獣人って何だったんだ？」
ダガースは、思い出して慌てて聞く。
「いずれ…わかるさ」
「お～いアホ犬ぅ！置いて行くぞぉ！」
「ったく…あの馬鹿は、空気が読めねぇヤツだぜ」
ダガースは、鼻息を荒くしながら愚痴る。
「ハインズ。俺は難しい話は、苦手だ。とりあえず、やるべき事は『リトちゃんの護衛』だろ？」
「なかなか賢いな。どっかの護衛とは大違いだな」
「あったりめぇだぃ！俺様は、喋る犬だぜ？」
「ハァーックション！」
マーズは、豪快なくしゃみをする。
「コルぁーっ！さっさと来ねぇか！」

「本当にうるせぇヤツだな」
ダガースは、マーズ達の方へ走り出す。
「あの二人ならリト様を神格界へ導く為の礎になるかもしれんな…」
ハインズは、走って行く二人と一匹の姿を見送って姿を消した。

～塞がれた未来～

「とりあえず、何も起きないなぁ」
「平和は、良い事さぁ」
マックスターとハワードは、北の宮殿の庭園で、椅子に腰をかけて、和やかな会話をしていたが、一兵士が突き破る。
「報告します！東の宮殿に続き南の宮殿も崩壊しました！」
「南も！？」
「確か、クレス将軍とドルシェが向かったよな？」
「将軍とドルシェ様は、ご無事だったようですが、他の者は殉職したとの報告がありました！」
二人は、顔を見合わせる。
「マジかよ？あの二人がいて、やられるって…」
「こりゃ、のんびりしてらんねぇな。クレス将軍に連絡は取れるのか？」
「それが、永久氷海に向かってから、消息不明です」
「マックスター」
「オッケー。行くか」
二人は、立ち上がり歩き出す。
「あの…我々は…？」
「即時撤退」

マックスターは、煙草に火を付けながら言う。
「はい？」
「聞こえなかったか？すぐに総員、基地に引き返せ」
ハワードは、兵士を睨む。
「は、はい！了解しました！えっと…お二人は…？」
「俺らは、やる事がある。三分以内に出発しろ」
煙草の煙を吐きながらマックスターは睨む。
「し、しかし…」
「聞こえただろ？三分以内に撤退だ」
兵士の前に歩み寄るハワード。
「は、はい！直ちに準備に入ります！」
兵士は、半べそをかきながら、走り去る。
「全く…素直に言う事利けっての…」
マックスターは、走り去る兵士の後ろ姿を見ながら呟く。
「上官を置いて撤退を素直にされたら、それはそれで悲しいもんがあるぜ？」
ハワードは、マックスターの肩に手をかけて言った。
「確かにそうかもな。まぁいいさ。行くか？」
「そうだな」
二人は、宮殿の中へと消えて行った。

「いよいよ、私の時代だ」
カルバンは、豪華な装飾が施された部屋でワインを口に含む。
「カルバン様！失礼します！」
兵士が慌ただしく入って来る。
「騒々しいな」
カルバンは、兵士を睨み付ける。
「申し訳ございません！ゼビー大統領から無線連絡が入っています」
「ゼビーから？フン…余程、私に会いたいようだな」
カルバンは、無線のヘッドフォンを取る。

「お久しぶりですな、大統領。」
「カルバン、貴様、何の真似だ？」
「真似？私は真似などしていませんが？」
カルバンは、ニヤニヤしながら喋る。
「シェルターを封鎖する事が、何を意味するか理解していないのか？」
ゼビーの口調は、明らかに怒りに満ちていた。
「さすが、大統領。情報が早い。なら、ここからは取引きだ」
カルバンの口調が高圧的な物に変わる。
「取引き？お前と取引きする事などない！」
ゼビーは怯まない。
「ハハハ…残念だが、取引きは強制参加だ。ゼビー君？」
カルバンは、声高々に笑う。
「どういう事だ？」
「シェルターに入れない市民の命は、あと数時間だ。つまり、私は、史上最大の人質を得た様なものだ。ゼビー、大統領を辞任して全権を私に寄越すのだ。そうすれば、シェルターを開放して市民を受け入れてやろうじゃないか」
カルバンの目は、狂気に満ちていた。
「貴様…」
「返事は、いつでも良いぞ？まぁ市民が死滅する前に宜しく頼みますぞ。ハハハ…！」
「カルバン！貴様は、何処まで下道に成り――」
カルバンは、ゼビーの言葉を聞かずに受話器を置く。
「さぁ、人類最後のショータイムの始まりだ」
カルバンは、ワインを注いで口に含む。

「くそっ！カルバンめ！絶対に許さん！」
ゼビーは、マイクを叩きつけて怒りを露にする。
「大統領！問題が発生しました！」

「今度は何だ！？」
ゼビーは、次から次へと湧き出る問題に苛立ちを隠せない。
「核を積んだトラックが行方不明になりました！」
「！？」
ゼビーの顔色が一気に青ざめる。
「どういう事だ…？」
「西の宮殿を越えた辺りで消息を立ちました！」
「西の宮殿…だと！？」
ゼビーの心に不安がよぎる。
「わかった。行方不明のトラックは、私の方で捜索する。君達は、引き続き、核の移動を頼むぞ。何％完了だ？」
ゼビーの声には力がなかった。
「現在、７０％完了です！移動の件、了解しました！…大統領…大丈夫でしょうか？」
兵士が気遣う。
「大丈夫だ。それと、トラックのコースを変更してくれ。西の宮殿付近を避けるんだ」
「それだと遠回りになりますが…」
「それでも良い。今は確実に核を移動する事が先決だ」
「了解しました！直ちに変更させます！」
兵士は、勢い良く部屋を出る。それを確認して、一気に崩れ落ちるゼビー。
「何故…こんな事になってしまったのだ…神よ…」
そこに電話のベルが鳴る。
「ゼビーだ。」
「クレスです。そちらの事態は、ソルジャーより確認しております」
「クレスか！無事だったか！今何処だ？」
「現在、鳥の進路変更に成功して、永久氷海の氷の大陸にて、ウィルス調査をしております」
「そうか。何かわかったか？」

「はい。驚いた事に、大陸に大きな穴が開いております。これは、恐らく、マーズより連絡のあった東の宮殿の穴と同じタイプの物かと思われます」
「そこが、ウィルスの発生地点か？」
「いえ、違うようです。ウィルスは、大陸に連なる氷山の噴火から始まったようです」
「噴火？あそこには活火山は存在していないと聞いているが…？」
「死火山が活火山に変わった様です。マグマや煙は出ていませんが、明らかに噴火をしています」
「理解に苦しむ内容だな。仮に噴火だとして、ウィルスを止める術はあるのか？」
「残念ながら無いです。事態は最悪かもしれません。鳥に有害なウィルスの後から、もっと強力なウィルスが発生している可能性が出て来ました」
「な…何だと…？」
受話器を持つゼビーの手が震える。
「ウィルスを調べたら、鳥ウィルス以外に新しいウィルスを発見しました。念の為、ガスマスクをしていたから助かりましたが、鳥ウィルスと同じ成分に加えて、繁殖する機能がある様です。三十秒あたり約十倍の増加を確認しております。恐らく人間に感染します」
クレスの言葉に、ゼビーは愕然とする。
「わかった。拡散は、いつ頃か予測つくか？」
「推測ですが、一時間程の経過と思われます。そちらへの到着時間は、そろそろだと思いますので、ガスマスクの着用を要請致します」
「正に逃げ道無しだな」
「大統領…？」
「いいか、クレス。とにかく地球の裏でも何でもいい。この国から出来るだけ離れろ」
「大統領？どういう事ですか！？」
クレスは、大統領の異変に戸惑う。

「我々は、完全に包囲された。ガスマスクは無い」
「！？」
クレスからの返事は無い。大量にストックされてるはずのガスマスクが無いのは、予想外だったようだ。
「ガスマスクは、カルバンの部隊に掌握されている」
「カルバン？それは初耳ですな…」
「カルバンのクーデターだ。七割のシェルターを制圧されている」
「最大の人質ですか…ヤツめ…許さん…」
クレスの声は、静かな怒りが籠っていた。
「空からウィルス、大地震、カルバンのクーデター…そして、消息を絶った核を積んだトラック…助かる術は無い」
「まだ早いですぞ？私がカルバンの本拠地を叩き、シェルターを開放します」
「そう願いたい所だったが、予知連に因ると大地震まで残り一時間だ。そこからでは間に合わない」
「くっ…おい！？ドルシェ！？」
「？」
受話器の向こうのクレスの声に耳を傾けるゼビー。
「ゼビー大統領。私はクレス将軍の部隊所属のドルシェと申しますわ」
「君がドルシェか。噂は聞いている。どうした？」
「大統領。失礼を承知で申し上げますわ。あなたが生きる事を諦めても、市民は生き残りたいのです。死を選んだ大統領よりもクーデターをしてでも生きる事を選んだカルバン将軍の方が、市民にとっては大統領にふさわしいですわ」
「ドルシェ！何を言っているんだ！」
クレスは、ドルシェの言葉を聞いて制止しようとする。
「…」
「私達は、諦めませんわ。まだ、戦いは始まったばかりですもの」
「…ドルシェ。私は大きな過ちを侵す所だったよ。ありがとう」

「生きる事を選んで頂けて何よりですわ」
「あぁ。誰一人死なせない。誓おう。…クレスに代わってくれ」
ゼビーの声に力が戻る。
「大統領。部下の非礼お許し下さい」
「クレスよ。良い部下を持ったな」
「…ありがとうございます。早速ですが、恐らくカルバンは、西の宮殿を制圧したのではないでしょうか？」
「何？」
「カルバンがクーデターを起こすなら、シェルターを制圧出来なかった時の策があったはずです」
「そうか！核を切札にするつもりだったのか！」
「はい。西に向かった部下から連絡が無い事からも説明がつけれます。これより我々は、火山を何とかして、西の宮殿に向かいたいと思います」
「わかった。しかし、火山を何とか出来るのか？」
「策はまだですが、必ず、何かあるはずです。部下が諦めていないのに、諦める訳にはいきませんからな」
「そうだな。頼んだぞクレス。私は核を安全区域に移動してシェルターを一つでも多く開放する」
「了解しました」
「制限時間は、三十分だ」
「任せて下さい」
ここで電話は切れた。
「頼んだぞ…クレス…」
ゼビーは、強い願いを呟いた。

～北の攻防～

「さぁ、火山を止めるぞ」
クレスは、不気味な音と振動を発する氷山を見据える。
「作戦は出来ましたかしら？」
「あぁ。だが、ドルシェに頼みがある」
「私に出来る事なら」
「さっきのユニコーンを呼べないか？」
以外なクレスの言葉に、一瞬、間が空く。
「やってみますわ」
ドルシェは、目を閉じて精神統一する。
クレスは辺りの空気が一瞬、暖かくなるのを感じた。
「ガルぅ～」
ユニコーンがドルシェの横に現れる。
「ユニコーンさん、ごめんなさいね」
ドルシェは、ユニコーンの頭を撫でる。
「ガルるるぅぅ～♪」
どうやら、ドルシェに撫でられて喜んでいるようだ。
「よし…いいか、ドルシェ。今から氷山の穴を塞ぐ」
クレスは、氷山を指差す。
「氷山の穴を？もしかして、機体を突っ込ませるのですか？」
クレスは、ニヤリと笑う。
「それでは、私が操縦いたしますわ」
ドルシェは、ジェット機に向かう。
「待て。ジェット機には、私が乗る。ドルシェ、お前はカルバンの軍団を制圧してくれ」
「将軍。あなたを死なせる訳には行きませんわ。ジェット機には、私が乗ります」
穴を塞ぐ為にジェット機を正確に追突させるには、ギリギリまで機体を操縦しなくてはいけない。最悪の場合には、脱出しても爆発の威力で吹き飛ぶかもしれない。
「全て計算済みだ。それにユニコーンを操れるのは、お前しかいな

い。ユニコーンなら西の宮殿まで一瞬で行ける」
「…わかりましたわ。さっさとカルバンの軍を制圧して、迎えに来ますわ」
ドルシェの顔付きが変わる。その顔は、親と離れ離れになるのを必死に堪える子供の様にも見える。
「わかった。さぁ行くんだ。カルバンの特殊部隊には気を付けろよ」
「了解しましたわ。ユニコーンさん、私を西の宮殿まで乗せてちょうだい？」
「ガルっ」
ドルシェは、身軽にユニコーンに跨る。
「将軍！必ず、迎えに来ますわ！」
クレスは、ドルシェの言葉に、親指を立てて返す。
「ユニコーンさん！」
ドルシェの掛け声と同時にユニコーンは飛び消えて行く。
「本当に早いな。…さぁて、行くか」
クレスは、ジェット機に乗り込む。

「おいハワード。これは幻か？夢か？」
「こりゃ、現実っぽいぜ？ほっぺたツネってみるか？」
マックスターとハワードは、目の前に現れた敵の姿を見ても、呑気な会話をしている。目の前の敵――そう、クレスとドルシェを襲った『ネズミ』と『コウモリ』だった。
「ハワード、上と下のどっちが得意だ？」
「どう考えても上だろ」
ハワードは、コウモリを睨む。
「じゃ、俺は下だな」
マックスターは、腰に下げてる剣を抜く。
「さぁ、かかってきな。この斬魔刀で地獄に帰してやるぜ」
マックスターは、大きな両刃の剣を構える。
「いきなり、斬魔刀かよ。それじゃ、俺も最終兵器で勝負しますか」

ハワードは、ガトリング砲を背中から取り出す。
「コウモリもどきっ！魔弾仕様のガトリング砲喰らえ！」
ハワードは、一気にトリガーを引く。無数の銃口から発射される魔弾は、コウモリを次々と破壊して行く。一方、マックスターは、ネズミを叩き割る様に倒して行く。
「マックスター！もしかして、クレス将軍の部隊を壊滅状態にした奴らってコイツらか？」
ハワードは、射撃練習の様にリラックスしながら、マックスターの方を降り向く。
「さぁ？だが、関係あるのは間違いないんじゃないか？」
マックスターは、地面から跳びかかって来るネズミを、見事に斬り落としていく。
「そうだな。しかし、キリがねぇな…」
ハワードは、周りを見て、次々現れる敵に、ウンザリした顔をする。
「あぁ。コイツら…もしかしたら…」
マックスターは、一気に高くジャンプする。そして、斬魔刀を床に叩きつける。
「ギャ――――っ！！」
「ガァ――――っ！！」
ネズミが次々と悲鳴を上げて消えてゆく。
「…なるほどな」
ハワードは、マックスターの行動とネズミの消滅を見て、不適な笑みを浮かべる。そして、ガトリング砲を撃ちながら、空いてる左肩に、バズーカー砲を掲げる。
「バイバイ」
ハワードは、バズーカー砲を発射する。砲弾は、コウモリの壁を突き破って天井に命中して爆発する。すると、コウモリもネズミの様に悲鳴を上げて消え始めた。
「良い感じだな。ツメが甘くないのが俺達なんだなぁ」
「そうなんだなぁ」

ハワードの言葉に呼応する様に笑いながら、マックスターも動き出す。
再びジャンプするマックスター。しかし、今度は先程よりも高く跳ぶ。
「魔弾の次は、魔剣を受けてみな！」
マックスターは、天井に斬魔刀を突き刺す。
「パクりのセリフだが、魔剣の次は、魔弾を受けてみな！」
ハワードもバズーカー砲を床に向けて発射する。ほぼ同時の攻撃によって、天井と床が崩壊する。
「本体のおでましだ」
天井を見つめるマックスター。。
「怪物の繁殖が繰り返しって、よくわかったな」
ハワードは、床を見つめながら言う。そして、崩壊する床に照準を合わせる。
「まぁな。４７匹目で化け物の声が一緒だったのさ」
マックスターも斬魔刀を構え直して言う。
「来たぜ」
二人に緊張が走る。天井から落ちてくる巨大な物体。それは、三メートルはありそうな巨大な漆黒のコウモリだった。そして、床からも三メートル程の巨大なネズミが這上がってきた。
「…なぁ。ネズミって一夫多妻なのか？」
「俺もそれ聞きたい所だ。どうやら、コウモリも一夫多妻みたいだ」
巨大なネズミとコウモリは、それぞれの穴から次々に現れて、総勢十匹になった。
ハワードは、超巨大ネズミにガトリング砲とバズーカー砲を同時に撃つ。
「マジかよ！？」
砲弾は命中したが、ネズミを貫通する事も爆発する事もなく、ネズミの体に弾かれて床に転がる。
「魔弾がダメって事は、斬魔刀もダメか？」

マックスターは、コウモリに向かって走り出す。コウモリ達は口を開けて、火の玉をマックスターめがけて飛ばす。
「！！」
マックスターは、ジャンプをして回避した。しかし、マックスターの目の前の視界が黒くなる。
「なっ！？早い！？」
マックスターの目の前には、巨大コウモリの漆黒の腹が見えていた。左からの物凄い衝撃が体中を走る。マックスターは、コウモリの右羽の攻撃をモロに喰らってしまったのだ。
「ぐわっ！」
そして、勢いよく壁に激突する。
「マックスター！」
崩れる壁と共に落ちていくマックスターの方へと走るハワード。しかし、その隙を突かれて、ハワードも背中にネズミからの攻撃を喰らってしまう。
「ゲホっ…しまっ――」
ハワードは、前のめりに倒れ込む。
「アホな位の馬鹿力しやがって…」
何とか起き上がろうとするが、体が言う事をきかない。続け様に背中に重い感覚。ハワードは、ネズミに背中に乗られてしまった。
「や…べぇ…」
上に乗られて身動きが取れないハワード。何とか逃げなくては、と思った矢先に背中が軽くなる。
「ハァ…ハァ…大丈夫か？」
ハワードの頭の先にはマックスターが刀を構え直して立っていた。
「助かったぜ」
マックスターは、ハワードに手を貸して起き上がらせる。
「どうやら…ハァ…魔弾は通用しないが…斬魔刀は効果…ありみたいだな」
ハワードを踏み付けたネズミの腹は切り裂かれている。

「参ったな…刀は…俺の戦闘スタイルに…無いぜ…ハァ…ハァ…しかし…切られてんだから…ハァ…血くらい流せよ」
ネズミの腹は、斬られた傷がパックリ開いているが、血や体液は出ていない。自覚も無い様だ。
「血も涙も無い…ってのは…この事か」
段々、呼吸の乱れがおさまる二人。
「マックスター、何か作戦は無いのか？」
ハワードは、効かないと分かっているガトリング砲を撃ち始める。
「正直言って、今までで一番ヤバイかもな。しかも、怪物に連携プレイをされると更に厳しいな」
「ここは…やっぱり退却か？」
「それが一番かもな。だが、どうやって脱出口を探す？」
二人は周りを見渡すが、綺麗な円陣に囲まれていた。
「一番弱そうな所から攻撃だ」
「ならば、さっき腹斬ったネズミが一番だろ」
「だよな。んで、どいつだっけ？」
マックスターは、一匹づつ確かめる。しかし、腹が裂けたヤツは見付からない。
「まさか…完治したなんて事あるのか…？」
「バケモンの傷の治り具合まではわからん」
二人にジリジリ歩み寄る怪物達。だんだん怪物との距離が近付く。
「ヤバイな。このままだと丸ごと食われるか、良くても骨しか残んねぇぞ」
マックスターは、怪物達との距離が縮まらない様に剣で威嚇する。
「確かにな。だが、一つ良い作戦を考えたぜ」
「どんなんだ？」
上を見ろ、と指を指してゼスチャーをするハワード。
「なるほどな。どうせ殺られるなら、あがいてみるか」
マックスターは、不適な笑みを見せる。
「行くぜ！マックスター！」

ハワードは、天井に向けてバズーカー砲を放つ。天井には大きな穴が開き、崩れ始める。
「今度は俺の番だな」
マックスターは、落ちて来る瓦礫の塊を次々と剣で振り払う。
「結構、量あるな！」
マックスターは、落ちて来る瓦礫をどんどん弾く。
「マックスター！」
ハワードの呼び声で、マックスターは、一気にジャンプする。つられる様にハワードもジャンプする。マックスターは、天井の穴の縁に剣を刺して捕まる。ハワードは、そのマックスターの足に捕まった。
「どうだ！？」
マックスターの呼び掛けにハワードが下を見る。
「大成功みたいだぜ」
下では、コウモリ達が瓦礫の中で上を見ている。そう、マックスターは、ただ瓦礫を振り払っていた訳ではなく、コウモリがすぐに飛べない様に封鎖していたのだ。そして、自分達が天井から逃げ出す時間を一秒でも多く稼いでいたのだ。
「ヨッと。あいつらが頭悪くて良かったな」
マックスターは、下を覗く。コウモリ達は、もがいている。
「馬鹿力だからな。それしか無いって事だった訳だ」
ハワードも無事に天井の穴から這い出す。
「早い所、撤退だ」
「そうだな」
二人は、通路を走り出す。すると目の前に、突然の人影が視界に入る。
「止まりなさい…下等な人間――」
マックスターは、容赦なく目の前の人物を切り裂く。ハワードもガトリング砲を撃ちまくる。そして、そのまま先を進んで行く。
「今のって司祭か？」

「さぁな。だが、司祭は部下が連れて行ったはずだ。それに、これだけドンパチやってて、のんびり歩いて来るのも変だろ」
「確認位しろよ…」
「お前も撃ってただろ？」
「体が反射的に動いたんだよ」
「俺もそれだ」
走る二人の前に壁が見えてくる。
「これも想定内の事か？」
マックスターは、壁の前で止まる。
「もちろん想定外。でも行くだろ？」
ハワードは、バズーカー砲を発射する。壁が崩れる。
「俺に当たるだろ！？」
壁の近くにいたマックスターが抗議のゼスチャーをする。
「俺は当たらねぇ。安心しろ」
適当に流すハワード。納得いかない顔のマックスター。
「飛び降りるしかないみたいだな？」
外を覗くハワードの言葉に、マックスターも外を覗く。
「高さは問題ないが、奴らの動きが気になるな」
マックスターは、ネズミとコウモリを思い出す。
「馬鹿か頭使うか…生死の境界線だな」
「来そうな気もするが…ここに居ても何も始まらない。先に行くぞ」
マックスターは、一気に飛び降りる。
「せっかちなヤツだな」
ハワードも後を追う。

『フゥーフゥー…』

着地した二人の周りに黒い影。
「いつの間に来たか知らんが、どうやら、ただの馬鹿じゃなかったみたいだな」

マックスターは、斬魔刀を構える。
「馬鹿は馬鹿みたいだぞ」
ハワードは、後ろを見る。壁が全て崩れて、祭壇の間までの最短距離の道が出来上がっている。
「…本能か？どちらにしても、また囲まれた」
「どうするかなぁ」
二人は、さすがに顔色が変わる。
一匹のコウモリが襲いかかってくる。
「ハワード！俺が斬ったら、バズーカーを傷に撃ち込んでみてくれ！」
ハワードは、マックスターの言葉に、何も言わずに照準を合わせる。
そして、マックスターが、冷静にコウモリの腹を斬り裂き、そこにハワードのバズーカー砲の弾が入り込んでいく。コウモリは、内部から爆発して粉々になる。
「成功じゃん」
ハワードは、ニヤリと笑う。
「次来るぞ！」
マックスターは、動き出すネズミに突進して行く。そして、手際良くダメージを与えて、横に移動する。ほぼ同時に弾が傷口に命中して、コウモリの体内に入っていく。そして、爆発。
「行けそうな気がしてきたぜ」
ハワードは、マックスターが切り込んで行く後を確実に撃ち込んでいく。
「残り二匹だ」
コウモリ二匹は、動かない。いや、二人の攻撃の前に動けない。
「さぁて、さっきの壁に激突させてくれた礼をしないとな」
マックスターは、斬魔刀を振りながら、コウモリの方へと歩きだす。
コウモリ達は、後退りをする。
「逃げらんないぜ」
いつの間にかコウモリ達の後ろを取ったハワードが言う。

「これで終わりだ！」
マックスターが、一気に詰め寄る。そして、鮮やかに二匹の腹に傷をつける。ハワードは、コウモリの頭上を飛び越えて着地している。バズーカー砲の轟音が響く。轟音は、怪物の軍団の処理が終わった合図となった。。
「終わりだ」
マックスターは、斬魔刀を腰にかけながやら呟く。
「あぁ。終わりだ。だが、何だったんだ？」
ハワードは、座り込む。予想以上にハードな戦いだったようだ。
「わからん。とりあえず、ソルジャーに連絡してみるか？」
マックスターは、携帯を取り出す。そして、画面を見て気が付く。
「何で電波が届かないんだ？」
携帯を振ってみたりするマックスター。
「壊れてんじゃないか？」
ハワードは、自分の携帯を見る。ハワードの携帯も電波が届いていない。
「どうやら、異空間に迷ってたみたいだな」
ハワードは、周りの景色を見ながら状況を分析する。
「参ったな。どうやったら、解放されるんだ？」
「恐らく、高速の早さでこの空間だけが引き離されて隔離されているはずだ。それ以上の早さなら抜けられる」
「なかなか無茶苦茶な話だな。マーズじゃねぇからな」
マックスターは、鼻を鳴らす。
「もう一つは、この空間を根本から壊す」
マックスターは、にやりと笑みを見せる。
「それの方が近道だな」
「そういう事だ。祭壇へ戻るか」
「化け物が作った近道のおかげで、少しは楽になるな」
二人は、祭壇へと引き返す為に歩き始めた。祭壇への通路は、ヒンヤリと冷たい空気が漂っていた。

第三部

～戦場の女神～

「ユニコーンさん、ありがとうですわ」
「ガルぅ～♪」
ドルシェとユニコーンは、西の宮殿にすぐに辿り着いた。宮殿は静けさを保っている。
「門番もいないのかしら？」
ドルシェは、辺りを見回しながら銃を取り出す。
「お前…ら」
不意に下から声がする。ドルシェが下を向くと、ユニコーンの下敷になっている兵士が睨んでいる。
「さすがユニコーンさんですわ！私より先に敵を攻撃するなんて素敵だわ！」
「ガル？」
ドルシェは、ユニコーンの首に抱きつく。
「ガルぅぅぅぅぅ～」
「てめぇら！俺をシカトしてんじゃねぇ！（怒）」
「うるさい男は嫌われますわ」
ドルシェは、銃のグリップを使って一撃かます。気を失う兵士。ドルシェは、軍服のマークを見る。
「カルバンの兵士ですわ。将軍の予測は当たったみたいですわね。ユニコーンさん、私は中に入ってカルバンを捕まえてきますわ。あなたは、ここで待っててちょうだいね」
「ガルッガルッ」
「あら？手伝ってくださるの？」

「ガルぅ♪」
「それじゃ、魔弾には気を付けるのですよ。それと、兵士は動かされているだけですから、命を奪ったらダメですわ。それと、制限時間は、１１分ですわ」
「ガルッ」
ユニコーンを見て、ニッコリ笑うドルシェ。
「お前ら！手をあげろ！」
兵士達が集まりだす。
「もう、おでましですわ」
「ガルルン！」
ユニコーンは、一瞬で兵士の前に到達して足蹴りを喰らわす。
「ガル」
「わかりましたわ。ここはお任せしますわ」
ドルシェは、時計をセットして、宮殿の中を目指す。
「待て！」

ドカッ！

ドルシェに狙いを定めて銃を向けた兵士は、ユニコーンの足蹴りの前にひれ伏す。
「こいつ…ユニコーンか！？」
「ユニコーン！？伝説のユニコーン！？」
「何でこんな所にいるんだ！？」
兵士達が次々に伝説の生き物に驚嘆する。ユニコーンは、そんなのお構い無しで、一瞬で兵士の前に辿り着き、足蹴りをかましていく。
「動きが見えないぞ！！」
総勢３０人いた兵士は、三人になっていた。兵士に動揺が走る。
「ガルぅ♪」
ユニコーンは、踊る様に楽しむ。
「に、逃げろぉーっ！」

三人は逃げ出すが、ユニコーンから逃げられない。一瞬で一就された。
「…つ…強い…」
「ガルッ」
ユニコーンは、宮殿を見つめる。
「ガル？」
宮殿の最上階で、こちらを見ている男がいた。カルバンだ。
（面白い生物が迷い込んだな…）
無事に宮殿に潜入したドルシェは、長い通路を走る。
（中は南の宮殿よりも広いですわね。西の宮殿の方が偉いのかしら…？）
ドルシェは、装飾などを見ながら、宮殿の上下関係などを考えてみる。
「いたぞ！不審者――ぐっ！？」
後ろで声がした瞬間に、すぐに振り向き銃を撃つ。兵士の右肩に命中する。
「時間は無駄に使えませんわ」
ドルシェは、捨てゼリフを吐いて、前を向いて走り出す。
「こっちだ！」
「階段をおさえろ！」
慌ただしい兵士達の声が行き交う。ドルシェは、出くわす兵士達の右肩を狙い撃ち、確実に仕留める。
「カルバン将軍！不審者です！真っ直ぐに将軍の部屋を目指していると思われます！」
「不審者？センサーは、反応しなかったのか？」
「はっ！突然現れた、と監視兵からの報告がありました！」
「外のユニコーンか？一体、何者だ？」
「恐らく、クレス将軍の特殊部隊かと思われます！」

「クレスの部下か…更に、面白い。ビルダーの部隊を向かわせろ」
「ビルダー大佐の部隊ですか！？」
「何か不満でもあるか？」
「いや…大佐の部隊が出る程では…」
「だから、お前は連絡係なんだ。クレスの部隊は、そんなにヤワじゃない。私は誰が来ても、本気で相手をする。それが勝者の必須項目だ」
カルバンは、兵士を睨む。
「も、申し訳けございません！すぐに連絡致します！」
兵士は、逃げる様に部屋を出る。
「馬鹿者が。しかし、クレスの部隊が来たとなると、少々、厄介だな…。西は、特殊部隊が来ないはずだったが…？」
カルバンは、携帯を取り出して、電話をかける。
「私だ。お前らの出番だ。敵はクレスの特殊部隊だ」
「了解。状況は全て把握しております。すぐに行動に移ります」
「頼もしい限りだな。頼んだぞ」
カルバンは電話を切り、ワインを飲み干した。

「いいか！敵は女兵一人だ！カルバン将軍の部屋に行くには、このロビーを通らなければ行けない！よって、ここで総攻撃に入る。敵が入ってきたら、即攻撃だ！」
ビルダーは、自信を持ってると言わんばかりの声で、作戦を話す。
「イエッサー！」
統率された兵士達の掛け声が響く。そして、ロビーの吹き抜けの通路を覆い尽す。
「くっくっくっ…完全に逃げ道なしだ。ここで手柄を立てれば、昇格間違いなしだな…」
（女性に総攻撃なんて、失礼ですわ）
ドルシェは、既にロビーのドアまで辿り着いて、盗聴していた。
（一気に行くしか無さそうですわね）

辺りを見回す。そして、一点で視線が止まる。その先には、一枚の扉がある。ドルシェは、中へと入って行く。
「…」
部屋には何も無い。ドルシェは、壁の前に立つ。そして、バズーカー砲を背中から取り出す。

轟音二発。

一発目の砲弾は壁を破壊する。二発目がロビーの一本の柱を破壊する。ドルシェは、立て続けに砲弾を発射する。そして、次々とロビーの柱を破壊する。
「通路が崩れたぞ！」
「た、助けてくれぇーっ！」
「落ちた兵士を助けろーっ！」
壁の向こうから聞こえる兵士達の叫び声。
「一体、何が起きているんだ！？」
ビルダーは、突然の攻撃に動揺する。柱が壊された事によって下に落ちる兵士達は、完全に統率力を欠いている。
「このままではマズイ！お前ら！自分の持ち場に戻れぇぇぇ！」
ビルダーは怒鳴るが、兵士達は、崩壊する通路から逃げる事で精一杯だった。
「あ゛っ――――！！！！！！！！！」
とうとう、ビルダーのいる通路の柱も砲撃を受けて崩れる。
「お前ら！私を助けっ――――！」
必死にしがみついているビルダーの目の前で、殆んどの通路が一斉に崩れていく。
「そ…そんな…こんな作戦ありなのか…」
愕然とするビルダー。
「さぁ、行きましょうかしら」
ドルシェは、壁の穴から飛び出る。そして、軽快なジャンプで瓦礫

を足場に、一気に二階の通路の残りに辿り着く。
「だ、誰だ！」
逃げてる最中の兵士が、ドルシェに気が付く。
「あら。やっぱり気が付きまして？」
ドルシェは、上段蹴りを顔面に叩き込む。兵士は、一発でノックダウンした。
「その女が侵入者だ！可愛いが侵入者だ！」
ビルダーが、今にも落ちそうな体勢で叫ぶ。
「私は可愛いよりも美しいの方が良かったですわ」
体術で、兵士を倒していくドルシェが、ビルダーを睨む。そして、銃を撃つ。
「な、な、何て事を！？ギャ――――――！！！」
ビルダーは、手前の着弾に驚いて、思わず手を放してしまった。そして、姿が見えなくなった。
「大佐ぁ！？」
部下達の視線が、下に落ちた大佐の方に向かう。その隙を突いて、残りの兵士を全て片付ける。
「皆さん、死なないで良かったですわね」
ドルシェは、手を降りながら先へと進み始めた。
「余計な時間を使ってしまいましたわ」
時計の針は、スタートから三分を経過しようとしていた。
「そこまでだ」
声と同時に、轟音が鳴り響く。ドルシェは、宙返りをして避ける。
「ほぉ？よく避けたな」
再度、轟音が鳴る。今度は、前へ飛込む。しかし、次の攻撃が来る。
ドルシェは、防戦を強いられる。
「随分、派手好きな人がいたものですわ」
ドルシェは、連続する砲撃を見事に交しながら言う。
（おかしいですわ…姿が全く見えない…）
周りに目を配るが、狙撃している姿が見えない。

「探しても無駄だ。我々は、お前には見えん」
（我々って事は、複数…！）
ドルシェは、時計を見る。
「一分で終わらせますわ」
「その余裕が、何処まで続くかな？くっくっくっ…」
「何処まで？言ったはずですわ。一分で終わらせると」
「ほざけ！女だとて容赦せん！」
数ヵ所から砲撃が始まる。ドルシェは、その全てを避ける。ドルシェは、拳銃を取り出して、弾が飛んで来た方に応戦する。しかし、壁に穴を開けただけだった。
「お前がどんなに早く撃とうとも、我々には当たらないぞ！」
勝ち誇る見えない敵。
「冗談は、姿を見せてからにして欲しいですわ」
ドルシェは、カートリッジを取り替える。そして、天井のスプリンクラーを狙って撃つ。
「水なんかでは、我々は見えないぞ」
「それはどうかしら？」
ドルシェは、スプリンクラーに再度、撃つ。すると、スプリンクラーから出る水が、赤色に変わる。
「な、何だ！？」
見えない敵が動揺する。
「ペイントスモーク弾ですわ」
何も無い空間に、複数の人間の形が現れる。すかさず、カートリッジを変えて、右肩を攻撃するドルシェ。透明だった敵が、次々と姿を見せる。そして、倒れていく。
「み、見事だ…お前が噂の戦場の女神だな…」
「戦場は余計ですわ。それよりも、一つだけ教えて欲しいですわ。どうやって姿を消したのかしら？」
ドルシェは、銃口をボスらしき男に付き付ける。
「フン…それは言えないな」

男は、右肩を押さえながら不適な笑みを見せる。
「そう言うと思いましたわ。他の兵士さん？この人が話してくれないから、一人づつ消えて頂くわ」
ドルシェは、他の兵士の方へと移動する。そして、倒れて蹲っている兵士に照準を合わせる。
「ハッタリは通用しないぞ？」
男は、ドルシェを睨む。
「あら？ハッタリじゃありませんわ」
ドルシェは、兵士に発砲する。兵士は動かなくなる。
「き…貴様ぁーっ！」
男は、怒りを露にする。
「さぁ、答えなさい」
ドルシェは、冷静に返す。
「貴様は、血も涙も無いのかっ！」
「もう一度、言いますわ。答えなさい」
ドルシェは、次の兵士に狙いをつける。
「くっ…。これだ…このブレスレットによって、光の屈折を引き起こして見えなくなる」
ボスは、これ以上、部下が死んでいくのを我慢出来ずにカラクリを話す。
「ありがとうですわ」
ドルシェは、ニッコリ笑う。そして、死んだ兵士の所に行く。
「…？」
ボスは、その光景を見ている。
「兵士さん？起きる時間ですわ」
死んだ兵士の頭を、銃のグリップで軽く叩く。
「ん…ん？ヒィー！」
目を覚ました兵士が、ドルシェに殺されると思って恐れる。
「失礼ですわ。レディが起こしてあげたのに。もう一度、寝てなさい」

ドルシェは、グリップで後頭部を殴る。気絶する兵士。
「どういう事だ！！」
ボスが怒鳴る。
「びっくりしまして？私が撃ったのは、これですわ」
ドルシェは、銃から弾を取り出す。
「な…！？ペイント弾！？」
驚くボスを見て、ニッコリ笑うドルシェ。
「説明ありがとですわ。あなたの言う通り、ハッタリだったのですわ」
ボスは呆然とする。
「それじゃ、皆さんサヨウナラ」
「待て！ブレスレットを持って行かないのか！？」
「必要無いですわ。それにセンスが無いですもの」
ドルシェは、踵を返して走り出す。ボスは、後ろ姿を見つめる。
「待て！持ってけ。我々の完敗だ」
ボスは、ブレスレットをドルシェに投げる。
「ありがとうですわ」
ドルシェは、再び走り出す。
「戦場の女神…なるほどな…負けたのに、悔しくもない。不思議な気持ちだ…我々…特殊舞台は完敗だな…強さも機転も桁外れだ」

「カルバン将軍！全てのエリアを突破されました！」
連絡係の兵士が、慌てて入って来る。
「突破されただと…？」
カルバンは、怒りが込み上げて来る。
「ビルダー大佐の部隊は、完全に撃破されてしまいました！」
「もう良い。下がれ」
カルバンは、椅子から立ち上がる。
「しょ、将軍！？」
兵士は、動揺する。

「お前らには、任せられん。消えろ」
カルバンは、兵士に銃を向ける。
「将軍！？何をするつもりですか！」
兵士は後退り、足がもつれて転ぶ。
「もう用が無い――という事だ」

『バリィ――――――ン！！』

派手にガラスが割れる音が響く。

「ガルぅ～♪」
ガラスを割った犯人は、ユニコーンであった。
「強化防弾ガラスに変更したはずだが…伝説のユニコーンには、関係なかったようだな」
カルバンは驚きもせずに、冷静に冷徹な視線でユニコーンを睨む。
「ガル…ガル…」
ユニコーンは、突撃体制に入る。
「まぁ待て。私のペットにならないか？私は、もうすぐで世界を支配する存在になる。悪い話だとは思わないが？」
「ユニコーンさんは、私の友達ですわ。あなたの様な方には、不釣り合い過ぎますわ」
ドアの方で声がする。ドルシェだ。
「ガルぅぅぅ～！！」
ユニコーンは、ドルシェを見てはしゃぐ。
「特殊部隊をよく振り切ったな。ドルシェ君」
カルバンは、臆する事なく言う。
「特殊部隊？そんなのいませんでしたわ」
「そんなはずはない。私の特殊部隊は、史上最強かつ完璧だ」
カルバンは、苛立ちを見せる。

轟音一発。
「ぐっ！卑怯だぞ！？」
ドルシェの銃弾は、カルバンの右肩を撃ち抜く。
「卑怯？武力を持たない市民を盾にして、欲望を満たそうとしている人に言われたくないですわ」
ドルシェは、更に左肩を狙い撃ちする。
「ぐはっ！ま、待てっ！取引きをしよう！」
カルバンは、床にうずくまりながら言う。
「取引き？まずは市民がシェルターに入れる様にしなさい」
「わ、わかった！」
カルバンは、床を這いずりながら電話の受話器を取る。
「私だ！早く私の部屋に来い！敵だ！…な…何…？既にやられた…？」
カルバンは、受話器を落とす。
「見えない兵士の軍団を倒したのか…？」
ゆっくりとドルシェの方を向くカルバン。
「見えない兵士さん達は、下で降参しましたわ。あの兵士さん達が特殊部隊だったのですね。でも、今は関係ありませんわ。取引き不成立で、あなたには消えて頂きますわ」
ドルシェは、カルバンの頭に狙いを定める。
「た、助けてくれっ！わ、私を殺したら、シェルターの解放は無いんだぞ！？」
後退りしながら、命乞いをするカルバン。
「あなたがいなくても、他の兵士さんに頼みますわ」
ドルシェが引き金を引こうとした瞬間。
「ガルっ！！！！」
ユニコーンの蹴りが、カルバンを捉える。
「――！！ユニコーンさん！？」
予想しなかったユニコーンの攻撃にドルシェが驚く。

「い…痛い…頼む…助けてくれ。シェルターの解放はする…」
カルバンは、涙を流しながら言う。ユニコーンは、無線機を口でくわえて、カルバンの前に持って行く。
（ユニコーンさん…私が冷静じゃなかった事に気が付いた？）
ドルシェは、ユニコーンの行動を眺める。
「ガルっ！」
「わ、わかった！」
カルバンは、完全に服従していた。
「…私だ！すぐに全シェルターを、市民に解放するんだ！すぐだっ！」
「それだけじゃダメですわ。市民が混乱しない様に、兵士の誘導をつけてくださる？」
ドルシェは、銃口を額に付き付けて言う。そして、ユニコーンを見て、いつもの笑顔を見せる。
「ガルっ♪」
（やっぱり…いつもの私なら、すぐに額を狙ったりしないですものね…）
ドルシェは、反省しながら再び、カルバンを睨む。
「はいっ！言います！全兵士は、市民の安全を確保しつつ誘導に全勢力を傾けろっ！わかったなっ！」
カルバンは、ちらちらドルシェとユニコーンを見る。
「カルバンさん？核はどうなさいましたの？」
「核まで知ってるのか…いや、知っていたんですか！？」
「早く言いなさい」
ドルシェは、また銃口を付き付ける。
「はひっ！核はバミューダ海域に持って行きました！」
「あら？それは、ご苦労様ですわ」
「へっ？」
カルバンは、現在の状況をわかっていなかった。核を保有して隠したつもりだったが、結果して国の手伝いをしていた。

「それでは、ユニコーンさん行きましょう」
「ガルっ♪」
「ま…待て！？身柄拘束とかしないのか？」
「…今は、あなたを相手にしている暇は無いのですわ。予定よりも四分もオーバーしたのですから。拘束して貰いたければ、勝手にどうぞ？」
ドルシェは、ユニコーンに跨り、時計を見ながら言った。
「……」
唖然とするカルバン。
「さぁ！ユニコーンさん！三十分まで、後、二十分しかありませんわ！飛ばしてクレス将軍の所まで、お願いしますわ！」
「ガルぅぅぅ～♪♪♪」
ユニコーンは、一気に消えて行く。

「ソルジャー聞こえるか？」
クレスは、出発前の準備をしている。
「聞こえてますよ」
「こいつで、火山の穴を塞ぐには、どの角度だ？」
「正直言って、厳しいです。唯一ある角度なら、穴の中の山頂側に突っ込んで、運がよければ崩れた山頂で埋まるかも…です」
「よし。それで行こう。」
クレスは、コクピットに乗り込む。
「しかし、その角度だと脱出しても穴に落ちてしまいますが…」
「その時は諦めるさ」
クレスは、全く動揺しない。
「…将軍。やはり、作戦を変えるべきです。今、将軍がいなくなったら、軍の統率も乱れます。何よりも我々が――」
「ソルジャー。私は死ぬつもりはない。ドルシェが必ず帰ってくる」
「しかし、ドルシェからの連絡がありません。間に合わない可能性の方が高いんですよ！？」

「大丈夫だ。私が信用出来ないか？」
「…わかりました。脱出ポイントで確実に脱出して下さい」
「うむ。さぁ行くとするか」
クレスを乗せた機体は、ゆっくりと動き出し、離陸する。
「ソルジャー。皆に伝言を頼む」
「はい」
「敵は化け物だ。最悪を想定して最善を尽せ。そして、何が何でも生きて、明日を迎えろ――だ」
「了解しました…何か別れの言葉みたいですね」
無線の向こうのソルジャーの声が、悲しみに満ちているのがクレスにも伝わった。
「そう悲観するな。悲しむのは、私が死んでからにしろ」
「クレス将軍…」
（この地点で、ドルシェが来ないという事はダメか…）
クレスは、辺りを見回す。
「脱出ポイントまで、後、何秒だ？」
「十秒です。」
「カウント頼んだぞ」
機体は、穴の上を通過する。
「五秒…四秒…三…二…一…脱出です！」
「…どうやら、死神に好かれたみたいだ。脱出回路が作動しない」
クレスは、脱出ボタンを何回も押すが、反応しない。
「将軍！？」
「まぁ、この方が正確になる」
「何を言っているんですか！！早く脱出して下さい！！！」
ソルジャーは怒鳴る。
「ソルジャー、伝言頼んだぞ！」
「将軍！将軍！返事をして下さい！」
『ガゴぉぉ――――――――！！！！！！！』

強い衝撃音と爆発音を最後に通信は途絶える。
「将軍……」
ソルジャーの目から、涙が溢れる。そして、通信機の前で敬礼をした。

「ギリギリ間に合いましたわ！」
爆発と炎上する山を見て、呟くドルシェ。
「間一髪だったぞ…」
「ガルぅ～♪」
「無事なら良いですわ」
正に衝突の瞬間――ユニコーンは、角でガラスを割り、将軍をくわえて救出したのだ。
「ドルシェ。カルバンの軍を制圧できたのか？」
「えぇ、もちろんですわ。市民のシェルター移動も始まっています」
「見事だ。見事だが、そろそろ俺を降ろしてくれないか？」
「ギャル？」
ユニコーンに、咥えられたままのクレスは懇願する。

地上に降りた二人と一匹は、火口を見詰める。
機体の爆発で、山頂が崩れ始めたのだ。土砂は、穴をどんどん埋め尽していく。
「将軍の作戦は、成功みたいですわ」
「ギャンブルみたいな物だったがな」
ドルシェは、少し微笑んで携帯を取り出す。
「ソルジャーさんかしら？作戦は、成功ですわ。将軍の救出もご心配なく」
「ホントか！？…良かった…ドルシェ、お疲れ」
ソルジャーの声は、安堵に満ちていた。
「お礼は、ユニちゃんにお願いしますわ」

「ユニちゃん？」
「私達の新しい仲間ですわ。ユニコーンのユニちゃん」
「ははは。今回の作戦の立役者だからな」
「ガルっ！」
「何故、私の部隊は、本当に特殊な奴等の部隊になるんだ？」
クレスは、隊員の面子を思い出しながら呟く。
「あら？楽しい方が素敵ですわ」
ドルシェの言葉に、肩を竦めるクレスであった。

～闇の力～

「なぁ、マーズ」
「あん？」
「何で、俺達、走ってんだ？」
「宮殿を目指す為だろ。頭悪ぃな」
「そうじゃねぇ！瞬間移動で一発なんじゃねぇのか！？」
「甘いな。宮殿まで瞬間移動で体力使ったら、その後が歩けねぇ」
「威張るなよ…使えねぇ力だな」
「ダガース。我慢してね。また寝られたら困っちゃうから」
「リトちゃん、ひでぇ…俺って何だか、可哀想だな…」
二人と一匹は、宮殿を目指して走る。

「こりゃまた強そうな敵だな」
マックスターは、祭壇の間にいる異形の生物を見上げる。その姿は、巨人と言っても過言でない大きさだった。

「人間国宝に指定してやりたいな」
ハワードは、巨人を見ながら皮肉を言う。
「だが、視覚的には悪くないな」
巨人は、人間と変わらない姿をしている。
「ホントだな。魔弾が効けば良いが…」
ハワードは、ガトリング砲を撃ち鳴らす。しかし、さっき同様、弾は床に散らばる。
「やっぱり駄目か」
ハワードは、バズーカに切り替える。
「弱き人間よ…あがくな…結果は、見えている」
巨人は、見下ろしながら言う。
「しかも、言葉喋るのかよ」
マックスターは、驚く。
「下等な生物だけに…行動も下等だな…」
「お前に言われたくない！」
マックスターは、斬り込む。
「言ったはずだ…無駄だと…」
巨人は、手のひらをマックススターの方へ向ける。すると、刹那、閃光が辺りを覆う。
「マックスター！」
閃光が消え、目の前にあるのは壁に激突して、自分の剣で串刺しになっているマックスターだった。ハワードは、その光景を見て、心から怒りが込み上げてくる。
「てめぇ…！」
ハワードは、バズーカ砲を、怒りに任せて撃ちまくる。しかし、届かない。
「お前も死に急ぐか…」
巨人は、また、手のひらを向ける。
「同じ手を喰らうか！」
ハワードは、ジャンプする。そして、巨人の頭上から、バズーカ砲

を撃つ。
「やはり…下等生物だな…」
巨人は、頭上にいるハワードを睨む。
「ぐっ…！！！！！！！！！」
ハワードは、何が起きたか把握出来ない。ただ、睨まれただけで、天井に激突した。落ちて行くバズーカ砲。
（近付く事もできねぇ！何か良い手は無いのか！？）
「お前に手段は無い…あるのは、死の弾効だけだ」
巨人は、更に指をハワードに向ける。指の先から、光線がほとばしる。そして、ハワードの胸を貫いた。
「そ…そんな…」
ハワードは、マックスターの方を見る。動く気配もない。
「く…そぉぉぉぉぉぉ！！」
全ての力を振り絞るハワード。
「せめてもの情けだ…」
巨人は動き出す。ジャンプをしてハワードの前へ詰め寄る。
「俺達は死なねぇ！！」
ハワードは、天井から抜け出して、落下して行く中で、ガトリング砲を構える。そして、目の前にある、巨人の顔面に超至近弾を打ち込む。
「オォォォォォォォォ！！！！！」
雄叫びをあげ落下しながら撃ち続けるハワード。しかし、巨人は、平然とハワードの落下に付いて行く。
「さらばだ。人が産みし欲望の存在よ」
巨人は、ハワードを挟むように、手をかざす。一瞬だった。手のひらの間で閃光が走り、ハワードは黒焦げとなり床に落ちる。
「哀れなり…小さき存在よ…」
静かに着地をした巨人は、マックスターの方を見る。
「まだ…生きるか…」
マックスターは、自分に刺さった剣を抜こうとしている。

「友のもとへ行くが良い…」
巨人は指先から、光線を発射する。光線は、マックスターの額を貫く。そのまま、マックスターは動く事はなかった。
「いよいよ…浄化の始まりだ…」

不意に止まるマーズ。
「ダガース」
「あぁ。無茶苦茶、嫌な予感がするぜ」
マーズは、携帯を取り出す。
「ソルジャー。他の奴等は無事か？」
「将軍とドルシェは連絡が付いたが、ハワードとマックスターが音信不通だ。恐らく、異空間に紛れ込んでいる」
「妙に胸騒ぎがする」
「将軍に報告する」
「あぁ。頼んだぜ。こっちは、時の神殿まで、あと少しだ」
「わかった。マーズ気を付けろ。敵は化け物のようだぜ」
「そのようだな」
「あと、将軍から、生きて明日を拝めとの事だ」
「死ぬつもりは、さらさらねぇ。安心しろと言っておいてくれ」
「明日、自分で言えよ」
「ふっ…そうするか。じゃ、頼んだぜ」
「任せろ」
二人のやりとりを不安そうに見詰めるリト。
「仲間に何かあったの？」
一瞬考え込むマーズ。しかし、真実を伝える事にする。
「北の宮殿に向かった仲間が音信不通らしい。連絡だけは、マメにする奴等だけに気掛かりだな」
マーズは、北の方角を見詰める。
「何も無ければ良いけど…」
リトは、見知らぬ二人の安否を気遣う。

「大丈夫さ。俺らは、どんな状況でも死なない様に訓練されているんだぜ？」
ダガースが、元気付けようとする。
「こらっ！ダガース！俺の台詞と役を取るんじゃねぇ！（怒）」
「下心を作らなくちゃ、台詞を言えないヤツに決め役なんかねぇんだよ！」
「んだとぉ！？」

『ゴツン！』

リトの一撃が飛ぶ。二人は、地面にひれ伏す。
「もう！マーズの仲間は心配だけど、私達が行かなくちゃ本当に終わっちゃうのよ！？」
「最近のリトちゃん…だ…」
「あぁ…そして、逞しくなったな…」
「同感…」

「クレスです。カルバンの一件と火口の処理は完了です」
「カルバンの件の報告は受けている。ご苦労だったな。市民もだいたい非難完了だ」
「核の方はどうですか？」
「無事に全弾、港を出発出来そうだ」
「それは何よりです。我々は、これより北の宮殿に向かいます。現地調査しなければならない事が出来ました」
「そうか。軍隊の非難勧告まで、一時間程だ。それまでには戻るんだぞ？」
「了解しました。大統領も、早めの非難が宜しいかと」
「お前達が戻ってきたらな」
「…わかりました。では」
クレスは、電話を切る。

「大地震の準備は、順調のようですわね」
ドルシェは、銃の手入れをしながら言う。
「あぁ。とりあえず、北の宮殿に行く。ソルジャーの報告が気になる」
「わかりましたわ。将軍、ユニちゃんで宜しいかしら？」
ドルシェは、銃をホルスターに仕舞いながら言う。
「…乗る物がないからな。頼んだぞ、ユニコーン」
「ガルっ♪」
「将軍、ユニコーンじゃなくて、ユニちゃんですわ」
「どっちでも良い。行くぞ」
「まぁ。愛想の無い事…」
二人は、ユニコーンにまたがる。そして、一気に北の宮殿を目指して消えて行った。

「本当に早いな」
クレス一行は、北の宮殿に辿り着いた。
「将軍、人の気配がしませんわ」
「…だな。中に入るぞ」
「ユニちゃんは、ここで待っててちょうだいね」
ドルシェは、ユニコーンの頭を撫でる。
「ガル」
二人は、宮殿の敷地内へと歩き出した。
「将軍、化け物の残骸ですわ」
二人の前には、ハワードとマックスターが壊滅させた怪物の破片が散乱している。
「どうやら、ここも襲われたみたいだな」
「だけど、二人の姿がありませんわ」
「近道もあるみたいだし…中か」
クレスの視線の先には尽く破壊された壁があり、祭壇の間までの近道を示していた。

「まぁ、親切ですわね」
ドルシェは、二階のバズーカによる穴を見詰める。
「…」
「どうやら、祭壇の間に行けば、全て解りそうだな」
「そのようですわ」
二人は、宮殿の中へと入って行った。

〜人〜

「やっと、辿り着いたな」
マーズは、そびえ立つ神殿を見上げる。
「ここに、お兄様もいる…」
リトは、ヤーヴェと会える事に期待を膨らませる。
「どうやら、ただでは入れてくれねぇみたいだぜ？」
ダガースは、周りを見渡す。リトには、何も見えない。
「リトちゃん、ダガースは鼻が利く。早く入るぞ」
マーズは、リトを促す。
「俺が相手しててやるから、さっさと行ってきな」
ダガースは、扉に背を向ける。
「ダガース！一緒に中に入れば大丈夫なんじゃないの？」
リトは、ダガースを説得しようとする。しかし、聞こえないフリをする。
「マーズ。リトちゃんを任せたぞ」
「…わかった。後で、ドッグフードたらふく食わせてやっからよ」
「犬の食い物なんか食えるか！早く行け！」
「へいへい。ドッグフード嫌いの犬も珍しいぜ…」

マーズは、扉を開く。
「行こうぜ、リトちゃん」
リトは、ダガースの後ろ姿を見ながら中へと入って行く。
「ダガース！死なないでね！」
リトは、抑えきれない不安を言葉にする。
「マーズを宜しくな」
（逆だろ…（＝　＝；））
「さぁ、そろそろ姿を見せな！盗撮野郎！」
「野郎じゃないわ。せっかく茶番劇を最後までやらせてあげたのに」
ダガースの前に現れたのは、グラマラスな女だった。
「女かよ！？また、やりにくいヤツが出てきたぜ」
ダガースは、容姿を見て露骨に嫌がる。
「私に性別なんて無いわ。名前はクレオパトラ。聞いた事があるでしょ？」
「クレオパトラ！？って、あの古代のクレオパトラか！？」
「そうよ。この時代にも名前が残ってて光栄ね」
「ってか、性別、女じゃん…」
ダガースは、よっぽど女と戦うのが嫌らしい。
「『人』は死んだら、男も女も関係ないのよ。無に帰すの。まぁ、獣人のあなたに話しても無駄でしょうけどね」
「ムッ…人と人間の話位知ってんぞ！？」
馬鹿にされた事に腹を立てるダガース。
「ハインズに聞いたのね。じゃ、『人』にも二通りあるのも知っているかしら？」
「二通り？…男と女」
「…無駄だったようね。もう良いわ。死になさい」
クレオパトラは、人差し指を前に出す。
（爪長っ！）
クレオパトラの爪は、長くなり過ぎて綺麗に巻かれている。しかし
――

「あぶねっ！」
クレオパトラの爪は突然動き出して、ダガースを襲う。間一髪避けるダガース。
「一度避けた位じゃ終わらないわよ？」
次々に伸びて襲ってくる爪。ダガースは、全てかわす。
「気持ち悪いヤツだな！？動物相手に飛び道具は、汚ねぇぞ！」
「地上は、私達の物よ。邪魔な存在は消えなさい」
「二通りの意味が解ったぞ！お前らは、時の女王のグルだろ！？」
ハインズも人だったが、明らかに違う。ダガースは、避けながら叫ぶ。すると、攻撃が止む。
「その通りよ。馬鹿な祖先が神に背を向けていなければ、私達は人間なんかに殺されずにすんだのよ」
「ハインズは、地球を守りたがっていたぞ？」
「そんな輩もいたわね。彼等は、『人間』との共存を考えているのよ。でも、私達は、『人』だけの世界を望んでいるの」
「勝手に決めるなよ…」
「勝手じゃないわ！いい？人とは『破壊の使者』と呼ばれた神の遣い。本来の目的は、地上を神に還す為の制圧。それが、事もあろうに、４人の使者が、地上を自分達の物にしようとしたのよ。それが私達の祖先の『人』。時を支配した使者が、怒りの身を委ねる気持ちがわかるわ。神に背を向けてまで創った地上が、これなんですから」
「そいつらだって、地上を理想郷にしたかったんだろ？形は違っても、お前らと同じ思いなんじゃないのかよ！」
ダガースは、反論する。
「馬鹿ね。『神の遣い』の思考は、全ては神の為よ。しかし、『人』は、神と人の為だわ。この違いが人間を生み出したのよ。そして、人間は、都合の悪い人を葬ってきたのよ。だから、人間に葬られた『人』は、時の支配者に忠誠を誓ったのよ」
「逆恨みかよ。人も人間と変わんないねぇ」

ダガースは、皮肉を込める。
「今の言葉、撤回しなさい」
クレオパトラの表情が変わる。
「嫌だね。お前こそ地獄に帰れよ！」
ダガースの口から、火の玉が飛ぶ。クレオパトラは、手で払う。
「やっぱり、これじゃ効かないか」
ダガースは、威嚇するポーズをする。
「獣人。もう遊びは終わりよ。消えなさい！」
クレオパトラは、左手を天にかざす。すると、雷がダガースのもとへ落ちる。間一髪で避けるダガース。
「何だ！？」
「私は、東の宮殿に葬られたクレオパトラ。天の力を借りるのに苦労はしないのよ」
雷は、スピードと威力を増して、ダガースに襲い掛かる。
「ちょっと、煽り過ぎた…かな？」
ダガースは、焦りを覚えた。

「誰もいないね」
リトは、螺旋階段を登りながら言う。
「神殿って、普通、何人位いるんだ？」
「この規模だと、五百人はいてもよさそうだけど…」
「もしかしたら、地震に備えて避難したんじゃねぇかな？」
マーズは推理をする。
「そうかもね。でも、法王様はいると思うよ」
「お偉いさんって、真っ先に逃げるイメージがあるんだよなぁ」
マーズは、軍部の何人かを思い浮かべる。
「法王様は、立派な人だよ。どんな人の話でも聞いてくれるんだから」
「へぇ。まさに仁徳者だな」
リトが、後ろをチラチラ見てるのに気が付くマーズ。

「何か変か？」
「…うん。さっきから誰か付いてきてる気がするんだけど…気のせい？」
（やっぱ、良い勘してるぜ…）
「まぁ、宮殿の瓦解を考えれば、何かが来てるかもな」
マーズは、平然を装う。リトは納得していない感じだが、マーズに付いて行く。
「それにしても、長い階段だなぁ。法王は、最上階か？」
マーズは、上を見てウンザリする。
「最上階は、儀式の間だから、その下の階が法王様がいる部屋だよ」
「たいして変わらねぇ…（―・―；）」
二人は、階段を登り続ける。不意にリトが立ち止まる。
「リトちゃん、どうした？」
振り向くマーズ。
「何かおかしいよ。いくら何でも、階段長すぎるよ」
リトは、異変に気が付く。マーズは、携帯を取り出す。
「また異空間かよ。勘弁してくれよな」
マーズは、周りを見る。
「時間の無駄だ！出て来い！」

「…地上を汚す者よ…お前に用はない。消えろ。」

何処からか声がする。
「生憎だったな。俺だけ帰る訳にはいかねぇんだなぁ」
マーズは、辺りを冷静に見る。
「そこか！」
手のひらから、光の矢が飛ぶ。
「――！？」
光の矢は、壁の手前で爆発する。煙が消えてくると、声の主が現れてくる。その姿は、人間と何も変わらない。

「ほぉ。精霊使いか…」
「ちげぇよ。ただの人間だ。そういうお前は、『人』か？」
「…私は、カエサル。そこまで知っているならば、話は早い。罪深き人間よ、消え失せろ！」
「リト！俺から離れるなよ！」
カエサルは、剣を抜く。一気にマーズ達との間合いを詰める。

ガキッ！

カエサルが降り下ろした剣を、リトに羽織らせていた革ジャンで受け止める。
「――！」
カエサルは、一旦退く。
「驚いたか？まさか、革ジャンに止められるとは思わなかっただろ」
マーズは、革ジャンを広げる。ただの革ジャンだ。
「どうやったの？」
リトも驚く。
「じきにわかるさ…今は秘密にしておくぜ…」
（決まった…（「ー＋」）ニヤリ）
「…どうせ、風の力とかでしょ…」
「何でわかったんだ！？」
「…アホ」
マーズは、うなだれる。
「頑張って、間一髪で捉えたのに…」
「わかったわよ！後で沢山聞かせて貰うか――！」
カエサルは、二撃目を仕掛けてくるのが目に入るリト。今度は、先程よりも数段早い。
「ちっ！これでも喰らえ！」
マーズは、光の矢を何本か放つ。カエサルは、全て剣で払う。そして、マーズの前に到達する。

「今度は手加減せん！」
カエサルは、剣を思いっきり振り下ろす。
ガキッ――――ン！！
「ぬぅっ！？」
カエサルの表情が固まる。
「予想外だったか？未練たらしのカエサル？」
マーズは、不適の笑みを溢す。またもや革ジャンで止めたのだ。リトは、完全にやられると思って塞ぎ込んでいる。
「我の一撃を止めた事には驚いた。だが、スピードに遅れ気味だったぞ？」
「そこに気が付くとは、お前も結構やるじゃねぇか」
「その潔さ、気に入った。本気で相手をしてやるぞ」
カエサルは、剣を収める。そして、両腕をクロスさせて力む。
「うぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」
「今度は何やるんだ？」
マーズは、カエサルの姿を見つめる。そして、リトの手を引っ張る。
「行くぞ、リト！」
「ちょ、ちょっとマーズ！？」
リトは、突然に引っ張られ焦る。カエサルが、段々と赤味を帯びてくる。
「今しかねぇ！はっ！！」
マーズとリトは、カエサルの前から消える。
「――――！？」
カエサルは、さすがに驚きを隠せない。
「瞬間移動？うぉのれぇぇぇ！！！何処に行ったぁぁぁ！」
怒りに荒れ狂うカエサル。溜め込んだ力が、一気に放出されて、異空間を破壊する。

「危なかったぜ。あんなマッチョな怪物、まともに相手してられっか」
マーズとリトは、正常な空間に帰り着いた。
「カエサルって、古代のカエサル？」
「あぁ、多分な。大方、人間に殺された『人』が、復讐する為に、時の女王と手を組んだんだろ。ハインズとは、明らかに違っていたしな」
「何で、こんな事になっちゃったんだろ…？」
「…こんだけ長い時間かけりゃ、歯車が狂う事もあるさ」
「悲しいね…」
「そうでも無いぜ？今回の事で、人間は多くの事を学んだんじゃねぇか？問題は、この後にどれだけ生かせるか？だろ。だが、全てを終わらせられたんじゃ解決はしねぇ」
真顔で話すマーズ。
「そうだよね…終わりが始まりじゃないよね。変えなくちゃ始まらないんだよね」
「そういう事だ。さぁ、マッチョなカエサルが来る前に行こうぜ」
「うん！」
二人は、現実の階段を進み始めた。

「遅かったか…」
「…。二人の冥福を祈りますわ」
クレスとドルシェは、祭壇の間で、ハワードとマックスターの遺体を発見した。
「致命傷は精霊の力みたいですわ」
「精霊？怪物が精霊を操れるのか？」
「わかりませんわ。この二人をここまで出来る存在も考えられませんわ」
「…いや…いる」
クレスは、エイシスが葬った怪物を思い出した。

「どうやら、相当に危機的な状況のようですわね」
ドルシェが珍しく深刻なセリフを言う。
「仮に怪物がいたとして、二人を倒して何処に行く？」
「神殿…？」
「いや、違う。まだ崩壊していない西の宮殿に行くんじゃないか？」
「そうですわね。行きますか？」
「行くのは、私一人でいい。お前は、時の神殿に向かうんだ」
「…？」
「推測に過ぎんが、宮殿の共通項目は、古代文明が栄えた場所だ。恐らく『人』が作り、人間が滅ぼした場所だろう。西も古代文明が栄えた形跡がある場所だ」
クレスは、ハワードの亡骸にジャンパーをかける。そして、マックスターの遺体の方へと歩く。
「時の神殿は違う――という事ですわね」
ドルシェは、ハワードのランチャーとバズーカを彼の横へ置き、亡骸の側でしゃがみこむ。
「その通りだ。あそこに文明があったという史実は無い。東はクレオパトラ、北にはツタンカーメン、南が、カエサル。そして、西には、最後の『人』の王のクフ王が眠っているはずだ。奴らの誰かが、クフ王を解放する為に、西に向かう可能性は高い」
クレスは、マックスターを刺している剣を抜き、落ちてくるのをしっかりと受け止める。
「すまなかったな…お前達が先に死んでしまう事になるとは…」
マックスターの頭を撫でるクレス。まるで、自分の子供を寝かせる様に…。
「ドルシェ。神殿に向かってくれ。マーズ達が危ない。西のクフ王は、私が何としても止める」
「でも、将軍の言う様に誰かが向かっていたら…？」
「心配するな。お前は、マーズ達と合流するんだ。『人』の復讐を止めるんだ。それが、終末を止める最後の手段かもしれん」

クレスは、マックスターを抱きかかえ、ハワードの横に二人並ばせてあげる。
「…わかりましたわ。それでは、ユニちゃんと一緒に、西の宮殿経由で送りますわ」
ドルシェは、立ち上がる。
「頼んだぞ」
「だけど、その前に…」
ドルシェは、マックスターの斬魔刀を腰にかける。そして、ハワードのバズーカ砲と自分のバズーカ砲を交換する。
「…？」
クレスは、ドルシェの行動を見つめる。
「彼等も仲間ですわ。きっと一緒に戦いたがっていますわ」
二人の装備をしたドルシェは歩き始める。
「そうだな…。連れて行ってやれ」
クレスは、ドルシェの姿を見て納得をする。仲間の大切な物を守る。それが道具かもしれないし、心かもしれない。クレスの部隊は、そんな心意気を持っていた。
「行くか…こんな戦い、終わらせてみせる…」
クレスは、心に新たな誓いを立てた。

「カルバン様！早く我々も避難しないとマズイです！」
カルバンは、ワインを飲む。
「退却は、お前達が先に済ませろ。私は、しばし優雅な時間を楽しむ」
「しかし――！」
「私に逆らうのか？」
カルバンは兵士を睨む。
「は、はいっ！すぐに退却致します！」
兵士は、走って部屋を出る。
「クレスの部隊とは大違いだな…」

カルバンは、肩の傷を触りながら外を見る。空は、厚く黒い曇が、覆い始めていた。
「さて。終末を楽しむとするか…」
ワインを一口飲み、葉巻きを吹かす。

どごぉぉぉぉん…！

下の階で爆発音がする。宮殿が大きく揺れる。
「ぬぅ！？」
カルバンは、机にしがみつく。
「何事だ…？」
おぼつかない足取りで部屋を出て行く。
兵士が一人、走ってくる。
「将軍！敵の襲来です！」
青ざめた顔で兵士が叫ぶ。
「敵の襲来！？クレスの部隊か？」
「違います！巨人です！総員で応戦していますが、攻撃が効かないという情報が入っています！」
「巨人…。いよいよ始まったか…！いいか！お前らじゃ歯も立たん相手だ！撤退する様に見せかけて捕まえろ！私も行く！」
カルバンは、走り出す。
「しょ、将軍！？」
兵士は、カルバンの後を追う。

「この部屋が法王の部屋か？」
「うん」
マーズは、ドアを蹴り壊す。部屋の中は静まり帰っている。
「ん？誰だ！」
部屋の中央にたたずむ人影に気が付くマーズ。リトは覗きこむ。
「お兄様…？」

その姿は、まさしくヤーヴェであった。
「リトか…よく来たな」
リトが前に出ようとした瞬間をマーズが止める。
「何かおかしい」
マーズは、周りを確かめる様に見渡す。
「あれは間違いなくお兄様よ！」
「…リトちゃん落ち着くんだ。俺が聞いてる兄ちゃんなら、こんな所で油売ってるヤツじゃないんじゃねぇか？しかも、この部屋は異空間だ」
マーズは、構える。
「そんな…あれが幻…？」
リトは、たたずむヤーヴェを凝視する。
「リト。その男は誰だ？」
ヤーヴェは、マーズを見る。
「俺よりも、お前は誰だよ？」
マーズは、すかさず聞き返す。
「失礼した。私は、リトの兄のヤーヴェだ」
リトには、上から下まで兄のヤーヴェに見えていた。
「俺は、マーズだ」
「どういう経緯か知らないが、これは私達、兄弟の問題だ。帰ってくれ」
「お兄様！マーズは、私を助けながら、此処まで連れて来てくれた恩人です！」
「ここからは、その優しさが命取りになる。事態は、そんなに甘くない」
「お兄様！どうしたんですか！？まるで、別人です！」
リトは、必死に訴える。
「無駄みたいだぜ。こいつ目がマジだ」
マーズは、ヤーヴェを睨む。
「何があったのですか！？」

「…マーズとか言ったな。此処まで、妹を連れて来てくれた礼を言う」
「お前は何を企んでんだ…？」
マーズは、直球勝負に出る。
「時の女王には勝てない。希望は絶たれた」
ヤーヴェの言葉は、二人を釘付けにする。
「どういう事…？」
リトは、言葉の意味を求める。
「これが答えだ――」
ヤーヴェの体が、空中に浮く。
そして、鈍い音と共に破裂する。
「い…いやぁぁぁぁぁぁ…！！！」
飛び散る返り血を浴びながら、リトは絶叫する。マーズは、動じない。
「悪趣味だな…マジでキレたぜ…？」
マーズは、床に手を付く。
「はっっっ！」
気を吐く声と同時に、電気が床から天井に向かって走る。
「壊れろっ！！！」
法王の部屋が、崩れ始める。すると、部屋の下から違う部屋が現れてきた。
「お兄様…」
リトは、ショックから抜け出せていない。
「リト！ヤーヴェは、死んじゃいねぇ！諦めるなっ！！」
マーズは、心なく立ち尽くすリトに激を飛ばす。
「でも…でも、目の前で…」
リトの瞳から、大粒の涙が溢れ出す。
「まやかしだ。異空間だから出来る芸当だ」
マーズの言葉に表情が固まる。
「まやかし？嘘なの？」

「あったりめぇだ。人間のヤーヴェが異空間を作る理由がねぇ。悪趣味な『人』が、やりそうな手段だぜ」
マーズは、崩れ終わった空間を見渡す。先程の空間とは違う景色に変わっていた。
「舐めやがって…」
マーズは、辺りに殺気などが無い事に気を配る。
「マーズ！」
リトが呼ぶ。振り向くマーズ。
「どうやら、完全に出し抜かれたぜ、ハインズ！」
マーズとリトの先には、ハインズがいる。
「出し抜いたのではない。事情が変わったのだ」
「くだらねぇモン見せといて、事情もクソもあるかよ？」
マーズは、光の矢を放つ。ハインズは、素手で受け止める。
「退かぬか…それも良かろう。相手になるぞ！」
弓矢を素早く取り出すハインズ。そして、一気に矢を放つ。
「はぁっ！」
マーズは、右手を振り上げて風を巻き起こす。矢は風に飛ばされる。
ハインズは、怯まずに突撃してきた。そして、剣を抜きマーズに襲いかかる。
「おせぇ！」
マーズは、右手から炎を発射する。
「ちっ！」
さすがに、ハインズは避ける事を余儀なくされる。
「やはり、想像以上に厄介なヤツだな」
ハインズは、弓をひく。
「だが、風の精霊の力を借りた一撃をかわせるか？」
矢の周りを空気が渦を巻き始める。
「避けるなんて、めんどくせぇ事はしねぇ。潰すだけだ」
マーズは、腕をクロスにする。
「面白い。地上と最後の別れを楽しめ！」

ハインズは、矢を放つ。空気の渦は、矢を回転させて威力を増す。
まるで、竜巻を纏った矢のようだ。
「んなもん、ちっとも驚かねぇ！」
マーズは、クロスした腕を開く。クロスの形をした光が、竜巻の矢とぶつかり、激しく爆発する。リトは、吹き飛びそうになり、必死にドアの縁に捕まる。
「本当に風の力を潰すとは…」
ハインズは、目を丸くしながら驚嘆する。
「まだだ。てめぇの事情が何だか知らねぇが、俺の前で、女を泣かせた罪は重いぜ？」
二人は睨み合う。
「二人ともお願いだから止めて！」
リトは、心から叫ぶ。誰も無事で済まない事態が起こる事に、不安を抱く。
「リト様。残念ですが、これ以上は先に進む事は叶いません」
「ハインズ！何で！？あの時のあなたから感じた、地上を守りたい、という意思は嘘だったの！？」
「…」
「答えなさいよ！私には、あなたが泣いている様に見えるのは何故なの！？答えてよハインズ！」
「…リト様…逃げて下さい…」
「…え？ハインズ…？」
ハインズは、下を向いたまま動かない。
「…」
マーズは、無言で見つめる。
「ハインズ！どういう事なの！？」
「…」
ハインズは、何も喋らずにリトの方を見る。その顔は、悲しみに満ちていた。
「…リトちゃん。行こうぜ」

「マーズ？」
マーズは、リトの肩を抱えて向きを変える。
「ハインズ。おめぇが言いたい事はわかった。俺達に任せておけ」
「お前なら理解してくれると思っていた。力になれなくてすまん」
マーズは、親指を立てて返事を返す。二人は、法王の部屋をあとにした。
「頼んだぞ…マーズ…！」

『やはり…そうなりましたか…』

「時の女王…！」

『肉体も魂も還りなさい…』

「ぬぉぉぉぉぉっ――！」
ハインズの周りの空間が歪む。
「必ず…必ず！マーズとエイシスがお前を倒す！」

『私は時を支配する者…何人も私を止める事は許されません…』

「ぐっ…がはっ…！」
ハインズの体が薄れて行く。

「取り込み中に悪いな」

そこにいたのは、マーズであった。
「マ……ズ？」

『…』

「そいつは、今や立派に俺らの仲間なんだわ。貰って行くぜ？」
マーズは、容赦なくハインズの方へと近付く。
「お前…し…ぬぞ？」
体全体が、歪み始めるハインズ。
「よく考えてみたら、ムカムカしてきてよぉ。顔も知らねぇ、何万…いや、何十万歳かのババァに転がされてるってのが納得いかねぇってなぁ」
マーズは、ハインズの周りを、帯電している電気で隔離する。そして、ハインズの胸ぐらを掴み引っ張り出す。
「なっ！？」

『…！』

「驚いたか？さっき、帯電した電磁波で空間を破壊出来る事がわかったからな。これで異空間の問題は解決だ」
ハインズの体が、元に戻る。
「更に言うと『人』は、異空間でしか存在出来ねぇだろ？」
マーズは、得意気に話す。そして、大きな声で更に言う。
「やぃ！時の女王！リトの兄ちゃんを人質にして、こんなザコを操った位じゃ、俺からリトは奪えねぇし殺れねぇぞ！更に言うと、リトの兄ちゃんは、そんなに甘かねぇぜ？今から行ってやっから、若い女にでも化けて待ってな！」
「リト様は何処だ？」
ハインズは、リトの姿を探す。
「見えねぇだろ？だが、ちゃんといるぜ。安心しろ。ちなみに俺には見えるけどな」

『神に逆らう異端の者…その罪は死より重い…』

「笑わせんなよ？『神』だと？神の『元パシリ』が神とか言ってっ

と、俺の『女神リト』が怒るぜ？」

『くだらなすぎるわ…ここで消えなさい…！』

「嫌だね」

辺りが、眩いばかりの閃光に埋もれる。

『…！？』

法王の間に三人の姿はいなかった。

第四部

～盟約の解放～

クレス一行は、西の宮殿に向かう準備をしている。
「将軍。西の宮殿が解放されて四人が復活したら、何が起きるのですか？」
「時の神殿で何かが起こり、終末に向かう可能性が高いな。推測に過ぎんが、あの黒い穴が何かしらの事象に関係している気がする」
「今日はいろいろな事がありますわね。まぁ、おかげでユニちゃんに会えましたけど」
「ガルぅ～♪」
ドルシェは、ユニコーンの頭を撫でる。
「さぁ、行くぞ。それでは予定通り、西の宮殿で私を下ろして、ドルシェは時の神殿に向かって、マーズ達の援護だ」
「わかりましたわ」
二人はユニコーンに股がる。
「気を抜くなよ？」
ユニコーンは、飛び発つ。

「ハッ…ハッ…ハッ…」
ダガースは、ビルの陰に隠れる。
「雷と爪って、どんな攻撃だよ…（怒）」
「獣人！出てらっしゃい！隠れても無駄よ！」
クレオパトラの声が響く。
「俺の攻撃は効かねぇ。スピードもパワーも俺より早い（多分）。こりゃ勝ちに行くには、本気以上じゃないと無理だな…マーズに、

絶対にステーキ奢らせてやるっ（怒）」
ダガースは、固く心に誓う。
「出て来ないなら、私から行くわよ」
クレオパトラの気配が消える。
「――？消えたのか！？」
クレオパトラの気配が消えた事に気が付き、ダガースは慎重に顔を出す。
そこには、クレオパトラの姿はいない。
「まさか…？」
ダガースは後ろを向く。
「やっぱり…」
振り向いた後ろには、ダガースを見下ろしているクレオパトラがいた。
「獣人がコソコソしたらダメでしょ？」
クレオパトラは、爪を前に出す。
（げっ！？近過ぎだろっ！）
鋭い爪攻撃の超至近弾。ダガースは、たまらずに離れる。
「よく逃げたわね？ご褒美に獣人の話をしてあげるわ」
「別に聞かなくていいし…」
爪が無数飛んで来る。
「ぬぉっ！？」
ダガースは、辛うじて避ける。
「『人』の話は聞いた方がいいわよ。」
「めんどくせぇ…」
「獣人は、人と動物の異種交配の失敗策なのよ。何故なら、人よりも弱くて生命力が短いからよ。だから人の雑兵に過ぎないの。」
クレオパトラは、さげすむ様にダガースを見る。
「だからどうした？そもそも俺は、獣人なんかじゃねぇ。何の不都合もねぇぞ？」
「あなたは、私には勝てないという事よ。そろそろ死になさい」

クレオパトラの爪が地面に潜って行く。
「気持ちわるっ」
その姿に引き気味のダガース。
「雑兵は雑兵らしく、素直に簡単に死ぬべきよ？」
ダガースの顔の下辺りの地面から、爪が突然伸びてくる。
「予想通りかよ！？ってか、勝手に未来決めてんじゃねぇ！」
ダガースは、ジャンプしてかわす。しかし――
「グハッ――！？」
雷に撃たれるダガース。
「うふふ。さすがに人間よりかは、丈夫みたいね。でも、爪も雷も何処から来るかわからないでしょ？」
「この…野郎…！」
ダガースは、クレオパトラを睨み、火の玉をお見舞いする。もちろん、クレオパトラには効かない。
「学習能力ゼロね」
クレオパトラは、胸の辺りで埃を払う様な仕草をする。
「おい？次に攻撃してきたら、お前も痛い目を見るぜ？」
ダガースは、構える。
「そんなハッタリは、通用しないわよ」
クレオパトラは、目を見開く。ダガースの周りにランダム無数の爪が地面から襲い掛かってくる。
「そっちがその気なら行くぜ…？解放――！」
ダガースは、高くジャンプする。
「古より続く盟約を果たせ！」
ダガースの体に異変が起きる。辺りが一瞬歪んで、ダガースの姿が消える。クレオパトラの攻撃は、全て空を切る。
「なに！？何処にいる！？」
事態を飲み込めない。空間が正常に戻り始める。そこには、犬では無いダガースがいた。
「なっ…！スフィンクス！？」

クレオパトラの頭上には、伝説の神獣スフィンクスが優雅に飛んでいた。
「獣人じゃなかったっていうの！？」
クレオパトラは、驚き後退りをする。
「言ったはずだ。次は痛い目見るってな」
ダガースは、急降下する。スピードは、段違いだった。クレオパトラは、避けきれずに激突する。
「くっ…早い…！」
クレオパトラは、吹き飛びながら、爪の攻撃をする。
「死ねっ！」
爪は、ダガースに確実に刺さった。
「お前の攻撃は、効かねぇぜ」
ダガースは、刺さった爪を筋肉の力みだけで、へし折る。
「ギャーッ！私の大事な爪がぁ！」
クレオパトラは、叫ぶ。
「そりゃ悪かったな。そんなに大事なら、自分から離れない様にしとけよ」
ダガースは動じない。
「ぬぬぬ…これならどうだぁ！」
クレオパトラは、雷を落とす。ダガースの姿は、雷光で見えない。
「最大パワーよ！アハハ…は？」
ダガースは、平然とした顔で睨んでいる。傷どころか、焦げ一つない。
「お前、俺を馬鹿よばわりしたが、ホントの馬鹿は、てめぇ自信だったな」
ダガースは、一瞬でクレオパトラの前に現れる。
「地球に住む全ての奴らの代表だ」
ダガースは、前足で裏拳をかます。
「ぐぶっ――！」
クレオパトラは、二回三回と転がりながら、地面をスライディング

する。
「さぁ、次は、死んだ奴らの償いだ」
ダガースの口から、炎の様な雷が飛び出る。
「ヒィーっ！？」
完全に我を見失ったクレオパトラは動けない。そして、モロにダガースの攻撃を喰らう。
「そ…そんなぁ！私が…！必ず、復讐して見せる…！」
空間が、崩れ始める。
「獣人が雷に強いんじゃねぇ。俺が雷に得意なんだよ。あ～腹減ったぁ。この技を使うとホントに腹減るんだよなぁ」
ダガースは、そう言いながら座り込む。すると、段々と犬の姿に戻っていく。
「あ～めんどくせぇけど、あいつら追い掛けるかぁ」
ダガースは、ゆっくり起き上がり神殿の中へと入って行く。

～ドルシェの決断～

「将軍。西の宮殿ですわ」
ドルシェは、ユニコーンから飛び降りる。
「よし。それでは、お前達は神殿――――！？」
クレスは、後頭部に強い衝撃を受ける。薄れ行く意識と霞んで行く視界で後ろを見る。
「お…前…」
ドルシェだった。
「命令違反ですみませんわ。やはり、将軍を行かせる訳には行きませんわ。こうするしかありませんの」

ドルシェは、倒れたクレスをユニコーンの背中に乗せる。
「ユニちゃん？将軍を大統領官邸まで連れて行って下さる？」
「ガルぅ」
「私は大丈夫ですわ。きっと神殿は、マーズさんとワンちゃんが何とかしてくれますわ。だから、此処は、私が行かなくてはいけない所なんですわ。そして、将軍を大統領官邸まで運べるのはユニちゃんしかいないですわ」
ドルシェは、ニッコリ笑う。
「ガルぅぅぅっっ！！！」
その気になるユニコーン。ドルシェは、ユニコーンの扱いに慣れているようだ。
（ユニちゃんは、単純で可愛いですわ）
どうやら、扱い云々よりもユニコーンが単純らしい…。
「任せましたわよ？」
「ガルっ♪」
ユニコーンは、一瞬で消える。
「さぁ、行きましょうかしら。ハワードさん、マックスターさん？」
ドルシェは、宮殿の中へと入って行く。

「既に来ていたのですわね」
目の前に広がる光景は、惨殺された兵士の山だった。ドルシェは、亡骸の一人に目が止まる。
「ハワードさんと同じ…間違いないですわね。相変わらず、将軍の推測は当たりますわ」
ドルシェは、至る所に倒れている兵士に祈りを捧げる。
「戦場…女神…」
倒れた兵士の一人が囁く。ドルシェは、その声を逃さなかった。兵士の元へ駆け寄る。
「あなたは…消えるブレスレットをくれた方ですわね？」
「巨人が…逃げろ…巨人が…」

「…残念ですわ。私、その巨人を追い掛けてきたのですわ」
「普通…じゃない…死ぬぞ…」
「…。あなたに、お借りしたブレスレットを、明日、お返ししなくてはいけませんわね」
「明日…」
「そうですわ。例え、小さな未練でも…小さな約束でも、それが未来に繋がっているのですから、諦めてはいけませんわ」
「…」
「あなたが諦めなければ、あなたに係わる人達の未来が変わりますわ。良い物にしたいでしょ？後は、私に任せてくださる？」
「…うっ…うっ…部下の…友の仇を討ってくれ…！」
「わかりましたわ」
ドルシェは、立ち上がる。そして、奥へと走り出す。

祭壇の間は、静まり返っている。
（これは、異空間…？）
「まだ、下等生物がいたか…」
煙が立ち込める。その中に、人影が現れる。
「あなたが、有名な巨人さんかしら？」
ドルシェは、はっきり見えない人影を睨む。
「女よ…お前も死を急ぐか…？」
「外れですわ。生きる為にきたのですわ。ツタンカーメンさん？」
「ふっ…今の時代では、そう呼ばれているのか…」
人影は、だんだん姿を現す。
「あら？大昔は違うのかしら？」
「『サタンアメン』…古代より『人』を捨て、悪魔との盟約を交わしたが故の呼び名…」
「本当の悪…今のあなたに相応しい名前ですわ」
「下等生物よ…私が悪なら、お前らは何だ…？エデンを汚し、支配者の顔をして、全ての頂点にいる様な傲慢不遜の文明…正に悪その

ものでないのか…？」
「返す言葉も無いですわ。でも、その人間の歴史を作った原因も、あなた方なんじゃありませんの？そして、人間の犯した罪を繰り返すのも、あなた達『人』ですわ」
「人間ごときに『人』が劣るというのか…！」
「その『人』だとか『人間』だとか言っているのが、傲慢不遜の文明の始まりだと思いますわ」
「面白い…一万円前と同じだ…お前ら人間が作り上げた大陸を、一日で滅ぼした『あの日』と同じだ…」
「…？」
「繰り返しはせぬ…一万年前の『終末の時』を…」
サタンアメンは、ドルシェに指を指す。閃光が、ほとばしる。華麗に避けるドルシェ。
「マックスターさんの額の傷…」
サタンアメンは、ドルシェの前に姿を現す。
「消えろ！エイシス！」
ドルシェは、ハワードの時の様に手に挟まれる。手のひらの間を雷光のような光が行き交う。ドルシェは、間一髪ジャンプをしてかわす。
「ハワードさんの傷…」
ドルシェは、着地しながらバズーカを撃つ。しかし、サタンアメンには効かない。
「その身のこなし…スピード…間違いない…お前はエイシスの生まれ変わりだな…」
「エイシス？知りませんわ」
ドルシェは、バズーカをもう一度撃ってみるが、全く効かない。
「…なるほど…エイシスよ…転生に失敗したのか…やはり、神は我々の時代を臨んでいるのだ…ククク…」
サタンアメンは、低い笑いをする。そして、再度、ドルシェとの間合いを詰める。

「イヤらしい男ですわ！」
ドルシェは斬魔刀を抜いて、一気に振り上げる。
「ぐぉっ…！」
サタンアメンの額が裂ける。初めて攻撃が届いた。ドルシェは、攻撃を緩めない。振り上げた刀を振り下ろす。額にXの傷が付く。そして、バズーカを取りだし、傷の中心に発射する。弾は、傷口に入り爆発する。
「――――！！」
ドルシェは、ハワードとマックスター二人掛かりの攻撃を、一人でやってのけた。顔が吹き飛んだサタンアメンは、床に仰向けで倒れる。
「これで終わるとは思っていませんわよ？」
ドルシェは、斬魔刀を構える。
「くっくっくっ…さすがだ…この私に傷を追わせるとはな…」
サタンアメンは、ゆっくり立ち上がる。額の傷がみるみる治って行く。
「…」
ドルシェはジャンプして、サタンアメンの後ろに付く。そして、斬魔刀を横一文字に振る。
「甘い…」
サタンアメンは、左腕で斬魔刀を受け止める。
「それは、どうかしら？」
ドルシェは、止められた斬魔刀を振り切ろうとする。次第に腕に食い込む斬魔刀。
「ほぉ…これならどうだ？」
サタンアメンの首が、人間では考えられない角度まで周り、ドルシェの方を向く。そして、口を大きく開く。口の中が赤く光り出す。
「柔らかい体ですわね。でも、レディに見せる顔じゃないですわ」
ドルシェは、怯む事なくバズーカ砲を、サタンアメンの口に突っ込む。

轟音一発。
「ぐはっ…！」
サタンアメンの首が爆発で吹き飛ぶ。斬魔刀も腕を切り落とす。
「あなたの攻撃に魔弾が反応したみたいですわね。自分の攻撃の威力は、如何かしら？」
ドルシェは、斬魔刀を逆手に持ち変えて、ジャンプする。
「これがマックスターさんの分ですわ！」
斬魔刀が、サタンアメンの心臓に突き刺さる。一瞬、サタンアメンの体が痙攣する。ドルシェは、少し離れて着地する。
「次は、ハワードさん！」
意識を集中させて目を閉じる。そして、目を見開く。ドルシェの瞳は、紅く染まっている。両手のひらを、サタンアメンに向けて重ね合わせ、小さな隙間を作る。そこから見えるのは、吹き飛んだ首の傷口だった。
「怒りの一撃ですわ！」
ドルシェの掛け声と共に、激しい稲妻が暴走する。稲妻は、サタンアメンに近付くに連れて、一本の稲妻へと変わる。稲妻は、容赦なくサタンアメンの首の傷口を捉えた。

暫くして、稲妻は消えた。そこには、黒焦げになって斬魔刀に突き刺さされた、サタンアメンの哀れな姿がある。ドルシェは、斬魔刀を引き抜く。
「これで、少しは気が晴れたかしら、お二方は？」
ドルシェは、二人の武器を元に戻す。そして、周りを見渡す。異空間は、まだ存在している。
「まだ、終わっていないようですわね…」
空間が崩れ始めるが、違う異空間が現れる。
「サタンアメン…結局、お前は、過去を繰り返しただけだったか」

地面から這い出てくる『人』。
「あなたが『クフ王』さんかしら？」
「いかにも。やっと、地上に復活する事が出来た。…サタンアメンよ。奢りが強すぎたな」
クフ王は、サタンアメンを冷ややかな目で見下ろす。その姿は、若い青年の姿をしているが、サタンアメンとは、明らかに違う異様な雰囲気を持っている。ドルシェは、それを見逃さない。
「あなたが、大将ですの？」
「ふむ。大将というのも悪くないな」
クフ王は、首の運動をする。
「あなたが大将なら、聞きたい事がありますわ。何故、人間だけでなく、動物まで死に導くのかしら？」
ドルシェは、クフ王を睨む。
「簡単な事だ。我々の祖先の血が流れている種族もいるからだ。」
「そんな理由だけで…？」
拳を強く握る。
「祖先の血を引く種族は、必ず我々の邪魔になる存在。今のうちに潰すのが良い。」
「何の罪も無い者の命を奪ってまで創る楽園に何の意味がある！！」
ドルシェは、怒りを抑えきれずに口調も変わる。
「我々は、異空間を作らなければ、地上で生きられない。これでは、浄化が出来ないではないか。だから、人間を恨む『時の女王』と契約を交したのだ。我々『人』の時間を返す代わりに、地上を根絶やしにする――とな」
「馬鹿げていますわ…」
「馬鹿げてなどいない。我々が何故、自らの肉体をミイラにしてまで、地上に物質を残したと思う？我々が何故、ピラミッド、地上絵、モアイ…様々な建造物を残したと思う？」
クフ王は、歩き始める。歩くだけで、威圧感が大きな衝撃となって空気を歪ませる。

「…地上の全てを異空間にする為…？」
「半分だけ正解だ。我々が封印された『奈落』には、祖先の代から息耐えた『人』が眠っている。そいつらの目印とでも行っておこう」
「冗談じゃないですわ！」
「更に、死んだ人間は冥界で裁かれ、地上にもう一度だけ戻るチャンスを貰える。それが、『人』になるという事だ」
「まだ、わからないのかしら？人口が増えれば、それだけ複雑な感情が芽生えて、同じ事を繰り返すだけですわ！」
クフ王は、念力らしき力で、サタンアメンを自分の元へと引き寄せる。
「確かに。だが、最初から感情を持たない生物ならば問題なかろう」
「まさか…人まで自分達の奴隷に…？」
「奴隷ではない。意思を持たぬ生物。エデンを浄化する為だけに存在する者達だ」
「悪魔にも劣る非道ですわ！！」
「お前には理解出来ない話であろう」
クフ王は、目を閉じて祈りを捧げる。すると、サタンアメンの体がボンヤリ光りながら、収縮して行く。
「精霊の儀式…！」
ドルシェは、目を丸くする。
「よく知っているではないか。せっかく倒したのに残念だったな」
サタンアメンが動き出す。その姿は、黄金に身を纏い、仮面の額には、力強いコブラの彫刻が施してある。
「随分、小さくなりましたわね」
五メートルの巨人から、ドルシェと同じ位の１６５ｃｍに変わったサタンアメンは、妙に小さく見える。
「先程は失礼した。制御が聞かなくて、醜い姿を披露してしまった」
「紳士になりましたわね。」
「エイシスよ。お前と戯れている時間は無くなった」
サタンアメンは、ドルシェの目の前に到達する。

「！？」
ドルシェは、その速さに驚くと同時に蹴りを腹に喰らって吹き飛ぶ。
「ぐっ…！！！」
壁に激突するドルシェ。
「私の本来の力だ」
サタンアメンは、またもやドルシェの前に現れる。そして、ドルシェの顔面をめがけて、正拳付きをする。ドルシェは、横に飛んで、辛うじて避ける。
「お前の敵は、一人ではないぞ？」
「――――！！」
ドルシェの視線の先には、クフ王が仁王立ちしている。そして、手をこちらに向けている。
「まずいですわ…」
ドルシェは、すぐに起き上がりバズーカ砲をぶっ放す。
「なっ！？」
弾の軌道の先に、サタンアメンが移動する。そして、弾を腕で弾く。壁で爆発する弾。サタンアメンは、そのままジャンプする。目の前に、クフ王の手から発射されたであろう黒い球体がドルシェに迫る。
「まずい…！」
ドルシェは、更に横に避ける。黒い球体は、壁にぽっかりと穴を開ける。
「遅い」
言葉の方を振り向く前にドルシェは、背中から衝撃を喰らい吹き飛ぶ。そして、床に叩き付けられた。
「レディに…二人がかりは…卑怯じゃありませんかしら…？」
ドルシェは、蹲りながらクフ王を睨む。
「これは、我々の聖戦だ。戦争に卑怯も道理も無い」
全く感情の無い瞳をドルシェに浴びせる。
「貴方達の考え方、今の人間がいるのも納得いきますわ」
ドルシェは、肋骨の辺りを押さえながら、何とか立ち上がる。

「骨が折れたか？人間は脆いな」
後ろからの声。ドルシェは、またもや、蹴りを喰らってしまい吹き飛ぶ。
（まずいですわ…このままでは…）
ドルシェは、意識を集中する。
「見物してろ、ドルシェ」
「え…？」
ドルシェの目の前には、マックスターとハワードが立っていた。
「異空間ってのは便利だな」
「ドルシェ。俺らも参加するぞ」
二人は、ドルシェに笑顔を向ける。
「どういう事…？」
ドルシェは、死んだはずの二人が目の前にいる事実が理解出来なかった。
「マックスター」
「ＯＫ。ゆっくり説明してていいぞ」
マックスターは、ドルシェの斬魔刀を引き抜く。
「久しぶりだな、斬魔刀。もう一暴れするぞ」
マックスターは、サタンアメン目指して走り出す。
「小さくなって、パワーアップか？」
マックスターは、サタンアメンに斬りかかる。そのスピードは、人間を遥かに越える速さだ。
「ぬぅ！？」
サタンアメンは、後ろに避ける。斬魔刀は、床を破壊する。
「何て速さなんですの！？」
ドルシェは、マックスターのスピードに驚く。
「あの世ってヤツか？そこで、ドルシェそっくりの女に出会ってな。異空間の中だけなら存在出来る方法があるって言うから、話に乗ってきたのさ」
ハワードは、ドルシェを起こしながら説明を始める。

「私にそっくり…？もしかして名前がエイシスかしら？」
「やっぱり知り合いだったのか？」
「知らないですわ。ただ、何回か聞いただけですの。それにしても、異空間で存在出来るって…？」
「『人』になるのさ」
「――！」
ドルシェは、ハワードの言葉に驚く。
「結構、辛かったぞ？何てったって、心が折れたら、奴らの仲間入りだったからな」
ハワードは、親指でクフ王を指差す。ドルシェは、クフ王が話していた内容を思い出す。
「そうだったのですね。ハワードさん、ありがとうですわ…私、休憩させて頂きますわ…」
ドルシェは、そのまま気を失う。
「緊張の糸が切れたか…女一人で、奴ら相手に頑張ったな。生きてるのがビックリだったぞ」
ハワードは、そっとドルシェを横たわらせる。そして、自分のバズーカ砲を手に取る。
「さぁて。レディに対する非礼のお返しをさせて貰うか」
ハワードも参戦する為に立ち上がる。

～本領発揮～

「さすが神殿。広いし豪華だなぁ」
ダガースは、神殿の中を歩きながら、周りを眺める。
「リトちゃんの匂いがしねぇな？」

ダガースは、鼻を利かせる。
「獣人。お前は異端の者の仲間か？」
突然、声がする。
「誰だ！？」
ダガースは、辺りを見渡す。声の主がいない。
「また異空間かよ…泣けてくるぜ…（＞＜。）。。」
「獣人。お前は異端の者の仲間か？」
「イタンノモノなんか知らん！そこにいるんだろ！？とりあえず、出て来い！」
ダガースは、口から炎を空中に向けて発射する。声の主が現れる。
カエサルだった。
「知らぬか…ならば、ここで死ねっ！」
カエサルは、火の玉を何発か投げつける。
「ぬぉっ！？」
ダガースは、慌てて避ける。
「こらっ！いきなりは卑怯だぞ！？ってか、お前らは、いきなりが多すぎだろ！？」
カエサルは、お構い無しに攻撃してくる。
「くそっ！…あいつ…何で怒ってんだ？」
カエサルの表情は、鬼の形相だった。
「カエサル！そこまでだ！」
突然の声が、カエサルの攻撃を止める。
「その声は…異端の者…！」
カエサルが睨む先には、マーズとハインズが立っている。
「マーズ！てめぇ、まだ、こんな所にいたのかよ！？」
ダガースは、罵声を浴びせる。
「わりぃわりぃ。ちょっと計算外な事があってな。とりあえず、カエサルを倒しておこうと思って、戻ってきたんだわ」
マーズは、苦笑いをする。
「たまたま、此処に出ただけだろう」

ハインズは、サラリと言う。
「ハインズてめぇ！あの状況から助けてやったのに、真実を話すんじゃねぇ！（汗）」
「なるほどな…焦って瞬間移動したら、ここに出たって事だな…」
ダガースは、しらけた顔で説明する。
「獣人。やはり異端の者の仲間だったか。」
カエサルが口を挟む。
「だから、イタンノモノなんて知らん！」
「カエサル…ダガースは、馬鹿犬だぜ？」
「……」
「何だよ何だよ！？俺の何処が馬鹿なんだよ！？」
「笑止！」
カエサルは、力を放出する。波動が風に乗って伝わってくる。
「どうやら、俺が目当てらしいな」
マーズは、前へ出る。
「リトちゃん、ハインズ。先に行っててくれ。俺は、こいつを倒してから行く」
「マーズ！私も残る！」
「リトちゃんの声！？何処にいるんだ！？」
どうやら、リトの姿はダガースにも見えていないようだ。
「俺以外、誰にも見えねぇぜ？何てったって、俺が作った異空間だからな。まぁ、それは良いとして、早く上に行くんだ」
「マーズも――」
「リトちゃん。リトちゃんは、やらなければならない事があるだろ？俺達を仲間だと思ってるならば、信じてくれ。仲間を最後の最後まで貫いてくれ。そして、時を止めてくるんだ」
「マーズ…死なないよね？」
「あたりめぇだろ？リトちゃんとエッチするまでは、死ねねぇ」
マーズは、ウィンクをする。
「セリフと仕草があってねぇ…」

ダガースは、呟く。
「マーズっ！」
リトは、マーズに抱きつく。そして、マーズと唇が重なり合った。
「リト…ちゃん…」
「ここから先は、全てが終わってから…ね？」
リトの顔は、不安に満ちている。
「お預けってヤツか？だが、その方が、生きる希望が沸くな…（＊^m^＊）　ムフッ」
ダガースは、ハインズの方へ寄る。
「ハインズ…今、リトちゃん…チューしたのか？」
「さぁな。俺にも見えん」
「絶対にしたんだぜ！？ずりぃ～っ…！（怒）」

ゴツン！

リトの鉄拳が、ダガースの頭のテッペンに落ちる。
「見えないの…ずるい…（泣）」
「マーズ。勝気はあるのか？」
ハインズは、和やかなムードを描き消す。
「勿論あるぜ？」
マーズは、自信満々に言う。
「そうか。ならば、私はリト様を神格界へ導く…必ず！」
「おう。とりあえず任せたぜ。早く行きな。マッチョのカエサルは、頭来てんぜ？」
マーズは、カエサルを見上げる。
「私が、簡単に行かせると思うのか？」
カエサルは、階段に火の玉を発射する。
「残念だが、簡単に行けるみたいだぜ？」
マーズは、両手を広げて風を巻き起こす。風は、火の玉を描き消す程の勢いを見せる。その間に、ハインズ達は、姿が見えなくなる。

「異端の者…！」
「俺と戦いたかったんだろ？あと、その呼び方やめてくんねぇかな」
マーズは、不適の笑みを溢す。
「先程は出し抜かれたが、今度は、そうはいかないぞ！」
カエサルは、地に降りる。地響きがする。
「やる事が派手だぜ」
マーズは、構える。
「行くぞ！異端の者！」
カエサルが突進してくる。
「その呼び方やめろっつうの！」
マーズは、床に手を付き、電磁波を発生させる。電磁波は、カエサルめがけて動き出す。そして、カエサルを捉える。
「ぬるいわぁ！」
カエサルは、電磁波を弾き返す。
「じゃぁ、お熱いのどうぞっ！」
マーズは、両手を重ね合わせて、大きな炎を作る。巨大な炎は、カエサルを完全に包み込む。
「ぬぅぅ…利かぬっ！」
またもや、マーズの攻撃を弾き返すカエサル。
「ありゃりゃ。熱いのも気に召さなかったみたいだな」
マーズは、溜め息を吐く。
「このカエサルの肉体は、例え神でも、傷付ける事は出来ん！」
「面白れぇ。傷付けたら、神以上って事だな」
マーズは、部屋に飾ってある剣を手に取る。
「血迷ったか？そんな剣では、傷処か、我の炎にも勝てんぞ？」
「能書きはいいから、早く来いよ？」
マーズは、中指を立てて、クイクイとゼスチャーする。
「…死ねっ！」
カエサルの手から炎の玉が発っせられた。マーズは、上段の構えをする。

「はっ！！！」
気合いと共に剣を振り下ろす。火の玉は、見事に斬り裂かれた。
「何！？」
カエサルは、その光景を見て驚嘆する。
「炎の攻撃が何だって？」
剣からは、水が滴り落ちている。
「水の精霊か…！」
「火には水だろ？水の切味は良いぜ」
マーズの剣は、水が流れている様に見える。
「更に面白い。このカエサルが、これ程の精霊使いと対峙する事になろうとは…」
カエサルから、込み上げてくる衝動が伝わってくる。
「うりゃっ！」
マーズは、剣を振るう。猛スピードで、水の柱が床を切り裂きながらカエサルに向かう。
「はっ！」
カエサルは、ジャンプして避ける。
「水を差す様で悪いが、俺は精霊使いじゃないぜ？」
マーズは、剣先を床に立てて言う。
「構わん。異端の者よ。この攻撃を受け止められるか？」
カエサルの剣が、炎を帯びていく。それは、炎の剣というよりも、炎のムチの様に自在に形を変えている。
「勝手に受け止めるとか決めんじゃねぇよ」
マーズは、ふくれっ面をする。
「味わうが良い！炎縛地獄を！」
カエサルの剣が伸びて、マーズに向かってくる。マーズは、後方に飛んで避ける。剣先は、床を溶かす。
「どんだけ熱いんだ！？」
マーズは、溶けた床を見ながら驚く。
「まだだ」

床を溶かした剣先が、マーズに向かって動き出す。
「なっ！？」
マーズは、辛うじて横に避ける。
「追跡センサー付きとは、豪勢なこった」
マーズは、剣に力を込める。すると、剣の水が激しく吹き出す。
「炎ＶＳ水の第２ラウンド開始！ってところだな」
炎の剣が、マーズに向かって来る。マーズは、剣を構える。そして、床に突き刺す。
「！？」
カエサルは、マーズの行動に目を見張る。床からほとばしる水柱は、マーズと炎の剣の間に壁となった。
「さぁ、おいで。炎ちゃん！」
マーズは、剣を構える。炎は、水柱に突き刺さった。水が蒸発する音が激しく聞こえる。
「馬鹿め…」
カエサルは、念を込める。炎の剣は、三つに分かれる。一方は、水柱を右に曲がり、マーズの左側に出る。もう一方は、左に曲がり、マーズの右側に出た。
「そう来たか」
マーズは、左右の剣先を交互に見る。炎の剣は、同時にマーズに襲いかかる。マーズは、後ろにバク転をする。水柱の勢いが弱くなる。三つの炎は、また一つになった。
「なかなか早い反応だな」
カエサルは、余裕の顔を見せる。
「お前程じゃないさ」
マーズは、突破口を探す。
（あの剣は厄介だぜ…）
マーズの目に一つの物がうつる。
（灰皿はフタをする事…）
「あったじゃ～ん…（ー＋ー）ニヤリ」

「何がおかしい？そろそろ、最初の苦しみを味わって貰うぞ」
「最初って何だよ！？ってか、拷問いくつも考えてるんじゃねぇ！！」
カエサルの剣が動き出す。スピードが、今までで一番早い。
「人間の話くらい聞けっつうのっ！」
マーズは、高くジャンプする。剣の動きが止まる。
「？」
マーズは、剣を見下ろしながら様子を伺う。
「うそっ！！やばっ！！！」
剣が、網状になって襲ってきた。
「最初の苦しみだ…」
マーズを炎の網が取り囲む。炎の網は、瞬間移動をする時間を与えない。
「くそ――あちっ！ぐわぁ――――――！！！」
マーズを包む炎の網。炎と煙で何も見えない。
「最初の苦しみとは、この世で味わう欲望の炎だ」
カエサルは、燃え行くマーズを見ながら呟く。
「次の苦しみは、後悔の炎」
カエサルは、更に炎を強くしていく。
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
マーズの叫び声が狂気を帯びる。
「苦しめ…異端の者よ。そして、この地上に生きた事を後悔するがよい。最後の炎は、憎悪の苦しみだ。お前を産んだ親を恨め。お前を生かした地上の生物を恨め。そして、こんな時代を作り上げた人間を恨み、人間を作った人を恨むが良い」
カエサルは、更に炎を作り出す。その炎は黒く、燃えているのかもわからない程であった。
「地獄の炎は、暗闇に潜む黒い炎。罪人は、知らぬ間に燃え尽きるのだ」
黒い炎は、カエサルの手を離れる。赤い炎と黒い炎が混ざり合う。

周りの空気をも吸い込み燃えていく。
「うぉぉぉぉぉっっっ！！！」
マーズは叫ぶ。
「まだ生きていたか。だが、もう終わりだ」
「それは、どうかな？」
「――――！？」
冷静なマーズの声がする。
「なかなかの演技だっただろ？」
カエサルは、炎を睨む。炎は、激しく燃えている。
「どういう事だ…？」
「こういう事さ」
炎の中からマーズが出て来る。
火傷一つ負っていない。
「馬鹿な！何故！？」
「馬鹿は、お前ら『人』だ。異空間ってのは、便利なんだぜ？」
カエサルは、マーズの周りを凝視する。
「まさか…異空間の中に異空間を作ったのか…！？」
マーズの体の周辺が光っている。
「まぁな。この空間は、普通の世界との接点を、光の速さで絶ってるだけだろ？ならば、異空間の中でも、同じ事は可能だろ。そして、通常の世界では、触れる事も触れさせる事も出来ない――」
マーズは、動揺しているカエサルに一気に近付く。
「おのれぇーっ！！」
カエサルは、慌てて炎の剣を動かす。
「おせぇよ」
マーズは、カエサルの前から退く。
「！？」
炎の剣が、燃え尽きる。
マーズは、再び、カエサルに近付く。マーズの剣が、カエサルの腕を切り落とす。

「おっと。神以上になっちまったけど良いのか？」
マーズは、剣を肩に掲げて余裕を見せる。
「何故、炎が消えた！？」
カエサルは、ただの剣先をマーズに向ける。
「いちいち説明するの面倒くせぇなぁ…」
マーズは、露骨に嫌がる顔をする。カエサルは、斬りかかってくる。
マーズは、剣で受け流す。
「炎が無くなったら、余裕が消えたんじゃねぇか？」
マーズは、カエサルの表情を見逃さない。
「殺す！殺す！」
カエサルの目が血走っている。マーズは、冷静に力を溜める。
「そろそろ終わりにしようぜ？」
マーズの剣が、水から光輝く色に変わる。

「その色は…！？」
カエサルは、透き通り光る剣を見て動きが止まる。
「なかなかの輝きだろ？」
マーズは、剣を振るう。光の破片が飛び散る。
「何故…何故だ！何故、神の剣をお前がっ！」
カエサルは、取り乱す。マーズの剣に、覚えがあるらしい。
「神が頂点を極めた時に、天使が希望を託して、光を集めて作った剣だったっけ？」
マーズは、一歩づつ近付く。カエサルは、同じ距離を保ちながら後退る。
「ありえん…我々が、存在すら確認出来なかった神具が…」
「とりあえず、時間ねぇから終わりにするぜ？」
マーズは、カエサルの懐に飛込む。一文字斬りが炸裂する。突差に剣で防御するが、マーズの剣は、カエサルの剣をあっさりと斬る。
カエサルの胸には、一文字の傷が付く。傷口と剣を交互に見る。
「私が…私が負けるのか…！？」

霧の様に消滅して行くカエサル。マーズは、その姿を見つめながら言う。
「俺の相手に、お前じゃ役不足だったな」
カエサルは、マーズを睨みながら、霧と化して消滅した。
「ふぅ。ヤバかったぜ…（ー．ー；）」

〜太陽の意思〜

「リトちゃん、兄ちゃんは見付かったのか？」
ダガースは、見えないリトに聞く。
「…」
「…」
リトもハインズも沈黙になる。
「あれ…？」
「ダガース。やめとけ」
ハインズが悟らせる。
「どうやら、兄は時の女王に、捕まっているみたいなの」
「リト様っ！？」
「いいの、ハインズ。私、仲間を信じたいから話す」
「リト様…」
「さすが、リトちゃん！じゃ、一つ聞いておくかな。兄ちゃんは、術者なんだろ？」
ダガースは、リトが見えなくてキョロキョロしながら言う。
「えぇ。炎を扱う術者よ」
「だよなぁ？この宮殿に入ってから、術者の雰囲気とか匂いがして来ねぇんだよな」

ダガースは、またもやキョロキョロする。
「それって…来てないって事？」
「そんなはずはない！私は、この目で見た！」
ハインズは、自分が見た映像を思い出す。
「異空間に閉じ込められてるから、匂いがしないとかじゃないの？」
「最初からなら、有り得る話だけど…それにしても、リトちゃん見えないと話にくいなぁ…」
ダガースは、キョロキョロしながら、リトを探す。
「私が、異空間に入り込まない様にしてあるみたい。しばらく辛抱してね」
「アイツは、もうちょい気を利かせて行動すりゃいいのに…」
ダガースは、愚痴を溢す。
「あっさり上まで来れたわね」
二人と一匹の前に現れたのは、ダガースに消されたはずのクレオパトラだった。
「爪女！」
ダガースは、伸びる爪を思い出す。
「失礼な獣人だね。私の名前は、クレオパトラ。世界で1番美しく権力のある女よ」
「クレオパトラ！？」
リトは、驚きを隠せない。
「傲慢なだけじゃねぇか…。しかも、世界って何処だよ…余計に萎えるぜ…」（ー０ー；）「」
ダガースは、余程、女と戦うのが嫌らしい。
「リト様。ダガースと先に行って下さい。私は、アレを倒してから参ります」
ハインズが弓をひく。
「ハインズ…」
「リトちゃん、行こう。ここは、ハインズに任せようぜ」
ダガースは、リトに決断を促す。

「わかったわ。ハインズ、上で待ってるから」
リトは、前へ歩き出す。
「リト様！」
「…？」
「上で何が起きようとも、リト様の神を…友を信じて下さい！」
「――！…わかったわ」
「なかなか良い事を言うじゃねぇか…」
ダガースは、横目でハインズを見る。
「女がいるみたいだけど、見えないねぇ。どんな手を使ったか知らないけど、この攻撃は避けきれないわよ？」
クレオパトラは、指を前に出す。何本かの爪が伸びて、更に放射状に拡がり、ダガースの辺りに襲いかかる。

「パシュ！」

ハインズの弓が、正確にクレオパトラの爪を襲撃する。
「キィ――――！！！！またしても、私の爪がぁぁ！！許さない…許さないわぁぁ！！！！！」
「大事な爪なら、攻撃に使うべきでないな」
「俺と同じ事を言ってやがる…」
しらけるダガース。
「ダガース！今のうちに行くんだ！」
ハインズは、次の弓を準備しながら、ダガースに叫ぶ。
「そうはいかないよ！」
クレオパトラがダガースの方へ移動しようとする。
「クレオパトラ。この世に、未練を残すのは止めておけ」
ハインズは、クレオパトラに向けて矢を射る。クレオパトラの動きが止まる。
「くっ…思い出したわ。お前は、あのハインズだね？って事は、奈落の女神も来てるって事かしら？」

「エイシスの事か？知らんな」
「ふんっ…嘘付きだね。まぁいいわ。私達『人』の祖先の中で最も許せない『人』。まずは、お前から死になさい」
爪が複数で飛んでくる。ハインズは、見事なスピードで、全ての爪を破壊する。
「全部の爪を破壊してくれたね…フフフ…フフフ…」
クレオパトラは、指を眺めて笑い出す。
「今度は、血迷ったか？」
ハインズは、弓を構える。
「その逆よ」
クレオパトラが一気に動き始める。ハインズは、怯まずに弓を放つ。華麗にかわすクレオパトラ。
「私の武器が、爪だけだと思うのかい？」
クレオパトラは、余裕の笑みを見せながら、雷を呼び起こす。
「なにっ！？」
雷は、神殿の天井を突き破ってハインズに襲いかかる。間一髪で避けるハインズ。
「驚いた？威力も変える事が出来るのよ。次は外さないわよ？」
「…」
「雷の餌食になりなさい！」
クレオパトラは、手のひらをハインズに向ける。
「攻撃をすれば、お前が消えるぞ？」
ハインズは、弓をひく。
「負け惜しみかい？雷は、光の早さを持っているのよ？弓をひいた状態で、避けられるかしら？」
クレオパトラの周りに、黒いモヤがかかり始める。そのモヤの中で、雷が発生して低い音を轟かせ始める。
「まずは、雷の爪跡よ」
「！？」
ハインズの腕に、無数の焼け跡と傷が付く。

「見えないでしょ？あんたが、私の爪を破壊したから、見えなくなったのよ」
（どういう事だ？）
ハインズは、周りに気を集中する。
「次、行くわよ」
クレオパトラの言葉と同時に、切り傷が増えて行く。
「くそ…」
ハインズは場所を移動するが、切り刻まれていく。
「雷の爪跡からは、逃れられないわ。さぁ死になさい！」
黒い霧が、更に拡がる。すると、ハインズの傷が増えていく。しかし、ある事に気が付いた。
（そういう事か…！）
ハインズは、矢を何本か床に突き刺す。
「何の真似だい？」

「クレオパトラ。その位にしておけ。タイムオーバーだ」
ハインズは、逃げるのを止めて弓を掲げて、クレオパトラを狙う。
「――？ハッタリは、通用しないわよ？」
クレオパトラは、ハインズの行動に一瞬とまどうが、攻撃を続ける。
「どういう事！？」
クレオパトラの攻撃が、全てハインズの手前――いや、床に刺した弓の所で止まる。
「見えない攻撃の媒体は、飛び散った爪。そして、散らばった範囲を計算すれば、後は、避雷針の役割を立てれば良いだけの事」
「おのれ…おのれ…」
「今度は、太陽の意思から受け継いだ力を見せよう」
「おだまり！そういう事は、この攻撃を止めてからいいな！」
クレオパトラの周りの黒いモヤが、形を変えていく。
「お前にこの技を使う事になるとはね」
モヤが成した形は、人の様な形をしている。

「悪魔との盟約を交したか…」
ハインズは、影を睨む。
「時の女王を利用して、この世を無に帰して、我々が奪う算段よ」
「なるほど…だが、時の女王が、お前らに殺られるとは思えないが？」
「私達は、勝てるわ。クフ王のピラミッドを忘れたのかしら？」
「ピラミッド…？」
「そうよ。あのピラミッドこそが、時の女王…いえ、神々を地に封じ込める為の装置よ」
「聞いた事はある。しかし、あのピラミッドは失敗策になったはずだが」
「足りない物があっただけよ。そして、それは成就したわ」
「霊魂の数か――」
「そうよ。しかも、純粋な人の魂よ」
「お前達が求める理想は、何処にある？」
ハインズの弓が紅く染まり、炎を帯びる。そして、矢はその熱さ故に蒸気を発する。
「理想？元々、地上は私達の物なのよ。私達の所に戻る事が、一番の理想よ」
クレオパトラの影の瞳が光り出す。
「やはり、お前達は何も理解していないようだな。お前達の理想は、今終わりを告げる」
ハインズの矢が、蒸発して消える。
「ははははっ！矢が熱さに耐えきれないとは情けないね！終わりを告げるのは、お前だよ！」
クレオパトラのモヤの影が、雄叫びを上げる。雨の様に降り注ぐ雷。
「ぐっ…！」
まともに雷を何発も受けるハインズ。しかし、弓を引く体制は崩さない。
「ほぉら！早く避けないと丸焼けだよ！まぁ避けられないだろうけ

どね！」
いつの間にか、影がハインズの足首を掴んでいる。
「太陽の意思とは、全ての平等を願う意思！太陽の意思とは、己を燃えさせる事で存在を示す意思！」
蒸発した矢が、姿を現す。それは、先程の矢とは全く別物と化していた。矢の先は、太陽の様に爆発しながら燃えている。
「そして…太陽の意思とは、悪しき者を退ける神の意思！」
矢を放つハインズ。放たれた矢の衝撃で、足首を掴む影が消え去る。
「な…なんなの！？」
クレオパトラは後退る。雷が一瞬にして消え去る。
「雷曇が太陽に勝てるとでも思っていたのか？」
太陽の矢は、一気に影を貫き、掻き消す。そして、クレオパトラの腹に直撃する。
「そんなぁぁぁぁぁ！！！！」
断末魔の叫びを上げながら、消えて行くクレオパトラ。
「太陽の神の元で、懺悔するがよい」
ハインズの弓が正常に戻って行くと同時に、静けさが戻る。

人の敗北

「さぁて、さっきのお礼をさせて貰うぜ？」
マックスターが、斬魔刀を振り回す。
「さっきの分だけじゃ済まさねぇ。借金作らせてやる」
ハワードもランチャー砲を掲げる。
「哀れな奴らだ…」
サタンアメンは、首の辺りで親指を右から左へ流す。

「サタンアメン。私は、行くぞ」
「クフ王、わかりました。下等生物は、私が始末致します」
「逃げる気か！？」
ハワードは、ランチャー砲を発射する。しかし、クフ王は姿を消し、弾は壁で爆発する。
「ちっ…！」
ハワードは、サタンアメンに向けて、立て続けにランチャー砲を発射する。
「無駄な事を…」
サタンアメンは、弾を腕で弾く。
「甘いぜ？」
ハワードが放った弾は、弾道を変えてサタンアメンに向かう。
「ぬ！？」
サタンアメンは、不意打ちとなった弾を避けきれずに、もろに右肩に直撃する。右肩がえぐれる。
「『人』が放つランチャーの感触はどうだ？」
ハワードは、次の砲撃をしようとする。
「『人』だと…？何処までも下等な生物が…調子に乗るなぁぁ！！」
サタンアメンの雄叫びが、宮殿を揺るがす。すると、肩の筋肉が盛り上がり、傷が消えていく。
「すごい再生能力だな」
マックスターは、サタンアメンを観察する様に眺める。
「お？本気モードか？」
「そうでなくちゃ、戻って来た意味がない」
マックスターは、斬魔刀を振りかざして突進する。
サタンアメンの額のコブラが動き出す。
「気持ち悪い蛇だな！」
マックスターは、サタンアメンの額めがけて、横一文字斬りをかます。サタンアメンのコブラは、口で斬魔刀を受け止める。
「残念だったな。お前達の攻撃は通用しない」

「それはどうかな？ハワード！」
「了解。地獄のランチャー砲行くぜ！」
ハワードは、ランチャー砲を発射する。
「はっ！」
サタンアメンは、気合いで砲弾を吹き飛ばす。
「隙ありっ！」
気合いを抜いた瞬間を狙って、コブラを切り落とす。
「ぬっ――！？」
不意打ちに驚きを隠せないサタンアメン。
「お前らって、ホントに自信過剰だよな」
マックスターは、刀を床に立てながら言う。
「まだまだ、倍返しにも達してないぜ？」
ハワードは、ランチャーを構え直す。
「許せん…ここからは、本気で行く…」
サタンアメンが、目を見開いた瞬間に、ハワードの前に到達する。
「甘い！」
背中から、マックスターが斬魔刀を振るう。サタンアメンは、読んでいたかの様に、避けながらマックスターに、何かを投げつける。
「？」
マックスターの服には、紫の果物の果肉の様な物が、ぶつかり破裂する。
「ただの果実ではない。死の果実だ。永遠の果実の糧となれ！」
果実は、一気に服を腐らせて皮膚に到達する。
「くそっ！」
マックスターの体内に果実は、入っていく。
「マックスター！一気にケリ付けるぞ！」
「そのようだな！斬魔刀の奥義を見せてやるぜ！」
「それも叶わぬわ！」
サタンアメンは、呪文を唱える。すると、マックスターの体内に入った果実から、いばらの様な物質が生えてくる。

「ぐわぁぁぁ！！」
傷口からの激痛に叫び声をあげる。
「ちっ！」
ハワードは、ランチャー砲を撃つ。サタンアメンは、腕を振って弾くと同時に、果実を投げつける。
「あぶねっ！」
ハワードは、反射的に避ける。
「まだだ」
サタンアメンが、呪文を唱え始める。
「何、よそ見してんだ？」
マックスターは、いつの間にか、サタンアメンの背後を取る。いばらは、体の自由を奪っていく。しかし、そのいばらをひきちぎる。
血が吹き飛ぶ。
「ぐっ…妖魔退散！」
斬魔刀が紫に光り出す。
「破魔滅殺！」
ハワードもランチャーを放つ。砲弾が白く光り、帯を残像として残す。
「お前らの攻撃は、お見通しだぁ！」
サタンアメンの黄金のマスクが閃光を放つ。不意を突かれた二人は、思わず目を閉じる。
「な…？？」
目を開けたハワードは、目の前にいるマックスターに驚く。
「空間を縮めた…のか」
そこには、斬魔刀が肩から食い込んだハワードと、ランチャーの砲弾を腹に喰らって穴が空いているマックスターが対峙していた。
「死に行く下等生物に語る必要はあるまい…」
黄金のマスクが光り出す。
「くそ…俺らじゃ勝てねぇのか…」
マックスターは、薄れてゆく自分の体に力を込める。

「消えろ…」
先程の閃光が辺り一面に、ほとばしる。
「余計な時間を食ったな…」
サタンアメンが、消えた二人を確認して去ろうとした瞬間――
「まだですわ」
寝ていたドルシェが立ちはだかる。
「下等生物、死に急ぐか…」
サタンアメンは、ドルシェをさげすむ様に睨む。
「この世に生きる者達に下等も上等もありませんわ。あるとすれば、あなたの様に心を持たない者こそが、下等生物ですわ」
「人間ごときが何を抜かす…もう良い…お前も消えるのみだ…」
「いいえ。消えるのは、あなたですわ」
ドルシェは、意識を集中する。
「…？」
「待たせたな。始めるか？」
ドルシェが、エイシスに変わる。
「お前はエイシス！？何故、此処に！？」
「お前ごときに説明する必要はない」
「面白い…奈落の女神…勝負だぁ！」
サタンアメンの黄金が光る。次の瞬間に、その閃光がかき消される。
「ぬぅ」
エイシスの剣は、光すら切り裂く。
「サタンアメン。悪いが、私は、お前に構っていられる程の暇じゃない。すぐに終わらせる」
エイシスは、剣を構え直してサタンアメンを鋭い視線で突き刺す。
「我々は、お前から受けた屈辱を忘れた事はない。悪魔よりも神に恨みを持つ堕天使を手に入れた我々が、負けるはずがない！」
サタンアメンは、呪文を唱える。
「神の…匂い…」
「神の…光…許さん…」

エイシスの周りには、数百の異形の者が現れる。エイシスは、それらをぐるりと見渡す。
「こいつらは、堕天使の中でも、オシリスにすら裁かれなかった堕天使…すなわち、肉体を持つ天使だ…」
「説明はいらない」
エイシスは、剣を天に向けて瞳を閉じる。
「お前の得意の『光』と『闇』も通用しないぞ…行け！異形の者達よ！」
サタンアメンの掛け声と共に、異形の者達が動き始める。
「行き先が見えぬ者達に告げる！我は太陽より舞い降りし『人』だ！お前達を冥界の連鎖に導く事も出来る！それでも、太陽の意思を汚す事を望むなら滅びる為に戦え！私は前へ進むのみ！」
エイシスの剣が、金色に光り出す。
「ギャ――――――！！！！！！」
異形の者達が、エイシスをめがけて、一斉に襲いかかる。
「哀れなり…欲望の者達…！」
エイシスは、金色に輝く剣を振りかざす。金色の光は、放射状に拡がり、流れ出る様に金色の水平線を作りあげる。金色の光に包まれた異形の者達は、叫び声をあげる間もなく、一瞬にして消滅していく。
「これが噂の黄金の太刀――」
サタンアメンは、超破壊能力を持つエイシスの攻撃を間の当たりにして呟く。
「サタンアメン。死すらぬるい存在のお前に、本当の光の太刀を見せてやろう」
エイシスは剣を構え、一気に間を詰める。
「――！！！」
サタンアメンは、余りの速さに声すら出ない。
「これが、光りの太刀だ」
エイシスの剣が、激しく光り出す。振り切られた剣から、光が閃光

の刃の様に飛び出す。
「ケタ違い…」
サタンアメンの額から、まっすぐに切傷が出来る。傷口から漏れる光。
「次に会う時は、必ず…」
「安心しろ。次は無い」
エイシスは、更に背中から、両刃の槍を取り出す。
「この槍こそが、人が作りし『神の槍』だ」
槍の刃が、それぞれ金色と黒色に光る。
「何故だ！？何故、神は、我々ではない人を選ぶ！！」
サタンアメンの顔は、憎しみに満ちている。
「神が選んだのではない。お前らが、自ら神に背を向けただけだ」
エイシスは、槍を軽く回す。
「終わりだ。サタンアメン。神の槍により、存在を消滅させるがよい」
エイシスの槍の刃が光り出す。
「私が負ける…？過去と同じ繰り返しとは…」
「人間は、確かに愚かだ。だが、我々『人』と違って、『優しさ』を持ち合わせている。この感情があれば、変わる事も出来るかもしれない」
「無駄だ。所詮、人間は自分達が一番可愛いのだ。」
「残念だが…過去にしがみつく『人』にエデンは、耳を貸さない」
エイシスは、槍をサタンアメンの胸に突き刺す。
「クフ王が…必ず…必ず、時の女王を解放…」
サタンアメンは、霧の様に消えていく。最期までエイシスを睨んで。
「まずは、一人…。ドルシェ。もう暫く、体を借りるぞ」
エイシスは、光の残像を残して消える。

～終末の刻み～

「大統領！核の運搬は、全部完了しました！市民のシェルター移動も完了です！」
指令室の全員が、喜びで沸き上がりどよめく。
「喜ぶのは、まだだ。これより我々もシェルターに移動する。時間が無い。急げ！」
ゼビーは、指令室からの撤退を命令してドアの方へ向かう。
「大統領！どちらへ？」
側近は、大統領の行動に気が付く。
「執務室に戻るだけだ。ギルバート、君は私の側近としての役目は終わった。ここからは、自分の護衛と皆の安全を最優先にしろ」
側近の顔色が変わる。
「まさか…大統領は、残るおつもりですか…？」
「まだ戻らぬ仲間を待たねばならぬ」
「しかし！時間がありません！」
側近は、声を大にして叫ぶ。周りの兵士達が、どよめく。
「勘違いするな。私は生きる為に仲間を待つのだ。仲間との約束を果たせなければ、国を市民を向かせる事など出来ない」
「しかし…」
「生きて大統領を続ける為に仲間を待つ。これで充分じゃないか？」
ゼビーは、側近の肩を軽く叩く。ゼビーは、側近が涙を堪えて震えているのがわかった。
「さぁ、避難を開始だ！」
大統領は、最後の指令を出して執務室に戻る。
人間が予測する終末まで、あと五分…

第五部

～新しい時代の為に～

「クレス！」
執務室には、気を失ってユニコーンに介抱されているクレスがいた。
ゼビーは、予想外の来客に焦って駆け寄る。
「クレス！しっかりするんだ！」
ゼビーは、クレスの頬を数回叩く。
「う…大統領…？」
クレスは、まだ意識がもうろうとしているらしく、状況が読めていない。
「何があった！？」
「はっ…ドルシェ！」
クレスは、あの時の状況を思い出す。
「ユニコーン！ドルシェはどうした！？」
「がるぅ～」
ユニコーンは、困った顔をする。
「クレス。落ち着くんだ。ドルシェに何かあったのか？」
ゼビーは、クレスの動揺を抑えながら、事態の把握に努めようとする。
「…大統領すみません…ユニコーンにも悪い事をした」
クレスは、冷静さを取り戻す。
「クレス、核は運び終えて、シェルター移動も完成だ。後は、お前の仲間を待つだけだ。ドルシェは無事なのか？」
「目標達成に至るところが、さすが大統領です。ドルシェは、大丈夫だと信じます」

「目標は、まだ達成していない。新しい時代に全ての人間が生き残る事が最終目標だ」
ゼビーの言葉を聞いて、クレスの表情が曇る。
「ならば、大統領…あなたも避難をしてください」
「…私が行く時は、お前達全員が帰ってきた時だ」
ゼビーは、決意を語る。
「なりません。正直、我々の部隊は、既に生き残れる確率は低いです。大統領に何かあったら新しい時代を誰が引っ張るのですか？」
「その時は、新しい時代が、私を望まなかっただけの事だ」
ゼビーの決意は固い。
「ならば――」
クレスは、素早くゼビーの後ろに回りこみ、後頭部を殴打する。崩れ込むゼビー。
「お許し下さい。大統領…」
クレスは、ゼビーを抱えて椅子に座らせる。そして、電話をかける。
「すぐに執務室に来てくれ」
クレスは、ゼビーの迎えを要請する。
「ユニコーン、行き先は、西…いや、『時の神殿』だ。さぁ、行くぞ」
「ガルっ」
クレスは、ユニコーンにまたがる。
ユニコーンは、一瞬にして部屋をあとにする。
終末を生きる者達が、時の神殿――時の女王のもとへと集う…

～クフ王～

「クフよ…四大王は瓦解か…」
「私一人で充分だ。だが、エイシスが厄介だな」
「エイシス…懐かしい名前…」
「エイシスが此処に辿り着く前に、ピラミッドを解放する。時の女王よ、時間の解放を急いでくれ」
「…まだ、終末の弾劾が始まっていない…」
「直に始まる。今は、人間が穴を塞いだせいで、進行が緩やかになっただけだ」
「まだわからぬか…人間が穴を塞いだのは偶然ではない…まずは、指令を出している人間を片付けなければ、終末の計画は終わる…」
「指令を出す人間…？わからぬ…」
「私の目には映る…クレスという者が命令を出している人間…」
「今は何処に？」
「西の宮殿に向かうであろう…」
「また西か…」
クフは、西の方角を見つめる。
「人間め…我々の邪魔ばかりしおって…許さん…！」
クフの顔は、怒りに満ちている。
「エイシスが来る…そして、太陽の意思も…」
「太陽の意思…だと？」
クフの表情が怒りから曇る。
「そう…しかし、太陽の意思は、太陽の力が無ければ、意味を成なさない…西よりも太陽の力を探す方が先…」
「くっくっくっ…人間とは、何処までも低脳な連中だな…ハッハッハッ――！！」
クフは、気が狂った様に笑う。
「良かろう。まとめて葬り去ってやるっ！」
クフは、天井を突き破って外に飛び出す。
「太陽の力…何処だ？」
クフは、下界を眺めながらヤーヴェを探す。

「見つけた…」
クフは、急降下する。地上から見える、その姿は、まるで水星の様であった。
「さぁ、今、出してやるぞ？」
クフの姿が、空中で見えなくなる。
一秒もしない間にクフが現れる。腕には、リトの兄、ヤーヴェが抱えられている。ヤーヴェは、意識が無いらしくうなだれていた。
「太陽の力よ…まずは、お前から消えて貰おう」
クフは、地上に降り立つとヤーヴェを地面に放り投げる。
「時間の狭間に捕まるとは、運が良いのか悪いのか…どちらにしても終りだがな」
クフが気を溜め始める。
「ガルぅ～♪」
そこに現れたのは、クレスを乗せたユニコーンだった。クフの気が散る。
「邪魔だ」
クフは全く動かないが、突然、突風が巻き起こる。
「気を付けろ！ヤツは精霊も操れるみたいだ！」
「ガルッ」
ユニコーンは、クフの後ろに付く。
「ほぉ。だが、遅い」
クフの回し蹴りが、ユニコーンの顔を霞める。クレスは、一瞬のホツレの時間を狙って、ランチャーを発射する。
「甘い」
クフは、超至近弾のランチャー砲の弾を腕で弾く。
「ガルガルッ」
しかし、ユニコーンの蹴りの一撃が炸裂する。顔面に見事に蹴りが入るが、クフは顔色を一つも変えない。
「なかなかの連携だな…何者だ？」

「終末などさせん！」
クレスは、ランチャーを放つ。しかし、簡単に弾かれる。
「終末を知る人間…お前がクレスだな？やはり、神は我等を臨んでいる」
クレス達の目の前で、クフが二人になる。
「分身！？」
「ガルッ！？」
クレス達は、驚きを隠せない。
「私の邪魔をした罪は重いぞ…」
二人のクフが、同時に襲いかかる。
「ガルッ（。д。；；）」
間一髪のところで、ユニコーンは、素早く上へ逃げる。
「ユニコーン！あいつの本体がどっちか分からないか！？」
クレスは、ユニコーンにしがみつきながら叫ぶ。
「ガルぅ～（＜＿＞）」
頼りない返事のユニコーン。
「こりゃ参ったぞ…」
「まだだ…」
クフは、更に分裂する。
「さぁ？囲まれたぞ？」
周りには、クフの分身が何百人いや、何千人といる。
「いつの間に！？」
尋常じゃない増殖の早さにクレスとユニコーンは固まる。
「一斉攻撃だ」
分身のクフから閃光弾が発射される。
「これまでか…！」
クレスが覚悟を決めた瞬間――
クレス達の周りに、真っ赤な火柱が上がる。炎は、無数の閃光弾を燃やし尽す。
「――――！？」

クフは、突然の障壁の出現に目を見張る。
「まさか…！」
クフは、炎の元を見る。すると、そこには炎を携えたヤーヴェが立っていた。
「時間の狭間に埋もれたのは不運だが、お前が殺す為に脱出させてくれたのは、運が良かった。神は我等を見捨てていない」
「おのれ…太陽の力…！」

クフは、ヤーヴェを睨む。ヤーヴェは、そんなクフに指を差す。
「歴代の『人』の歴史の中で、最も神に近いと言われた王――クフよ。終末は『人』の為に用意された舞台だという事を教えよう」
ヤーヴェの周りの炎は、形を変えて竜に変化する。
「火竜か…面白い！」
クフは、動揺するよりも楽しんでいる。
「喰らえ！太陽の力を！」
火竜が、勢い良く飛び起つ。次々とクフの分身を飲み込む。
「その程度の破壊力では、私は倒せん！」
クフは、呪文を唱える。真っ黒な雨雲が空を覆う。
「空は我々の支配下にあるのを忘れたか！」
クフの腕の一振りで、大雨が降り出す。
「雨ごときで、太陽の炎は消せない！」
ヤーヴェは、更にもう一匹の火竜を放つ。二匹の火竜は、互いに渦を巻きながら昇天していく。やがて、曇を突き抜ける。
「そう来たか」
クフは、空を睨む。空が紅く染まり、雲が蒸発して散り散りになり、消えて行く。その時――
「何――？」
地面が揺れ始める。ヤーヴェは、足をとられて体勢を崩す。揺れは次第に大きくなり、大地震へと変わった。
「ハッハッハッ！終末の始まりだ！！太陽の力もこれまでだな！」

クフは、更に呪文を唱える。地震に因る地割れから、魂の様な物質が、多数、溢れ出す。
「過去に虐げられた『人間』の魂だ！そいつらは『人』を夢見て歩き疲れた、人間すら忘れた魂！」
魂は、ヤーヴェに襲いかかる。ヤーヴェは避けるが、確実に魂に切傷をつけられていく。
（揺れで足場が悪い…！）
揺れは、まだ強くなる。
「これだけで終わると思うな」
クフは、再度、雨雲を集める。
「くそっ！」
ヤーヴェは、炎に身を包む。
「私は負ける訳にはいかない！」
炎の塊となったヤーヴェが、一気に残りのクフの集団に突っ込んでいく。しかし、足場が悪く、集中しきれなかった為に炎に力がない。
「足場の悪さに集中しきれていない様だな」
クフは、ニヤニヤいやらしい笑みを浮かべる。
「リトの兄ちゃん！一旦、降りろ！」
不意に声がする。そこには、マーズがいた。
「お前は…？」
ヤーヴェは、リトを知る男の登場に驚く。
「変な感じがしたから来てみたが、正解だったぜ。とりあえず、話は、コピーを倒してからだ！」
マーズは、揺れる地面にてのひらを添える。
「はぁぁぁぁぁっ！！」
低いうめき声の様な声帯が大きくなるに連れて、激しい揺れが収まり始める。
「二分だ！リトの兄ちゃん！二分で片付けろ！」
マーズは、電気の流れを使って揺れを一時的に止めたのだ。
「恩にきる！」

ヤーヴェは、地上に降り立ち、再度、集中する。先程とは、雲泥の差の炎がヤーヴェを包む。
「俺の力よ！持ち堪えろ…リトの兄ちゃん…頼むぜ…！」
マーズは、極限まで集中を高める。
「何者だ？」
クフは、終末の始まりを抑え込むマーズに注目する。
「よそ見は、命取りになるぞ？」
「ぬっ！？」
クフの目の前に、業火を携えたヤーヴェが到達する。ヤーヴェは、そのままクフに突っ込む。
「ぐはっ！！！」
クフは、炎に撒かれながら、地上に落下していく。分身は、薄れ消えていく。
「桁違いだ…」
戦闘の光景を眺めていたクレスは呟く。
「やったか？」
マーズは、堕ちていくクフを眺めながら倒れ込む。
「クフ…」
ヤーヴェは、堕ちていくクフを追い掛け始めた。
（あっさり終わり過ぎだ…）
地震が、また始まる。
「むっ！？いかん！ユニコーン！マーズを助けるぞ！」
至る所で、地割れが始まる。倒れたマーズの付近も、同様に亀裂が生じる。間一髪で、マーズを拾いあげる。
「マーズ！しっかりし…寝てるだけか」
体力と精神力を使いきったマーズは、仮眠モードのようだ。
「許せん…許さん…許さんぞぉーっ！！！！！」
炎の中で、クフの怒りが頂点に達する。まとわりつく炎は、一瞬にして消えて、体勢を立て直す。
「やはり…！」

ヤーヴェは、すかさずに炎を投げつける。しかし、握り潰される。
「下等な生物ども！消えろっ！！！」
クフの体から、無数の光の矢が凄まじい勢いで乱射される。
「ガルっ（。д。；；）」
ユニコーンは、光の矢が届かない所に避難する。ヤーヴェは、華麗に避けながら、崩れる大地に着地する。
「太陽の力よ！我の一撃を喰らうがいい！」
クフは、杖を背中から取り出す。そして、呪文を唱える。
「あの呪文は――！」
ヤーヴェは、炎の壁を作り上げる。
「そんなもので、防げると思うかぁーっ！」
杖から放たれる稲妻の様な閃光は、炎を蹴散らしてヤーヴェを呑み込む。
「おぉぉ――――っ！！」
ヤーヴェの体が、段々と溶けていく。
「十字を掲げた三千人の人間を消滅させた『神の一撃』だぁ！」
クフは、更に閃光を強める。
「負けん！私は負けない！」
ヤーヴェは、炎を必死に作り出す。しかし、炎は、すぐに掻き消される。
「隙は作らん！」
クフは、左手を空に掲げる。雨雲は、真っ黒な雲に変わり、稲妻を引き起こす。
「天の怒り！」
稲妻は、一点に集約されて、一気にヤーヴェの元へ落ちる。
「ぐふっ…！」
ヤーヴェは、閃光と稲妻の二重攻撃に消滅する。
「な…なんて事だ…！」
クレスは、目の前で起きてる出来事に息を飲む。
「まだだ。魂ごと消し去る！」

クフは、更に呪文を唱える。すると、闇の球体が現れる。
「魂をも呑み込む暗黒の入り口だ…！」
クフは、闇の球体を放つ。球体は、自ら放出した稲妻と閃光を飲み込みながら、地上に激突する。いや、地上すら飲み込みながら落下していく。
「まるで、ブラックホールだ…」
「ガルぅ…」
「ぐがぁーっ…スピィー…」
「…」
大きな穴の空いた地上を優雅に見つめるクフ。
「次はお前達だ」
クフは、クレス達を睨みあげる。

「術者を倒すなら、術の盟約者を倒さなければ意味が無いぞ？」

「！？」
穴から這い出て来る者。クフは、凝視する。
「エイシス…！」
光すら飲み込む穴から輝く黄金の光を携えたエイシスが、ゆっくりと現れる。
「奈落の女神…エイシス―！！」
クフの顔に怒りと憎しみが溢れる。
「『人』である事すら忘れた悪魔に奈落と言われるのは心外だな」
「エイシス！」
クレスは、黄金を纏ったエイシスの登場に驚く。（エイシスがいるという事は、ドルシェは無事という事か…？）
「人間よ！太陽の力を時の元へ連れて行くのだ！」
エイシスは、ヤーヴェをクレスに投げつける。
「！？」
クレスは、その行動にも驚くが、何よりも男を1人、空中に投げ付

けるエイシスの力に驚いた。
「何てヤツだ…」
ヤーヴェは、見事にクレスの所に届く。
「何をしても無駄だ。どうせ、お前らは此処で死ぬ運命にある」
クフが、クレスに向かって跳ぶ。
「まずは、お前達だ」
クフは、クレス達の前に現れ手をかざす。そこから閃光弾が発射された。
「ガルッ」
ユニコーンは、一瞬でエイシスの後ろに辿り着いて隠れる。
「こざかしいヤツらだ」
クフは、クレス一行を睨む。
「早く行け。私は、『人』との決着を付けねばならない」
エイシスは、背中の両刃の槍を取り出す。
「エイシス、ドルシェはどうした？」
「ドルシェは、無事だ。安心するがいい」
「…わかった。お前を信じよう。ユニコーン、行くぞ」
「クレス―」
エイシスが、飛び立とうとするクレス達を呼び止める。
「？」
「その寝ている男は、精霊使いなのか？」
「いや。人造人間だ」
「…そうか」
エイシスは、一言だけ呟いて視線をクフへと移す。
「エイシスよ。再び、お前と対峙出来るとは、思っていなかったぞ」
クフの表情は楽しそうだ。
「私も、あの時、完全に葬っておけば良かったと後悔していた所だ」
「我々を裏切ってまで、エデンを守ったのは何故だ？」
「…エデンと太陽の声が聞こえた」
「エデンと太陽の声だと…？」

クフの表情が曇る。
「人は、導くべき道を誤った。時を刻む歴史などエデンは望んでいなかった。エデンは、エデンの意思と繋がる者達との歴史だけを望んでいたのだ」
「意味の分からぬ事を…」
「人であり続けるお前には理解など期待していない」
「ならば、人であるお前は理解したのか？」
「理解したから、お前達の前にいる」
「ふん…ならば、我が力で、その道理をねじ伏せるとしよう」
クフは、腰にかけている剣を抜く。
「エイシスよ。『闇の剣』を知っているか？」
「…」
エイシスは、何も答えず剣と槍を構える。
「闇とは、光の当たらない部分に生息する。つまり、光の横に必ずいるという事だ」
「―！？」
エイシスの後ろに現われたクフは、容赦なく切り掛かる。間一髪でクフの剣を受け止めるエイシス。すかさずに槍を突き刺すが消える。
「もう一つ説明をすると、闇とは、光を当てなければ、そこが闇になる」
またもや、後ろを取られたエイシスは、前に飛び込んで避難する。
「なるほど…」
エイシスの視線の先には、クフの攻撃範囲にいるクレス達がいた。
「闘いとは、常に先の先を読む事。これも、時を刻む歴史だからこそ身に着いた芸当だ」
クフが剣を降る。クレス達は、あまりの早い動きに身動き一つ取れない。
「なに！？」
クレス達とクフの間に、真っ赤な炎の壁が出現する。
「太陽の力か！」

クフは、ヤーヴェを睨むが、ヤーヴェに意識は無いようだ。
「太陽の力…人間よ！早く宮殿に向かえ！」
エイシスは、クレス達を急がせる為に、激を飛ばす。
「行くぞ！」
呼応する様にクレスが叫ぶ。
「ガガガガルルル―っ！」
四人の男を乗せている為か、極端にスピードが遅い。
「そんな状態で、逃げ切れるとでも思っているのか！」
クフが立ちはだかる。
「お前の相手は、私のはずだが」
エイシスが、クフに切り掛かるが、クフは、紙一重で交わして反撃をする。エイシスは、左手の剣で受け止める。
「エイシスよ。死に急ぐ必要もあるまい」
クフは、余裕の笑みを見せる。
「死に急ぐ？勘違いするな。私は、お前に決められた人生なんて真っ平だ」
「お前がどんなに強くても、闇の私に勝てない事を知る事になる」

「ならば、お前にも、本当の光を見せてやろう」
エイシスの剣が、光り出す。
「光りの太刀か。無駄な事を」
クフが構えた剣が、漆黒の色に変わる。
「無駄かどうかは、後で聞こう！」
エイシスが剣を振るうと、眩い閃光弾が走る。
「ハァァァァ―っ！！」
クフは、剣をかざす。
「―！？」
エイシスは、目の前で起きた出来事に驚嘆する。クフは、閃光弾をすり抜けていた。
「言ったはずだ。光があれば、そこに闇も存在する、と」

クフの表情には、ゆとりさえ感じる。
「…なるほど。その剣は、闇を創る媒体という事か」
エイシスの剣の光が収まっていく。
「その気になれば、この剣の闇で、エデンを飲み込む事も可能だぞ？」
「…」
エイシスは、クレス達を見上げる。どうやら、無事に最上階の窓付近に着きそうだ。

「ユニコーン！あと少しだ！」
「ガルゥ…！」
クレスは、ユニコーンを励ます。
（ダガース達は、着いたのか…？）
クレスは、他の仲間の安否を気遣いながらも、宮殿の最上階を目指す。

〜時〜

「ここが時の間か…」
ダガースは、ドアを突き破る。目の前に広がる惨劇。
「リトちゃん！入っちゃダメだ！！！」
ダガースは、見えないリトを制止する。
「ダガース。中で何が起きてても、私は行かなくちゃいけない。皆がそれぞれ出来る事を精一杯やってくれたから、私は此処にいるんだもん」
「リトちゃ―え？」

リトの身体が現れてくる。その身体からは、光とは違うオーラが、リトを包んでいる。

リトは、ゆっくりと歩き出す。眼前に広がる惨劇は、部屋の静けさを更に、不気味に醸し出す。

「ヤバい気がするぜ…」

ダガースは、後を付いて行く。

「法王様…只今、参りました。遅くなり申し訳ございません」

血の海に横たわる、法王の前で、リトは挨拶をする。

「太陽…の意思…」

徐に部屋の隅から聞こえる消えそうな声。振り向く先には、教皇が今尚、気力を振り絞っている。

「あなたは、教皇！？」

リトは、教皇の元へと駆け寄る。

「早…く…円陣に…むか…え…神格…」

「わかりました。でも、その前に―」

リトは、教皇を引きずり出す。ダガースも救護を手伝う。

『太陽の意思…』

心に直接、響く声。

「出たか」

ダガースは、周りを見渡して注視する。リトは、無視をして、教皇の救出に全力を尽くしている。

『あがくな…その者も、すぐに魂の存在になる…お前達と共に…』

辺りの空気が震え出す。

「くそっ！」

ダガースは、盟約の解放―スフィンクスへと変わる。そして、大き

な水晶に向かって、炎を吐く。

『神獣とは…』

炎にまみれた水晶が光り出す。

「時の女王だか、何だか知らねぇけど、邪魔するんじゃねぇ！」

ダガースは、間髪を入れずに炎を吐く。しかし、炎の中で水晶は、強い光りを放つ。

『たとえ神獣でも、私を止める事は叶いません…』

声が聞こえなくなると同時に、ダガースの動きが止まる。

「ダガース！？」

ダガースの異変に、気が付くリト。

『神獣の時間を止めました…最早、ただの飾りと変わりません…』

水晶より、光りの矢が飛び出す。矢は、ダガースの喉元に突き刺さる。

「―！！ダガース！！！！…何んで…何故、こんな事を平然と出来るの！！！？」

リトは、怒りを抑え切れずに叫ぶ。

『エデンは、元々、弱肉強食の連鎖に因って、成り立つ世界…人が人間より強い証拠です…』

「確かに、世界の秩序はそうかもしれない！でも、彼等は、与えられた環境で必要なだけの事しか考えていないわ！あなた達のしている事は、ただの欲望を満たす為の殺戮よ！」

『太陽を統べる者と変わらぬ心……ムシズが走るわぁっ！！！』
罵声に変わる、女王の声に、リトは、一瞬、動きが止まるが、すぐに水晶を睨み付ける。
「全ての者の願いは、争いの無い儚くも波風のたたない平凡な幸せよ！それを壊すというならば、私は最後まで戦うわっ！」
リトは、教皇を引っ張り始める。
「太陽…意思…円陣に…」
教皇は、うわ言の様に、同じ言葉を繰り返す。
「教皇様。今は、目の前にある命を助けます」
リトは、ただ、ひたすら引っ張る。

『あがくな…下等生物…』

次の瞬間―水晶から、眩い光の矢が何本も飛び出す。しかし、リトは、怯まずに救出を試みる。

『人間とは、愚かな生物…』

光りの矢が、教皇に突き刺さる。
「ぐふっ―！」
教皇の口から、大量の血が流れ出す。
「教皇！？」
リトは、すぐに教皇の体を抱き寄せる。
「カインの弟子よ…己の使命を果たせ…それが…世界を…救い…終末…止める…希望…」
教皇は、床に身を預ける。
「教皇様！！」
リトは、教皇を揺さぶるが反応はない。

「いやぁぁぁぁ！！！」
リトの叫びが、部屋に響き渡る。
『次は、太陽の意思…』
また、光りの矢が無数に飛び交う。リトは、うつむいたままで、呟く。
「…私は…私は負けない…」
リトは、立ち上がる。そして、ダガースの方へと歩き出す。
『！？』
光りの矢は、まるでリトを避ける様に、当たらない。
「ダガース。ごめんね。皆みたいに特別な力もないから、助けてあげられなかったね。…せめて、私がやるべき事をするね…」
リトは、ダガースの頭を撫でる。
『太陽に守られしオーラ…』
時の女王の攻撃が、激しさを増す。しかし、リトは顔色を変えずに、円陣に向かって歩き出す。
『神の力が通じぬならば…』
水晶の光りが、赤色に変わってくる。リトは、その光景を見て、立ち止まる。
『時の姿を見せましょう…』
目の前に現われる女性の姿。背中には、天使の証たる翼を持ち、容

姿は、美の象徴とも呼べる程の美麗な姿をしている。
『現格層に姿を見せる事になろうとは…しかし、これで、太陽の意思を葬る事が出来ます…』
「…」
リトは、動じない。それどころか、円陣に向かって歩き出す。時の女王は、そんなリトの行動に腹を立てたのか、リトの目の前に降り立つ。2人の目が合う。
「どきなさい」
リトは、怯む事なく言う。時の女王は、何も言わずに手を上にかざす。すると、一瞬、光りが迸り、その手には、重々しい剣が握られた。
『終末の始まりです…』
声と同時に、地響きが起きる。バランスを崩したリトは、床に手を付く。
『始まりの為に、終わりにしましょう…』
時の女王の一撃が、リトを襲う。
「時の女王！」
剣が振り下ろされた瞬間に、声と同時に届く、弓矢。
「ハインズ！」
声の方向には、次の矢を構えて、立っているハインズがいた。
「リト様！今、お助け致します！」
ハインズの放つ矢は、燃え盛る太陽の様に炎を帯びている。
『太陽の使い人か…』

時の女王は、燃え盛る矢を、片手でねじ伏せる。
「ちっ！」
ハインズは、剣を抜き、接近戦に持ち込もうとする。
「来ちゃダメ！」
リトは、ハインズを制する。しかし、動き出した勢いは、止まらずに、ハインズは、部屋の中へと、なだれ込んだ。

『神獣と同じ運命を辿りなさい…』

ハインズの動きが止まる。
「ハインズ！」
リトは、ハインズの元へと駆け寄る。完全に硬直したハインズを揺さぶるが、全く動かない。

『さぁ、太陽の使い人…冥界に帰りなさい…』

時の女王は、ハインズの後ろに現れて、剣を振り下ろす。ハインズの体が、ぼんやりした光を帯びながら、薄れていく。
「ハインズ！」
リトは、何も出来ない自分に怒りすら覚える。消えていくハインズが、一瞬、笑った様にも見えた。
「…」
呆然と立ち尽くすリトの前に、剣を構えた、時の女王が見下す様にリトを見詰めている。

『さぁ…次はありません…』

またもや、地震が襲ってくる。バランスを崩すリト。そして、剣が振り下ろされようとした瞬間。

ガラスが砕け散る音―

「ガルゥ♪」

「お…お兄様！…マーズ！？」

クレス一行の到着だ。リトは、ユニコーンの背中で、布の様にかかっているマーズとヤーヴェを、すぐに発見する。

「2人とも無事だ。君は大丈夫か？」

クレスの声は、冷静に落ち着いている。リトは頷くが、ダガースの方を見る。

「大丈夫だ。ダガースは、そんな事では、死んだりしない」

クレスは、時の女王を見る。

「今までの化け物とは違う様だな」

『また、下等生物…』

時の女王は、身を翻して、クレス達の前に到達する。

「ガルッΣ（゜∇゜ノ）ノ」

ユニコーンは、慌てて逃げる。

逃げた所に現われる時の女王。

「なっ！？ユニコーンのスピードに付いてくるとは―！」

ユニコーンは、すかさず移動する。

『無駄だ…』

時の女王は、ユニコーンの後ろをとり、一気に剣を振り下ろす。

「ガルゥ！」

ユニコーンは、間一髪避けるが、すぐに後ろを取られてしまう。

「このままじゃ、いつか、やられる…！」

クレスは、作戦を考える。

「時の女王、もう、やめて！！」
リトは、叫ぶ。その声は届かない。
「…そうか！」
クレスは、マーズを放り投げる。
「化け物！人間をなめるなよ！！ユニコーン、動きまくれっ！」
クレスは、ランチャー砲を取り出し、一気に攻撃する。勿論、時の女王には効かない。しかし、クレスは撃ちまくる。
「もう少しだ…！」
ランチャーの砲弾は、時の女王には効かないが、確実に煙幕を残していく。

『視界を遮ったつもりか…？』

時の女王は、手を上に掲げる。すると、煙幕が手に吸い込まれていく。

『―！』

時の女王の瞳に映るのは、円陣の中にいる、リトとヤーヴェの姿だった。
「さぁ、円陣を叩くか我々を叩くか…？どちらにしても、お前の思う様には、行かないぞ」

『…浅はかな…』

「気を付けて下さい！また、時を止めるつもりです！」
「それで、ダガースは…」
クレスは、ランチャーを構える。

『遅い…』

クレスとユニコーンの動きが止まる。
「あ…」
リトは、成す術が無い事を痛感する。わかっていたのに、どうする事も出来ない。

『まずは、人間から…』

「ま…て…」
剣をかざす時の女王を止める声。
「お兄様!?」
ヤーヴェが意識を取り戻して、何とか立ち上がる。
「人間は、確かに愚かだ…そして、地上を導くのには小さ過ぎたかもしれない…だが、地球の先を憂いている者もいる…今少しだけ…待てないか…?」
ヤーヴェは、足の力が抜けて、膝を付く。

『太陽の力よ…人間にエデンを委ねて、長い時間が経ちました…しかし、人間は争い、人間の繁栄の為にエデンを汚し、人間の欲望の為に、時は刻まれて来ました…止めなくてはいけません…』

「でも、このままでは、罪のない動物達まで消滅するわ!」
リトは、ヤーヴェに加勢する。

『他の動物も同様です…人間との共存で、動物本来の連鎖が崩れた今、地上に混乱を引き起こす存在でしかありません…』

「地上から、全てを奪おうと言うのか」
ヤーヴェから、炎が踊り出す。
「リト、神格界へ行くのだ」

円陣が光り出す。
「うん。私は、私の使命を果たします」
リトは、マーズの方をチラッと見てから、祈りを始める。
『愚かな下等生物達よ…終末の名の元に消えるがよい…』
時の女王は、剣を振り下ろす。クレスの体から、血渋きがあがる。
「くそっ…ハァァ！」
ヤーヴェは、炎を放出する。勿論、時の女王には、全く効かない。
「ガルゥ！」
ユニコーンは、クレスを引っ張る。
『お前も時に逆らうのか…』
ユニコーンに向かって、無数の光の矢が解き放たれる。
「ガルッ！」
ユニコーンの体に刺さる光の矢は、どんどん食い込んでいく。それでも、ユニコーンは、クレスをかばいながら、安全な場所まで、引きずろうとする。
「非道な…！」
ヤーヴェの怒りが頂点に達する。炎は、巨大な二頭を持つ竜に変わる。
「燃やし尽くせ！」
ヤーヴェが振り下ろす腕を合図に、竜が時の女王に襲いかかる。
『太陽を統べる者なら、いざ知らず、お前ごときの竜など聞かぬ…』
時の女王から、オーラが発せられる。炎の竜は、オーラにぶつかり、蒸発していく。
「まだ、負けた訳ではない！」

ヤーヴェは、自ら時の女王に飛び込む。握った剣は、炎が噴き出す。
『無駄です…』
時の女王の瞳が、赤く光る。ヤーヴェの動きが止まり、血を吐き出す。
「な…に…！？」
状況が理解出来ないまま、倒れるヤーヴェ。
「負け…ない…」
ヤーヴェは、必死に立ち上がろうとするが、体が言う事を効かない。
「リトちゃんの兄ちゃん、交代するぜ？」
不意に聞こえる声に、ヤーヴェは振り向く。マーズだ。
「ババァの相手は、好きじゃねぇが、こんだけカマしてくれたら、お返ししなくちゃなんねぇしな」
マーズは、ダガースとクレスを交互に見て、最後にリトを見る。
「…奴は強い…ぞ…？」
ヤーヴェは、必死に痛みを堪えながら話す。
「安心しろ。今の俺は、マジで強ぇから」
マーズは、親指を立てる。その姿を見て、安心したのか崩れ落ちる。
リトは、完全に集中している様で、気が付かない。
『下等生物…まだ、いたとは…』
時の女王は、一気に間合いを詰める。
「あめぇよ？」
マーズは、剣を振るう。時の女王の剣は、見事に止められた。
『！…』
さすがに驚きを隠せない様だ。

「さぁ？ババァ、第2ラウンド開始だ」
マーズは、ニヤリと笑う。

「…」

「ちなみに、時を止めても無駄だぜ。試しにやってみたらどうだ？」
中指をクイクイと立てて、挑発するマーズ。

『下等生物にも劣るクズめ…』

時の女王の長い髪が、逆立つ。

『度重なる無礼…死すらぬるい…！』

巨大な光の球が、両手から放たれる。
「光りの球しか、能がねぇのか？」
マーズは、光の球を両手で受け止める。
「ハァァァァ…！！！！」
光が、どんどん吸収されていく。

『…！？』

「生憎だったなぁ。光と言えば、避雷針だろ？」
マーズの立つ足元で、光が燻る。
「今度は、俺の番か？」
マーズは、パチンと指を鳴らす。足元の光が、床を伝って、時の女王の元で噴き出す。

『ぬぅぅ…！』

時の女王の顔が、一瞬、歪む。
「どうだ？自分の光の威力は？」
『おのれ…』
時の女王は、気合いで光を弾く。その顔は、怒りに満ち溢れている。
『お前の時も止める…！』
「！？」
マーズの動きが止まる。
『所詮、人間ごときには、私には勝てない…』
「確かに人間じゃ、辛いわな」
『な…！？』
マーズは、頭を掻きながら言う。
「言っただろ？時を止めても無駄だ―と」
マーズは、ニヤリと笑みをこぼす。
『何故だ…？』
「簡単な事さ。時間の流れにいないだけさ」
『何者だ…？』
「…マーズだ」
マーズは、ヤーヴェの剣を手に取る。そして、リトの方を見る。リ

トは、周りの声も聞こえない位に集中している。
「さぁて、リトちゃんも集中している事だし、始めるとするかぁ？」
マーズは、剣を構える。

〜時の理〜

「エイシスよ。光が通じぬ相手は、歯がゆいかな？」
クフには、余裕すら感じる。
「…」
「言葉も出ないか。まぁ、無理もない。お前の必殺の一撃が通じないのだからな。所詮、人間の体を借りた程度の力じゃ、無駄なあがきと言った所か」
クフは、見下げて話す。
「…」
エイシスは、剣を高く掲げる。
「？」
そして、ユックリと下に下ろす。
「―！？ぐわぁっ！」
クフの左腕が、ちぎれる。
「相変わらず、よく喋るヤツだな。私の必殺の一撃が光？笑わせるな。忘れたなら、思い出させてやろう。必殺の一撃を」
エイシスは、槍を地面に突き刺して、高く跳ぶ。クフは、闇を貼り込める。
「何度、何をしても無駄だぁ！」
エイシスが黄金に輝き始める。
「このクフの闇に、勝る光はないっ！」

闇が漆黒へと変わる。
「…。最後に一つだけ教えてやろう。光とは闇が強ければ強い程、その輝きの存在感が増す―という事を。そして、光が当たる黄金は、闇の中にあっても輝く！」
エイシスが急降下してくる。そのスピードは、今までのスピードとは比較にならない。
「おのれ…！」
クフも反撃に出る。
「受けるがよい！黄金の太刀！」
地面に刺さる槍が輝き、一筋の光が、黄金色に光るエイシスの剣にぶつかる。
「なっ…！？」
その輝きは、クフの闇すらも照らし出す。
「ば…馬鹿な…！」
クフの剣が、砂の様に崩れていく。
「さらばだ。地上で最後だった人間―クフよ」
エイシスの剣が、横一文字に走る。クフは、ただエイシスを見ながら、呆然としている。そして、黄金色に包まれながら消滅していく。程無くして、エイシスは、地上に降り立った。
「終わった…。後は、任せたぞ」
エイシスは、刹那の光と共に消える。そこには、ドルシェの姿があった。

第6部

～女王の誤算～

「さぁて、時も止めらんねぇとなれば、次はどうする？」
マーズは、剣先を時の女王に向ける。

『下等生物がほざくな…』

時の女王は、一気に間合いを詰める。剣と剣がぶつかる。次の瞬間、時の女王の蹴りがマーズの腹を直撃して、壁に激突する。時の女王は、間髪を入れずに、光の矢を放つ。
「にゃろっ！」
マーズは、素早く避けて、反撃する。しかし、時の女王のスピードは、全く寄せ付けない。

『人間の速度で、私に勝てると思うのか…？』

マーズは、それでも剣を振るう。
（確かに届かねぇ…何か良い手はねぇのか…？）

『最初は、手品に驚いたが、これが現実の力の差だ…』

「手品…？…そうかもな…だが、人間が人並の能力を引き出せたら、わかんねぇぜ？」
マーズは、不適の笑みを見せる。

『人とて変わらぬ…神に逆らえる存在などない…』

「なら、やってみっか？」
マーズは、集中する。電気がマーズへと集まる。

『…』

「さぁ、覚悟はいいか…？」
マーズが仕掛ける。そのスピードは、時の女王に匹敵する速さだ。

『！？』

紙一重で避ける時の女王。マーズは、立て続けに攻撃をする。
「攻撃は、最大の防御って言うんだ！」

『なるほど…見えたぞ…どうやら、人でも人間でもない存在の様だな…』

「生憎だが…一応、人間だぜ？」
マーズと時の女王の剣が交差する。時の女王は、口を開ける。その瞬間に、閃光が走る。
「くっ…！」
さすがに、マーズは一瞬、目を閉じる。

『油断は、禁物だったな…』

「くっ…そ…」
マーズの腹には、女王の剣が痛々しく突き刺さっている。剣を伝って滴る血。

『神には逆らえない…』

「神…神…うっせぇぇぇ！！！」
マーズは、叫ぶ。そして、女王の剣を掴み、引き抜こうと試みる。
「てめぇが、神だとしても…この地上に…認めてくれるヤツは…いねぇ！！！」
一気に剣を引き抜く。
「はぁ…はぁ…」
光りの矢が何本も刺さり倒れるユニコーン。その横で倒れているクレス。力尽きて、倒れたヤーヴェ。そして、円陣の中で、ひたすら祈りを捧げるリト。マーズの視界に映る全ての状況―。
「ダガース！いつまで、ババァの力に負けてんだぁ！」
マーズは、ダガースに向けて光の球を投げ付ける。ダガースの尻辺りに当たるが反応はない。

『…無駄な事を…』

「そうとも限りませんわ」
もう1人の女性の声。
「遅過ぎだろ…」
マーズは、声の主に向かって、力の無い野次を飛ばす。
「マーズさん。随分と派手にやられてますわね？」
入り口に立つ女性は、ドルシェだった。
「五分…いや、三分でいい。頼んだぜ？」
マーズは、倒れる。
「あら？将軍とユニコーンさんへの償いは、八分は必要ですわ」
「好きにしてくれ…」
マーズは、倒れたままで放置する。

『何故…下等生物ばかりが、邪魔をする…』

「下等生物？もう、それでも良いですわ。だけど、下等生物は、上等生物のあなた達よりも気高いプライドを持っている事を忘れずに」
ドルシェは、ユニコーンの頭を撫でる。
「ユニちゃん、待たせましたわ。将軍を助けようとして下さったのね。感謝しますわ」
「がるぅぅ…」
虫の息のユニコーンは、それでも、ドルシェの為に好意を見せようとする。ドルシェは、優しく背中を撫でる。そして、将軍の方を向く。
「将軍…。只今、戻りましたですわ。これより、参戦致します」
彼女は立ち上がると、時の女王を睨む。
「さぁ、時の女王さん。全てを終わりにしましょう」
ドルシェは、ランチャー砲と魔弾銃を取り出し、発射させる。しかし、あっさりとかわされる。
「人間の武器は、玩具って所かしら…？」
ドルシェは、ランチャー砲と魔弾銃を、すぐに諦めて、暫魔刀を構える。

『お前ごときに本気はいらない…』

「本気でも、本気にならなくても、私は、あなたを斬りますわ」
ドルシェは、走り出す。

『ふっ…』

時の女王は、ドルシェのスピードの遅さに噴き出す。そして、向かってくるドルシェの後ろを取る。

『な…？』

斬られたのは、時の女王だった。
「早い割には、反応が鈍いですわ」
ドルシェは、怯んだ隙を逃さない。時の女王の腕に、二つの傷が入る。

『おのれ…』

時の女王は、フルスピードでドルシェの後ろに付く。しかし―

『ぎゃーっ！！！』

時の女王の額に傷がつく。
「早いだけが取り柄ならば、下等な人間でも可能ですわ」
ドルシェの姿が時の女王の視界から消える。

『―！』

背中から斬られた痛みが走る。
「上等生物の方が、まさか、見えなかったなんて事ないですわよね？」
ドルシェはジャンプして、ヤーヴェの所へと降り立つ。
「あなたが太陽の力ですわね？エイシスさんという方から、伝言がありますわ。神格界への円陣を燃やせ―ですわ」
「…な…に…？」
ヤーヴェは、首だけをドルシェに向ける。
「太陽の力なくして、太陽の意思は届かない―始まりを始めるならば、やってみては如何かしら？」
ドルシェは、すぐに、その場を離れる。そして、時の女王に攻撃をする。今度は、ドルシェの攻撃を止める女王。

『お前も、あの男と同じ境遇か…？』

「あの男？失礼ですわ！レディに対して、男と同じ扱いは許しませんわ！」

ドルシェは、時の女王の目の前で、宙返りをして、再度、攻撃をする。

バキッー！

時の女王の剣が折れる。

『神の剣が―！？』

動揺を隠せない女王を尻目に、ドルシェは、ダガースの所へと寄る。

「ダガースさん。エイシスさんより、忘れ物を預かって来ましたから、お返ししますわ」

動かないダガースに、手を添える。一瞬、うっすらと淡い光りが見えて消える。

「俺を起こしたのは誰だ…？」

ダガースの体の奥から聞こえる声。

「エデンのエイシスさんですわ」

「…古の盟約を果たす時か…良かろう！」

ダガースの体が金色に輝き出す。

『一体…お前は何者だ…？』

「あなた方が大嫌いな下等生物ですわ」

ドルシェは、あくまでも皮肉を忘れない。

「久し振りだな。時の女王」

そこにいるのは、ペガサスの体を持ち、二つの竜の頭を持つ生物が立っていた。

『まさか…ダグス…しかし、滅ぼしたはず…』

時の女王は、知っている様だ。

「お前らに、滅ぼされたんじゃねぇ。エデンの声を聞いたから、滅んだふりをしてやったんだ」

『エデンの声…』

「こまけぇ話は、忘れた。だが、お前が間違ったっていう事だけは覚えてるぜ？」

ダガースは、時の女王に飛び掛かる。

『―！』

何が何だかわからない間に、壁に激突する女王。

「悪いが、手加減してるんだがな」

ダガースの羽根が、優雅に動く。

「ダガースさん、凄いですわ！普段の天然ぶりからは、想像出来ませんですわ」

「ドルシェにだけは、言われたくねぇ…」

『何故だ…神が、下等生物に劣るのか…有り得ない！』

女王のオーラが爆発する。

「どうやら、お怒りみたいだな。ドルシェ、勝てるのか？」

「…ダガースさんは？」

「残念だが、ダグスとしては、盟約を果たして終わりだ。ダガース

は、勝てねぇ」
「盟約って何ですの？」
「これだ」
ダガースは、巨大な炎を二つの口から吐き出す。そして、ヤーヴェを直撃する。
「どういう事ですの！？」
さすがのドルシェも驚く。
「俺は、雷を好むが、本質は炎。ヤーヴェとは、炎の盟約を交わしている」
「あ…」
ヤーヴェが起き上がる。
「助かった。礼を言う。」
先程の瀕死の状態からは想像が出来ない位に、何事も無かったかの様だ。
「リト」
ヤーヴェは、優しく肩に手をおく。リトは、静かに目を開けて、ゆっくりと振り向く。
「お兄様…声が聞こえるのに…道が…道が見えない…どうしたら良いのですか…？」
リトは、泣きそうな顔をする。
「リト。私を…いや、私達を信じるか？」
ヤーヴェのまなざしは、リトを真直ぐ見詰める。

～終末の盟約～

うなる大地。荒れ狂う空。建物は、大地の怒りの前に崩壊した。

「ここも、もうダメか…？」
ソルジャーは、通信室で煙草を吹かす。所狭しと並ぶ機械は、ショートして爆発を始める。
「通信士も楽じゃないねぇ」
消火器を持ち出し、消火を始める。
「こりゃ…全然、ダメだ」
ソルジャーは、消火器を放り投げて、パソコンの前に座る。

『友よ。明日の空の下で会おう』

送信をしようとした瞬間―大爆発が襲う。

「外は、どうなっているんだ？」
「神よ！」
「ママァーっ！」
度重なる大きな地震は、核シェルターを簡単に揺らし、恐怖を煽る。
その度に、人々の悲鳴があがる。
「大統領。他のシェルターとの交信が途絶えました。恐らく、通信塔の故障かと…」
「目と耳が絶たれたか。負傷者がいないか、すぐに調べるんだ」
「はっ！」
「…一体、どうなるんだ…」
ゼビーは、暗闇の中で呟いた。

「さて。盟約は果たしたし、俺は冥界へ帰るぜ」
ダガースが光り出す。
「まぁ？約束を律義に守るんですわね」
「まぁな。この事態を止めらんねぇなら、この先も一緒だ。だから、俺達の力ではなく、自分達の力で何とかするんだな」
「なるほどですわ。ただ、一つだけ教えて欲しいですわ」

「時の女王は、時を支配しただけだ。元々、時は自由であり、全てに平等だった」
「話が早くて、助かりますわ」
「お節介ついでに、一つだけ手を貸すぜ」
ダガースが時の女王の元へ到達する。
「時の女王よ。悪いな」
ダガースは、女王に向かって火を吐く。

『ぎゃーっ！』

女王の羽根が、片方、燃えてなくなる。
「これで、時を止める事は出来ねぇ。まぁ、ドルシェとマーズは、あんまり関係ねぇみたいだけど、一応…な？」

『おのれ…！』

時の女王は、光の矢を放つ。
「時の女王よ。冥界に来たら、いくらでも相手してやる。だが、俺とエイシスの二人が相手だがな」
ダグスは、光の矢を全て、炎で消し去る。

『エイシス…』

「やはり、ダガースさんは、エイシスさんと知り合いだったのですね」
「まぁな。そんじゃ、行くか。…未来を人間の手で掴めよ」
淡い光りと共に、ダグスの姿が消える。そして、スフィンクスのダガースがいる。
「という事で、ダガースだ」
「ホントですわ。ヤーヴェさん！こっちは、私達に任せて、そちら

でやるべき事を、お願いしますわ！」
「信用出来るか…？」
「信じます。少しの可能性でもあるならば、全てをかけます」
リトの目に、倒れるマーズが映る。
（マーズ…私も頑張るから、起きて…！）
『下等生物達…許しません…』
光の矢が、一気にヤーヴェとリトを目指す。
「ダガースさん！」
「おう！」
ダガースとドルシェは、二人の前に移動して、光の矢を全て、払いのける。
『おのれ…消えてなくなれっ…』
女王は、光の球体を放つ。
「その手は、通用しねぇって、いってんだろ？」
光の球体が、収縮していく。
「マーズさん、おはようですわ」
「寝てた訳じゃねぇ。傷を塞いでたんだよ」
「マーズ！てめぇ、呑気に寝てやがったのか！？」
「ドルシェ、その口塞げ」
「あら？ダガースさんのおかげで、今生きてるのですわ」
「ちっ。グルかよ…」
マーズは、頭を掻きながら、溜め息を一つ吐く。
「上等生物さんが、お怒りですわ」
「上等生物って何だ？」
「私達が下等生物だから、立派な上等生物って事ですわ」

『いい加減にしろーっっ！！！』

時の女王の声が変わる。

「最早、性別不明。って事で、手加減しねぇぜ？」

マーズは、腕を広げる。周りの空気が震え始める。

「私達は、援護にまわりますわ」

ドルシェは、女王との間合いを詰めて、暫魔刀を振るう。

『そんな剣、へし折ってやる！』

「無理ですわ。上等生物さん？」

ドルシェの剣は、女王の左腕を切り落とす。

『利かぬわぁぁ！』

切れた腕が、再生する。

「気持ち悪過ぎだろ！」

ダガースは、後ろから、再生した腕を食いちぎる。

『おのれぇ！』

「よそ見は、いけませんわ」

『これでも喰らえ！』

女王の口が開き、閃光が走る。

「うぉ！？」

『な…んと！？』

「上等生物さんが、姑息な手段を使っては、示しがつきませんわ」
閃光で不意を付いた一瞬の攻撃を、ドルシェは、しっかりと受け止めていた。
「俺の所だったら、ヤバかった…（「ェｰ；）」
「いっくぞぉ！」
マーズの声が響き渡り、辺りに電磁波の波が漂い始める。

「リト行くぞ！」
「はい！」
ヤーヴェは、炎の質量を増やしていく。
「マーズ！行ってくるわ！」
「リトちゃん！頑張ってこいよ！」
マーズは、ウィンクを送る。そして、マーズとヤーヴェは、ほぼ同時に力を注ぎ込む。
マーズの放つ風に乗った電磁波は、うねりながら巨大な砲弾へと変わる。時の女王は、避けようとするが、間に合わない。

『なん…だ…！この…ちか…ら…！』

時の女王の身体が、千切れていく。

「はっ！！」
ヤーヴェは、円陣に向かって、炎を放出する。円陣に、一気に火が付く。
「リト！踏ん張れ！」
ヤーヴェは、炎を送りながら、応援をする。
「お兄様…行ってきます！」
円陣が光りながら燃える。リトの身体は、円陣の中で、間接照明に

照らされた様に光る。
「頼んだぞ…リト…！」
ヤーヴェの体から、炎が溢れ出す。余りに暴発したエネルギーの為か、ヤーヴェの本体が絶え切れない様だ。
「後、少し…」
リトの体が、薄れていく。ヤーヴェは、いよいよ、体中に炎が廻る。
「これが…最後だぁぁぁ！」
ヤーヴェは、渾身の力を振り絞る。業火を円陣に投げ付ける。リトの姿が、消えていく。
「頼んだぞ…我が妹よ…」
ヤーヴェは、炎と共に焼失する。

「くそババァ！消えやがれ！」
マーズの放つ電磁波は、時の女王の周りの空気を飲み込む。

『空間が…切れた…？』

「喰らえ！！！」
マーズは、一瞬、気を吐き出す。すると、時の女王の周りで、電磁波がショートして、爆発を起こす。
「ドルシェ！ダガース！」
ドルシェは、両手を時の女王に向けて瞳を閉じる。ダガースは、宙に舞い、口から炎を吐く。更に爆発を起こす。
「今度こそ、終わりですわ」
開いた瞳は、紅く染まっている。両手から発せられる真っ赤な球体は、爆発する電磁波と炎を飲み込んで、勢いを増していく。

『こんな物で終わると思うなぁぁぁぁ！』

時の女王の気力が、一気に上がる。

「無駄な努力だぜ？」
マーズは、剣を取り出す。
『その剣は…！？』
透き通り輝く剣。天使が神に送ったとされる伝説の剣―
「出しただけだぁ」
『！？』
時の女王を襲う、大きな衝撃。ドルシェが放った球体が、女王に食い込んでいく。
『な…なんと…！』
女王も球体に飲まれ始める。
「確か、あなたの仲間の上等生物さんが、似た様な芸を見せていましたわ」
「相当、下等生物って言われた事に恨み持ってんな…（―д―；）」
ダガースは、呟く。
「あら？そんな事ありませんわ。上等生物さんの芸が使える下等生物がいる事を教えてあげただけですわ」
「はいはい…」
『そこまでだ―』
時の女王ではない男の声。
「また新手かよ？」
マーズは、周りに気を配る。
「マーズ！後ろだ！」

マーズは、反射的に横に飛び込む。顔の横を何かが通る。
「また、上等生物かよ！？」
視界に入るのは、人間と変わらない姿をしている。
『我は、人間。奈落の底で生きてきた』
男は、時の女王の元へと向かう。
『待たせたな…』
『アレン…』
アレンは、時の女王を飲み込んでいく球体を握り潰す。
「ワイルドな方ですわ」
「ジョーク言ってる場合かよ…かなり、ヤバいんじゃね？」
ダガースは、アレンをじっと見る。
『神の剣を持つ男よ。我と戦うという事は、地獄に落ちるという事になるが？』
「てめぇは、何者だ？」
『応える必要はない』
アレンの目の色が、青く光る。迸る衝撃波。
「うぉ！？」
2人と1匹は、吹き飛ぶ。
「なんつぅ力だよ…！」
マーズとドルシェは、壁に激突する寸前で止まる。
「親玉かしら？」

「あの顔は、間違いなく親玉だろ」
ダガースは、壁に激突するが、すぐに構える。
『やっと、戻れた。終末は、失敗なのか？』
『下等生物の反乱で、乱れている…』
『なら、始末するとしよう』
アレンは、三人の方を向く。目が合ったのは、ドルシェの様だ。
『女か…悪く思うな』
アレンが手をかざすと、ドルシェが吹き飛ぶ。
「―！？」
今度は、壁に激突する。
「ドルシェ！」
近くにいたダガースが、駆け寄る。しかし、ダガースも弾き飛ばされる。
「どうなってんだぁ！？」
天井に激突して、落ちていくダガース。
（気功系の力か？）
マーズは、慎重に分析する。しかし、何が起きているのか理解出来ない。アレンが、マーズの方に振り向く。
「はっ！」
マーズは、先制攻撃を仕掛ける。アレンの周りに、水の柱が沸き立つ。そして、一気にアレンに襲いかかる。
『ふん…』
アレンは、直撃しても動じない。
「ついでに貰っておけ！」

マーズは、神の剣を振るう。

『ほぉ？』

アレンは、剣を腕で受け止める。

「マジかよ！？」

傷一つ付けれない事に、驚くマーズ。

『無礼の数々…許しません…』

時の女王は、マーズが怯んだスキを見逃さなかった。無数の光の矢を放つ。

「近過ぎだろ！？」

マーズは、避け切れない。しかし、炎が目の前を通過して、光の矢を飲み込む。

「チームワークは基本だな」

ダガースは、立て続けに炎をアレンに向けて吐く。アレンは、片手で炎を受け止めると、ドルシェに向かって、弾き返す。

「―！？」

間一髪で避けるドルシェ。

「ダガースさん！危ないですわ！」

「俺じゃねぇだろ…」

『虫けら共よ。悪あがきはよせ』

「最後は、虫けらかよ」

マーズは、地面に手を添える。

『そうはいきません…』

時の女王が、マーズの前に立ちはだかる。

「ちっ！」
マーズは、その場から離れる。
「ダガース！時間を稼げ！」
「犬使いが荒いぜ…！」
ダガースは、時の女王の前に移動する。

『神獣よ…速さだけは、認めましょう…』

時の女王は、光の矢を放つ。交わすダガース。
「時間どころか、隙がねぇかも…」
ダガースは、焦りを覚える。

『そろそろ終わりにしよう』

アレンは、ドルシェの方を向く。
「私が、最初の獲物かしら？」
ドルシェは、暫魔刀を構える。

『獲物？勘違いするな。お前ら虫けらは、踏み潰すだけだ』

「その割には、私達の邪魔ばかりしますわね？」

『その減らず口も言えなくなる』

気が付けば、アレンはドルシェの目の前に到達する。拳が振り上げられる。ドルシェは、反射的に横に避ける。アレンの拳は、床を破壊する。飛び散った破片が、ドルシェの頬に傷を付けた。
「あ…」
「ヤバい…」
マーズとダガースは、その光景を見て、顔色が変わる。

「レディを傷物にしたわね…」
ドルシェの口調が変わる。

『安心しろ。死にいくだけの存在だ』

「…私は、何処にも行くつもりはないわ」
ドルシェの瞳が、紅く染まっていく。
「マーズ。どうする？」
「悪いのは奴等だし、ここは、シカトでーうわっ！」
マーズの前に現われるドルシェ。
「マーズ、剣を借りるわよ？」
ドルシェは、マーズの神の剣を奪う。そして、一気にアレンの元に向かう。
「俺の武器が…」
「しょうがねぇ。諦めろ」
ダガースは、マーズを慰める。

『あなた達は、私が葬り去ってあげましょう』

時の女王は、壁にかかっていた大きな杖を取り出す。
「なぁ…俺って、脇役的な扱いに感じるのは気のせいか？」
「あ？…ダガース。まるで、主人公みたいな言い方してるぜ？ちゃんと、言葉の勉強した方がいいぞ」
「喧嘩買うか？」
「ババァに今までの返品が先だ」
「そうだったな」
1人と一匹は、構える。

『虫けらが、何をしても変わらないぞ』

「…」
ドルシェは、何も言わずに切り掛かる。暫魔刀が、紫色に輝きだす。
アレンは、腕で受け止める。
『やはり、無駄だったな』
「それは、どうかしら？」
次第に、暫魔刀が食い込み始める。
『ほぉ…？ただの虫けらではなかったか。だが、所詮、虫けらだ』
アレンは、腕を横に振って、ドルシェごと吹き飛ばす。ドルシェは、飛ばされながら、体制を立て直して、着地する。
『…』
「あんまり、虫けらをナメない方がいいわよ？」
暫魔刀を横一文字に振ると、紫色の閃光が、アレンに向かって迸る。
『―！』
アレンは、ジャンプをして避ける。その頭上の空中で、剣を構えて待ち伏せていたドルシェ。
「本気出さないと、痛い目見るわよ？」
再度、紫色の閃光が走る。
『くっ！』
アレンは、咄嗟に腕をクロスにして、閃光を受け止める。

「まだよ」
ドルシェは、もう一つの剣―神の剣を振るう。見えない何かが、アレンに激突する。
『この技…エイシスか…？』
「残念ながら、ドルシェよ」ドルシェとアレンは、落下しながら、お互い構える。
「本気を出す気になったかしら？」
暫魔刀が、紫色から青色へと変化していく。
『…良かろう。だが、一瞬で終わるぞ』
アレンの体が、赤味を帯びていく。
『まずは、見えない恐怖を与えよう』
アレンが、視界から消える。
「―！」
ドルシェは、焦る事なく、目を閉じる。そして、目を開くと同時に、暫魔刀を横に突き出す。
『なっ！』
ドルシェの剣は、見事にアレンの左肩に突き刺さっている。アレンは、堪らずに剣を抜いて、着地する。ドルシェも着地をして、すぐにアレンに攻撃を仕掛ける。
「見えない恐怖を体験したいのね？」
ドルシェの姿が消える。

『馬鹿な…！』

アレンは、横に気配を感じて、すかさず蹴りを入れるが、空を斬る。

『何処だ…』

「ここよ」

ドルシェは、アレンの目の前に現れる。

『ぬっ！？』

アレンは、ドルシェが振り下ろす暫魔刀を受け止めようと、腕で防御する。しかし―

『ぐはっ！？』

アレンが、前に倒れ込む。アレンの足は、膝から下が無くなっている。

「二刀流は、みせかけじゃないわよ？神の剣の切味は、どう？」

『おのれ…許さん！』

「あら？何度目の本気？？」

『この宮殿ごと吹き飛ばしてくれるわぁ！！』

「それは無理―」

ドルシェは、暫魔刀をアレンの心臓に突き刺す。そして、神の剣を後頭部に突き刺す。

『甘い…』

アレンは、宙に浮く。

『神に魅入られた武器でも、使う側が虫けらでは、威力は三分の一だな』

アレンは、神の剣と暫魔刀を手に取る。

「…」

ドルシェは、魔弾銃を取り出す。

『無駄だぞ…？』

アレンは、二つの剣をクロスさせる。すると、十字の光が浮かび上がる。

『格の違いを痛感するがいい』

アレンは、浮かび上がる十字の光を放つ。

『なに！？』

光は、ドルシェの方に向かわずに、壁に激突する。

「暫魔刀は、マックスターさんの持ち物。あなたごときが扱える剣ではないわ」

ドルシェは、目を閉じて集中する。開かれた瞳は、深紅から蒼色に変わっている。

『ならば、力でねじ伏せる！』

アレンは、剣を折ろうとする。

「私に隙を見せるのは、命取りよ？」

ドルシェは、魔弾銃を撃つ。弾は、蒼白い発光体となり、アレンの腹を貫通する。

『どういう事だ！？』

「説明する必要は無いわ」

ドルシェは、立て続けに攻撃する。右肩、左肩を捉える。

『おのれぇ！！！』

アレンの足が生えて、床に降り立つ。

『何故、私と対等に渡り合える…』

アレンは、予期せぬ出来事に混乱する。そして、時の女王の方を向く。

「ドルシェのヤツ、マジでつえぇのな。優勢じゃん」

ダガースは、戦況を分析する。

「ここまではな。だが、嫌な予感がするぜ…？」

「確かに。さっさと終わらせた方がいいな」

2人は、一気に走り出す。

『アレン…』

時の女王は、アレンと目が合う。アレンは、無言のまま頷く。2人は、抱き合う。

「…？」

ドルシェは、抱き合う2人に向かって、魔弾銃を撃つ。しかし、見えない壁に弾かれる。

「マーズさん！皆を連れて、逃げましょう！」
ドルシェも何かわからないが、得体の知れない嫌悪感を抱く。
「ダガース！」
マーズとダガースは、素早くクレスとユニコーンを救出する。マーズ達は、一塊になり姿が消える。

「皆、無事か？」
マーズは、周りを見渡す。
「何とか…な」
ダガースは、犬に姿が戻っている。
「酷いですわ…」
普通に歩ける場所も無い位に崩壊する地上は、正に終わりを告げようとしている。
「よしっ。んじゃ、お前らは、将軍を頼んだぞ」
マーズは、立ち上がり腕を回す。
「もしかして、戻るのかしら？」
ドルシェは、マーズに問いただす。
「リトがいるからな」
マーズは、そう言って消える。
「相変わらず、女が絡むと早ぇな…」
ダガースは、時の神殿を眺めながら言う。
「…って、ドルシェも行ったのかよ！？」
ダガースは、辺りを見渡すが、ドルシェの姿は見つけられなかった。

「何だ、こりゃ！？」
先程の戦闘があった部屋に散らばる釘。
「どうやら、違う部屋に迷ったみたいですわね」
「ぬぉっ！？ドルシェ！？何で居るんだよ！？」

突然する声の主に驚くマーズ。
「何でって、付いてきたから居るのですわ」
「いや…そうじゃなくってぇ…」
マーズは、ドルシェのノリに調子が狂う。
「細かい事は、後ですわ。それよりも、ここが何処なのかを調べるのが先ですわ」
ドルシェは、窓の方へと向かう。窓には、しっかりと釘が打ち込んである。そして、床を覗き込む。
「この部屋って、処刑とかをする部屋じゃないかしら？」
ドルシェは、床に染み付いた跡を見て、推測する。
「確かにそうかもな。だが、何故、この部屋に…？」
「マーズさんが、間違えたせいじゃないかしら？」
「そこかよ…ま、早く出ようぜ」
マーズは、ドアへと向かう。
「あれ？ドアノブがねぇ」
マーズは、ドアの前で立ちつくす。
「処刑部屋ですもの」
「お…なるほど。んじゃ―」
マーズは、ドアを蹴破る。
「派手ですわね」
「ワイルドと言ってくれ」
「ワイルドですわね」
「……」
マーズの顔は、引きつる。どうやら、ドルシェのノリは苦手な様だ。
「そういやぁ、ドルシェとチーム組むの始めてだよな？」
マーズは、細心の注意を払いながら、廊下に出る。
「そうですわね。私は、基本的に護衛チームにいましたから。表ですわ」
ドルシェは、堂々と廊下に出る。
「…。俺よりもお前の方が、ワイルドでない？」

「あら？女性は、ワイルドじゃなくて、ダイナミックの方が喜びますわ」
（ホントか？）
マーズは、真剣に考える。

『遅かったな』

ほのぼのムードを壊す心に響く声。アレンだ。
「ちょっと、野暮用でな」
マーズは、そう言うと、炎の球を天井に向かって投げ付ける。

『そのまま消えれば良いものを…』

「あなた達こそ消えるべきでしたわ」
ドルシェは、魔弾銃を放つ。弾は、空気中で何かに衝突して爆発する。
「ドルシェ。気を付けろよ？奴等、さっきと雰囲気が違う」
マーズは、構える。
「異端の者！」
聞き覚えのあるセリフ。
「まさか…カエサル！？」
マーズは、耳を疑う。しかし、目の前にいるのは、間違いなくカエサルであった。
間一髪で、カエサルの剣を避ける。
「時が我々の時間を、戻していたのを知らぬみたいだな」カエサルは、得意になる。
「知らねぇよ。俺が起きた時は、既に、あの状態だったしな。しかもヒイキは汚ねぇ」
マーズは、構える。
（ちっ。武器がねぇ）

マーズは、右手に炎を燃やす。そして、左手には、水が迸る。
「このカエサルを、あそこまで追い詰めたのは、異端の者…貴様が初めてだったぞ」
「異端じゃねぇっつうの」
「マーズさん、知り合いなのですか？」
一気にトーンダウンするマーズ。「あのな…知り合いが、剣で襲ってくるかよ！？」
マーズは、身振り付けて話す。
「それでは、敵なのですね？」
ドルシェは、カエサルに向かって、走り出す。
「女…邪魔するなら死滅のみ…！」
カエサルは、構えてドルシェに向かっていく。次の瞬間―
「残念だけど、あなたの出番は終わりよ」
ドルシェの瞳が紅く染まっている。
手から発せられる真空波は、カエサルの胴体を切り裂く。
「なっ！？」
カエサルは、自分の腹部を見詰める。
「眺めても無駄よ？」
ドルシェは、カエサルの剣を奪うと、頭から切り裂く。
「ば…馬鹿な…」
カエサルは、薄れていく。そして、消え去った。
「つ、強ぇ…しかし、初めて、追い詰められて、次に消されるって事は、脇役だったのか…」
マーズは、ドルシェの手際の良い攻撃に驚嘆するが、カエサルの境遇に同情する。
（ドルシェは、ホントに人間か…？）
「マーズさん、何か言いた気な顔をしていますわ」
いつもの口調に戻るドルシェ。
「何が乗り移ってんだ？」
「神ですわ」

「へっ？」
思い掛けない返答に、思わずマヌケな返事をするマーズ。
「多分だから、わかりませんけど」
ドルシェは、表情一つ変えずに言う。
（冗談だったの…？）
マーズは、呆気に取られる。
『カエサルの馬鹿め。虫けら達よ。死ぬ覚悟は出来たか？』

「優柔不断なもんで、まださっ！」
マーズは、炎と水を両方、解き放つ。

『児戯に等しいわっ！』

何もない所から、現れるアレン―
「あれ？さっきと違くね…？」
そこに居るのは、人間と同じ姿をしたアレンではなく、大きな2本の角とコウモリを彷彿させる羽根、そして、鋭い牙と爪を持つ者がいた。
「悪魔かしら…？」

「あの2人め…めんどくせぇ事だけ押し付けやがって」
ダガースは、愚痴をこぼす。
「しかし、将軍は、どうやったら動くんだ…？」
動かないクレスを眺めながら、呟く。
「がる…」
「なんだ？ドルシェに会いたいのか？もうちょい我慢しろ」
ダガースは、神殿を見詰める。
「おっと―」
断続的に続く地震は、確実に神殿を崩壊へと導く。もはや、地上に

安息の場所は無いに等しかった。

第七部

～マーズとドルシェ～

「お前は、男？女？」
マーズは、目の前にいる「生物」に問い掛ける。
『死に行くのに、知る必要はない』

「男の方ですわ」
「そこで判断…？」
マーズは、やはりドルシェのノリが苦手な様だ。

『死ね』

アレンは、手に持った剣を振るう。
「なにっ―！？」
剣を振っただけのアレンの攻撃は、マーズの後ろから襲いかかってくる。
「どういう事だ！？」
マーズは、肩を抑えながら、止血を試みる。
「わかりませんわ。ただ、敵は１人しかいないはず―」
ドルシェは、周りに意識を集中させるが、気配を感じない。

『よく避けたな。しかし、次はどうだ？』

アレンは、剣を振る。
「来るぞ、ドルシェ！！」
マーズとドルシェは、周りに気を配る。
「くっ！」
ドルシェは、寸での所で攻撃をくい止める。

『ほぉ。これならどうだ？』

剣を何度も振るい始める。
「厄介だぜ…」
マーズは、見えない攻撃を避けながら呟く。
「このままじゃ、マズいですわ…」
ドルシェも、打開策を探すが見付からない。
「待てよ…まさか！ドルシェ！５秒でいい！援護頼む！」
「わかりましたわ」
マーズに呼応すると、マーズの後ろまで、ジャンプをして到達する。
そして、乱れ飛んで来るアレンの攻撃をかわす。
「５秒スタートですわ」
「こまかっ！」
マーズは、突っ込みを入れた直後に集中を始める。

『何をしても無駄だぞ。』

アレンは、余裕すら感じる声で言う。
「甘いのは―お前だっっ！」
マーズの体から、光が溢れる。

『いっけぇ！』

マーズは、両手を横に広げる。光の円陣が、２人を包む。

『そんな防御は気かぬ！』

アレンは、突っ込んでくる。

「防御？人間の話も聞けないヤツが、偉そうにすんなよ？」

マーズは、手をとじる。

「マーズのスーパーデンジャラスアターック！」

光の円陣が、回りだす。そして、ガトリング砲の様に、次々と光の矢を放つ。

『攻撃は、最大の防御―か』

「名前がダサいですわ」

ドルシェは、矢を剣で払い落とすアレンを見ながら言う。

「名前より技を見ろっ」

マーズは、ドルシェに叫ぶ。

『なかなかの攻撃…だが、ダメだ』

アレンは、口から炎を吐き出す。光の矢は、一瞬で燃え尽きる。

「残念―」

マーズは、ニヤリと不適の笑みを浮かべる。

『ぬっ！？』

アレンの背後からの攻撃。光の矢が、右肩に突き刺さる。

「だから言ったろ？危険だって」

「そういう意味でしたのね！素晴らしいですわ！」

「いや…名前は適当…」

決めたつもりのマーズだが、ドルシェの反応に、動揺する。

『…』

「どうだ？自分の技を喰らった気分は？」
マーズは、立ち上がり中指を立てて話す。

『なかなか面白い手品だが、俺の攻撃とは違うな。これが本場だ』

「ドルシェ、今の技わかったか？」
「だいたいわかりましたですわ」
アレンは、剣を振るう。
「行くぞ！」
マーズの周りの円陣が光り周り出す。ドルシェは、集中する。
「もういっちょ！マーズの―」
「それ恥かしいですわ」
ドルシェは、マーズのセリフを遮る。開いた瞳は、深紅だ。
「…。くそ…」
マーズは、膨れ面をしながら、集中する。来るはずのアレンの攻撃が来ない。

『そういう事か。その円陣は、俺に攻撃させて、隙を作る為の…』

「そういう事だ。そして、ここで終わらないのが俺達だ―」

『！？』

アレンの背後からの攻撃は、頭に生えた角を切り落とす真空波だった。そして、そこに立っていたのは、ドルシェ。

『異空間の応用を、よくぞ見破ったな』
「手品のネタばらすのが得意だからな」
「隙がありすぎですわ」
『！』
ドルシェは、立て続けに真空波を放つ。アレンは、咄嗟に避ける。
『虫けらの身分で、なかなか楽しませてくれるわ！この勝負を付けたくば、生贄の間まで来い！』
アレンは、霧の様に消えていく。
「生贄の間？…めんどくせぇ」
「とりあえず、リトさんの所が先ですわね」
マーズは、親指を立てる。２人は、走り出す。

～冥界～

「久し振りだな。エイシス」
ダグスは、エイシスの前に降り立つ。
「そうだな。人間は、やはり滅びる運命なのか…」
「さぁな。だが、良い感じだったぜ？」
「そうか」
エイシスは、遥か彼方まで岩と砂が広がる世界を見詰める。
「冥界も決着を付ける時が来たな…」
「そうだな。しかし、勝算はあるのか？」

「…。オシリスに辿り着けば」
「オシリスの軍団か―」
「噂をすれば、来たぞ」
荒野の彼方に見える砂煙。偉業の形をした者達が、所狭しと走って向かってくる。
「アイツらも暇だねぇ。何万年やりゃ気が済むんだか」
ダグスは、宙に舞う。
「俺は上から。エイシスは下からで決まり―って、おい！？」
既に光の太刀を発動する寸前のエイシス。そして、剣を勢い良く振るう。遥か遠くにいる軍団を瞬殺していく閃光弾。
「俺、いらなくね…？」
ダグスは、空から眺める。
「始まりの挨拶だ。勝負は、これからだぞ」
消えた軍団の後ろから、それ以上の軍団が押し寄せてくる。
「なるほど。今度は、飛行部隊も一緒か」
ダグスは、息を吸い込み、一気に吐き出す。風と共に燃え上がる炎は、遠くの軍団を、一瞬で燃やし尽くす。
「衰えていないようだな」
「当然。しかし、エデンは、ほったらかしで良いのか？」
「…。あの3人がいれば、何とかなるのだろ？」
「そうだったな。だが、2人と1匹だ」
ダグスは、ニヤニヤしながら言う。
「ドラゴンが笑っても醜いだけだ。やめておけ」
エイシスは、無表情のまま返す。
「相変わらず、ノリが悪いのな」
ダグスは、しらけた顔をして呟く。
「オシリスを消滅させるぞ」
エイシスは、光のごときの速さで消える。
「ちったぁ、ユトリも必要だぞぉ？」
ダグスは、後を追って消える。

「なぁ、ドルシェ？」
マーズは、ドルシェの後を追いながら、質問する。
「なんですの？」
「何処に向かってるんだ？」
「私に聞かれても困りますわ」
「へっ…？？？」
ドルシェの答えに理解が出来ないマーズ。
「ドルシェ…何で俺の先を走ってんだ？」
「レディーファーストですわ」
ドルシェは、そのまま走り続ける。
「何か、調子狂うなぁ…」
マーズは、苦虫を潰した顔で溜め息を一つ吐いた。
暫く走ると、ドルシェは立ち止まる。
「ここがさっきの部屋かしら…？」
「違う様な気もするが…だが、血の匂いがプンプンしてきやがる」
「開くのが、手っ取り早いですわ」
ドルシェは、ランチャー砲を構える。

轟音一発―

「ハハハ…普通って言葉を知らないのか…？」
マーズは、破壊されたドアノブを拾って呟く。
「マーズさんも、充分、普通じゃないから安心出来ますわ」
「失敬な！俺は、至って普通だ」
2人は、そんな呑気な会話をしながら、中に入る。
「どうやら、違う部屋みたいだが、運命ってヤツに乗せられたか？」
部屋の中央に立つアレン。

『虫けら共よ！待ちくたびれたぞ。この部屋は、かつて、神聖な儀

式が行われた部屋。即ち、死ぬ為の部屋だ』

「ったくよ…ドルシェ。先に行ってくれ。俺は、寄り道してから行く」

マーズは、一歩前に出る。

「リトさんは、良いのかしら？」

「とりあえず、任せた」

「…了解ですわ」

ドルシェは、部屋を跡にする。

「さぁて、始めようぜ」

『始まりが終わりだー』

アレンは、セリフが終わる頃には、マーズの横に移動している。

「男に近寄られても嬉しくねぇ」

マーズは、炎をぶちかます。アレンは、片手で炎を受け止める。

『お前は、異端でありながら、何故に人間の味方をする？』

「…。そっくり返すぜ。お前は、人間だったのに、何故、人間を滅ぼそうとするんだ？」

『知れた事よ。人間などに未来はない。時の女王との契を交わした時にわかったのだ。人間などという中途半端な生物である限り、俺に未来などない―と』

アレンの拳に力が籠る。

「勝手をほざきやがって。てめぇの個人の感情で、全てを否定してんじゃねぇよ」

マーズは、壁に掛かっている斧を手に取る。斧が、電気を帯びて形

を変えていく。最後には、剣の形に変わる。

『相変わらず、こざかしい手を使うな。だが、神の剣でもない、只の鉄では何も出来ないぞ？』

「人間をやめたら、脳ミソも退化したのか？神の剣とは、己の意思一つで生まれ変われるモンさ」

鉄の剣が、光り出す。そして、次第に透き通った光を放つ剣へと変わっていく。

『面白い。ならば、俺も見せてやろう。人間が作った、神を斬る為の剣を！』

アレンの手の平で、剣らしき形の光が映し出される。

『これが、対神の軍団の為に作られた剣だ』

「ほぉ。んで、俺は神じゃねぇぜ」

『まだ、わからぬか。』

アレンは、剣を床に突き刺す。

「なっ！？」

マーズの足元から、剣が飛び出てくる。太股をかする剣。

『次は、どうだ？』

剣が天井から襲ってくる。避けるが、腕をかすめる。

「なかなか面白い手品だな」

マーズは、それでも余裕を見せる。

『ここからが本番だ』

アレンは、突如、突進を始める。マーズは、剣を構える。
「お前に長い時間、付き合ってる暇はないぜ？」
マーズも突進を始める。２人の剣がぶつかり合い、気流が外へ向かう。
『さぁ、地獄への招待状だ。受け取れ』

アレンの目の色が、緑色に光り、光線がマーズを襲う。ジャンプをして避けるマーズ。
「ホンっと、お前達は、不意打ちが好きだよな」
マーズは、神の剣を振るう。目で確認が出来る程に、空気が切り裂けて、アレンを目指していく。

『やはり、その程度の力だったか』

アレンは、不適の笑みをこぼしながら、左手を突き出す。カマイタチの様な攻撃は、アレンの左手によって止められる。
「神の剣だぜ？甘過ぎだろ」

『―！』

真空を受け止めた左手の後ろから、剣の先が現われる。
「いっけぇぇぇ！！！！」
マーズは、更に自分の剣に向かって、最大限の電磁波を流す。それは、空間を飛び越えて、アレンの前に現われた剣先に届き、一気にアレンの心臓辺りに突き刺さる。

『おのれ…！』

電磁波は、確実にアレンを捉える。
「ついでだ―！」
マーズは、瞬間移動で、一気にアレンの前に到達する。
『―！』
マーズの剣は、アレンの胴体を切り裂く。
『調子にのるなよ』
切り離された身体のそれぞれから、生えてくる身体。
「気持ちわるっ」
2人のアレンの登場に、拒絶を示すマーズ。
『…』
片方のアレンが、動き出す。
「このやろぉ！」
襲いかかるアレンの剣を避ける。
「ぐっ―！？」
マーズの肩に突き刺さる剣。もう1人のアレンが、いつの間にか、マーズの後ろを取っていた。
『…』
「しまっ…！」
何も無いはずの空間から、剣が出てきて、マーズの横腹に突き刺さる。

『…』

次々と現われる剣は、マーズを串刺しにしていく。

「こ…こんな所…で…くた…ばれ…ね…」

『終わりだ』

2人のアレンは、前後から、マーズの首をはねる。

『所詮は、虫けらだったな』

アレンは、更にマーズに向かって、業火を浴びせて燃やし尽くす。

ドルシェは、ランチャー砲でドアを破壊する。

「…。時の女王さん、出てきたら如何かしら？」

『…』

光りと共に、時の女王が現われる。

「あなたも悪魔に魂を売っていたのですね」

アレンと同じ生物が立ちはだかる。

『アレンは、魔なる人間…私は、魔を纏う神…』

ドルシェは、カエサルから奪った剣を振りかざす。

「つまり、2人とも悪魔の子分ですわね」

剣が、炎を携えてうねり出す。

「最後の勝負ですわ」

ドルシェは、剣を鞭の様に振るう。炎を携えた剣は、網状になり、時の女王に襲いかかる。

『…』

女王は、両手を広げる。両手の平から、こぼれ出す砂。

『時とは、一定の質量で動く…質量を減らせば、時は緩やかになる…』

砂の流れを止める女王。すると、炎の剣の動きが遅くなる。余裕で避ける女王。

『時の理が、お前に通じなくても、それ以外は違う…』

「…」

ドルシェは、剣を捨てる。

「全てを、お見せしますわ」

ドルシェは、集中する。身体から立ち込める光。

『やはり…お前は、太陽の使いの転生だったか…』

「エイシスさんが乗り移って気がつきましたわ」

ドルシェの体が、黒く変化していく。

「時を支配した、哀しき女王―さよならですわ」

ドルシェは、右手を前に突き出す。次の瞬間―

『こ…れが…太陽の力…』

時の女王の背中から、ドルシェの拳が貫通している。

「愛の深さ故に、憎む以外の道を失った哀しき存在…」

ドルシェは、手を抜くと、掲げた左手に暫魔刀が戻ってくる。

「魔と化した神には、うってつけの武器ですわ」

暫魔刀が、紫色に輝き出す。
『私を消せば、時が壊れるでしょう…』
「壊れたら、もう一度、作りますわ」
ドルシェは、暫魔刀を上から下に、勢いよく振るう。
『アレン…』
時の女王は、黄金の砂の様に崩れていく。
「マーズさんの好きな女性は、無事かしら…」
ドルシェは、円陣を見詰める。

〜神格界〜

「声がするのに、いつまでたっても着かない…」
リトは、白いモヤの道を歩き続ける。
「道を間違えたのかな…」
リトの心には、不安がよぎる。
「リトちゃん。待たせたな」
リトは、声の方に振り向く。そこには、マーズが立っていた。
「マーズ！？」
リトは、いるはずがない存在に驚きを隠せない。
「化け物にやられて、ここに来ちまった」

マーズは、頭を掻きながら言う。
「やられたって…まさか…！」
リトが言葉を言い終わる前に、マーズはリトを抱き寄せる。
「もう、全て終わったんだ。帰ろうぜ？」
マーズは、リトの耳元で囁く。
「…マーズ？」
リトは、マーズの温もりを感じながらも疑問を抱く。
「戻ればわかるさ。時の流れを止める事は、出来ないってな」
抱き寄せるマーズの腕に力が籠る。
「…離れて」
リトは、マーズを突き放す。
「どうしたんだよ、リト？」
突然のリトの行動に動揺するマーズ。
「あなたは、マーズじゃない！」
「俺は俺だぜ！？」
「マーズは、死んでも諦めたりしない！それに、私が生きているのに、先に逝ってしまうなんて有り得ないわ！」
「しょうがねぇな」
マーズが消えていく。
「！？」
リトは、唖然とする。
「よく気が付いたな」
また、声がする。今度はヤーヴェだ。
「お兄様…？」
「あれは、神格までの道の試練だ。神格は、精神の高みを極めなければ、進む事も出来ない」
「精神の高み…」
リトは、心に思い付いた情景を浮かべる。人々の笑顔。動物との共存。大事な友達と笑い合える時間。そして、愛する人との幸せな時間…

「今から、五分だけ神格界への道を切り開く。辿り着けるか？」
リトは、ヤーヴェを強く見つめて頷く。
「よし…。リト、必ず生きるんだ。そして、新しい時代を盛り上げていくのだ」
「お兄様…？」
ヤーヴェのセリフが、別れの言葉に聞こえて、不安になるリト。
「大丈夫だ。私は、まだ死ぬ訳にはいかない。リトは、己の使命を―」
ヤーヴェは、炎を繰り出す。
「この方角だ！」
轟音と共に、炎がモヤを切り裂いて突き抜けていく。
「凄い…」
リトは、ヤーヴェの力を目の当たりにして驚嘆する。
「さぁ、行くんだ」
ヤーヴェの体は、段々と薄れていく。
「お兄様！？」
「心配するな。死ぬ訳ではない。…リトよ。この先に何が待構えていても、自分の心を信じるんだ。暗闇を照らす光は、心の中に存在している」
ヤーヴェは、そう言い残して消え去る。
「お兄様ぁ！」
リトの叫びは、辺りに空しくコダマした。

ヤーヴェがいた場所をボンヤリ眺めるリト。
「…必ず…必ず、着いてみせるわ…！」
リトは、ヤーヴェが開いた道を走り出す。リトは、これまでの出来事が、走馬燈の様に甦り、涙が溢れ出す。何故、こんな事になったのか？答えは、誰が教えてくれるのか？様々な想いが胸に走る。
（マーズ…無事だよね…？）
最後に浮かぶのは、マーズだった。

走るリトの目前に、そびえ立つ塔が見えてくる。
「見えた！」
リトは、更にスピードをあげる。塔が近付くに連れて、薄れていく。
いや、モヤが戻り始めたのだ。
「お願い！待って！」
リトは、消えかかる塔と戻り始めるモヤに懇願する。しかし、非情にも、モヤは拡がっていく。

『汝に問う！人間とは、欲望！人とは、傲慢！ならば、我等、神格は何を纏う！』

突然の響く声に、回りを見渡す。勿論、何も見えない。

『さぁ、答えよ！』

リトは、瞳を閉じる。そして、祈りをする様に話し始める。
「神格とは、神の嘆きの姿です」
リトは、瞳を開く。

『……』

リトの目の前のモヤが薄れて、先程の塔が出現する。

『汝が神を語る理由は？』

「お願いがあります！時の女王を止めて下さい！終末の定めを解放して下さい！」

『終末を止める術はない。残念ながら、我々の力では、今の時の女

王には勝てぬ。だが、お前には、何者にも負けない心を持っている』

「誰にも負けない心…？」

リトは、困惑する。

『己の心を信じよ。そして、己の仲間を信じよ。それが、新たな道を作るやもしれん』

【戯れた事を言うでない】

そこには、鷲の顔を持ち、５mはありそうな、三つ又の槍を持つ生物が立っていた。

「あなたは誰ですか！？」

【冥界の王―オシリス】

「冥界…！？」

リトは、驚きを隠せない。

【人間も人も終末によって滅びる運命。そして、冥界は永遠の楽園となる】

「まさか…あなたも時の女王の仲間―！？」

【勘違いするでない。冥界は、人間も人も…例え、神格でも裁かれる場所。】

『オシリスよ！何故に我等の領域に踏み入った！』

【知れた事。この世の全てに、終末の弾劾の雨を降らせる為】

（やっぱり、時の女王と同じ…）
リトは、塔を仰ぎ見る。リトの回りに、オーラが甦る。
「冥界の王よ。己の欲望を満たす為に、終末を成就させる事は、神への冒涜です。直ちに冥界に還りなさい」

【太陽の意思…！これはこれは…まだ、気がつかぬか？終末とは、己の中の欲望を暴走させる事で、エデンの秩序・過去を破壊し尽くす事。そして、ここにいる神格を冥界に送る事で、エデンの暴走が加速する。姿を見せよ！神格の人よ！】

『我等を消し去り、エデンを崩壊させる…エデンは、終末など臨んでおらん！』

塔から二つの光が舞い降りる。次第に形を表す姿は、翼を持たない天使―そんな表現が似合う。

【あとの2人は、既に消滅した様だな】

『…太陽の意思よ。塔に入るのだ』

「…わかりました。神格の方達のご武運を祈ります―」
リトは、踵を返して走り出す。

【私を無視出来るとでも思っているのか…？】

オシリスは、一瞬にして、リトの前に立ちはだかる。
「どきなさい」
リトは、怯む事なく言い放つ。

【私は、絶対者。どんなに強いオーラを持ってしても、私を拒む事は出来ない】

『太陽の意思よ！行け！』

声と共に、閃光がオシリスに襲いかかる。閃光は、オシリスの心臓辺りに直撃するが、全く動じない。

【貴様らから、先に裁くとしよう】

リトの前から消えたオシリスが、神格の2人の後ろに立つ。

『馬鹿…な…』

『太陽の意思…早く…塔…に…』

2人の神格は、薄れて消えていく。

「一体、何が起きたの…？」

リトには、ただ立っているだけに見えたオシリス。

【これが、絶対者の力。そして、神の情けに助けられた小さき存在など、児戯にも劣る】

「…取り消しなさい…」

【…？これが、宇宙開闢以来、続いている全てだ】

「取り消しなさいって言ってるのよ！彼等は、地球の為に…神の名の元に、背を向けた哀しき存在なのよ！どうして、そこまでしなくちゃいけなかったのか、あんたには、考えも付く訳ないわ！」

【くだらぬ話だ。生憎だが、私には、神に向ける背ですら持ち合わせていない】

「あなたは、悪魔と何も変わらないわ！」

【冥界が何故、存在するか知らない様だな。裁かれる前に教えてやろう。冥界とは、エデンが誕生して以来、地上に済む生物の思念によって誕生した場所だ。つまり、地上の生物が全て消滅して、我に裁かれない限り、冥界と私は、この世の混沌に存在し続ける。私を消す事は、エデンを消滅させなくてはならないのだ。つまり、神ですら私を消し去る事は、困難を極める】

オシリスは、勝ち誇った表情で、リトを見下す。

「それでも、私は戦うわ！」

【勇ましいな。しかし、お前を葬り去るのに、1秒もいらん】

オシリスは、三つ又の槍を振りかざす。

「混沌から生まれた存在に、神を語る資格など無い」

オシリスの動きが止まる。

【…奈落の女神！】

「あなたは…？」

リトは、優しくて暖かく、それでいて背筋に伝わる冷たい感覚を併せ持つエイシスに見とれる。

「お前が太陽の意思か。私は、エイシス。お前は、お前の使命を果たすが良い」

エイシスは、剣を構える。

【何故に、此処にいる？】

「愚問だな。お前こそ、神格と冥界を繋いで、神を取るつもりか？」
エイシスの剣が光り出す。

【神など興味ない。我が軍団を突破したのか？】

「お前の軍団など、ダグス１人で充分だ」

【なるほど…ならば、最初の血祭りは、奈落の女神―】

槍の突きが、エイシスの腹に刺さる。

【所詮、この程度…ぬっ？】

「この程度は、お互い様の様だな」
エイシスの姿が、崩れていく。

【残像か…はっ！】

残像が消えると同時に現れて、横一文字に剣を振るうエイシス。オシリスは、寸での所でジャンプしてかわす。
「太陽の意思よ！早く行け！」
エイシスの言葉に我に返るリト。
「お願いします！」
リトは、何が何だか理解出来ないままに走り出す。

【そうはいかん…！？】

追いかけようとするオシリスの前に立ちはだかるエイシス。
「冥界に終止符を打ってやろうとしている時に、余所見は禁物だろ」
【エイシス…！！】
オシリスの拳に力が籠る。
再び、剣と槍が混じり合う。
【冥界の軍団はどうした？】
「冥界の軍団…？今頃は、地獄に戻ってる頃だろ」
【無限の戦士を全て、葬る事など出来ぬ！】
「残念だが、不可能では無かったぞ」
エイシスは、一度、オシリスから離れる。そして、一気に攻める。
【認めん！冥界の軍団は最強！】
「ならば、確かめてくるんだな」
エイシスの剣が光り出す。
「はっ！！！」
気合いと共に振り切る剣から、閃光弾が走る。
【光の太刀とは…懐かしいぞ？】
オシリスは、三つ又の槍を地面に突き刺す。オシリスの前に広がる霧は、閃光弾を飲み込む。
「…」
【お前の攻撃は、全て私に通用しない】

「面白い」
エイシスの剣が、黄金色に変化していく。
【ほぉ。ならば―】
オシリスの霧の壁も、黄金色に輝き出す。
【神の色を扱えるのは、お前だけではない】
「…」
エイシスは、黄金の太刀を放つ。
轟音―
ぶつかる二つの黄金は、激しく爆発をする。爆風になびくエイシスの髪。
【黄金の太刀、敗れたな】
目の前に立つオシリス。そして、黄金の壁は、健在している。エイシスは、オシリスと壁を睨む。
【いくら睨んでも無駄だ。何故なら、我は神ですら、傷を負わせる事が出来ない存在だからだ】
オシリスは、両手を空に掲げる。轟く雷鳴。
【神をも越える一撃の一つ目だ】

稲光が辺りを真っ白にする。

【格の違いを痛感して、後悔するがよい】

オシリスの視線の先には、光に縛られたエイシスがいた。

【その光は、生命を吸い尽くして光を放つ。さすがだな。とても明るく光っているぞ？】

「…よく喋るヤツだな。これで、私の動きを止めたつもりか？」
エイシスの身体が光り出す。呼応する様に、纏わりつく光の紐も光り出す。

【まさか…！？】

際限なく光りを放つエイシス。光の紐は、段々と赤色に変化していく。

「格の違い？そんなに見たければ、見せてやろう」
エイシスの身体が、極限まで光る。紐は、真っ赤からどす黒い赤に変わって破裂をする。

【なんという事！】

「さっきは、私の技が、全て通用しないと言ったな？もう一度、さっきの壁を見せてみろ」
エイシスは、剣を構える。

【良かろう！成す術が無い事を悔やむがいいわっ！！】

オシリスの前に、再び、黄金の霧が現れて、壁を作る。それを見届

けたエイシスは、低く構える。
「神の太刀―」
エイシスの身体の光が、剣に集まる。細くしなやかに長い剣は、形を変えていく。
「第1の天使―」
剣は、フェンシングの剣の様に、鋭い先端を持つ形に変わる。そして、一気に走り出すエイシス。

【何と―！】

壁を突き抜けるエイシスの剣。そして、三つ又の槍の柄の部分に突き刺さる。槍には、ヒビが入り、粉々に砕け散る。
「第2の天使―」剣は、形を更に変えていく。今度は、空まで届く光りの筋を携えた剣になる。

【一体、どういう事だ！】

エイシスは、動揺するオシリスに構う事なく、切り掛かる。間一髪で避けるオシリス。光りの筋は、遥か遠くまで大地を切り裂く。

【おのれぇっ！！！！！】

オシリスの目から光線が発射される。身軽にかわすエイシス。オシリスは、更に、右手をかざして、衝撃派をかます。
「くっ…」
エイシスは、衝撃派をまともに喰らい、顔を一瞬、歪めるが続ける。
「第3の天使―」
剣は、元の細くしなやかに長い剣へと戻る。しかし、明らかに先程までの剣とは違うオーラを放つ。

【次の攻撃を放てば、お前は無傷で済まないぞ】
「それがどうした？」
エイシスは、渾身のフルスピードで、剣を振るう。
ドガーン！！！！！！！！！！
オシリスに、剣は届かずにエイシスが吹き飛ぶ。
【言ったはずだ。この体は、神ですら傷付ける事が出来ぬと】
エイシスの身体には、至る所に切り傷が出来る。
「まだだ…」
エイシスは、剣を杖代わりにして立ち上がる。
【あがくな。死に急がずとも、すぐに、死は訪れる】
オシリスは、衝撃波を連発する。その度に吹き飛ぶエイシス。
「…」
エイシスの剣は、光りを失い、いつもの剣に戻っている。オシリスの攻撃は、更に続く。砕けたはずの三つ又の槍が再生する。
【冥界とは、思念の元に創られた世界。故に、その世界に君臨する王には、不可能はない】
気が付けば、エイシスの前にオシリスが立っている。
「誰も聞いていない」
エイシスは、一度、間合いをあける為に、後ろへジャンプする。
【根本的な物が違うという事だ。お前の動きよりも早く、と思えば、

早くなれる―】

エイシスの後ろをとるオシリス。

「―！」

三つ又の槍の突きを、間一髪で避けるが、衝撃波によって、地面に転がる。

「それでも、私は負けない」

エイシスは、背中の両刃の槍を取り出して構える。

【神の槍か】

オシリスは、三つ又の槍を空にかざす。

【神の槍とは、エデンの力があって、初めて威力を発揮する。ここは、最早、神格ではなく、冥界の領域。ただの槍では、何をしても無駄だ】

オシリスは、勝ち誇った表情を浮かべている。

「何度も言わせるな。私は勝つ―」

エイシスは、空高く跳び、槍を構える。

「まだ、わからないのか？冥界に無い物…それはエデンの意思！」

黒光りの方の刃が鈍く輝き出す。

「黒点―」

槍は、炎を携える。そして、炎は、エイシスにも移る。

【最大の一撃で来い。そして、後悔をする事になれ】

オシリスの前に、黄金の壁がはびこる。

「…」

エイシスが急降下を始める。その姿は、まるで、彗星が落下するが如く、激しい炎と輝きを放っていた。

【どんな攻撃も無駄だぁ！】

オシリスは、三つ又の槍に気を溜める。

激しい衝撃と轟音―

【…何故…？】

三つ又の槍は、エイシスの腕に突き刺さる。そして、エイシスの槍は、オシリスの胸を突き刺していた。

「お前が、どんなに強い身体を持っていても、神ではない。その傲慢が、冥界の王どまりだったな」

エイシスの槍が、更に食い込む。

【これしきで―】

オシリスが力を入れようとした瞬間。

「黄金の太刀―」エイシスは、剣を抜く。両刃の槍のもう片方が、黄金の輝きを放ち、エイシスの剣を照らし出す。

【お前の太刀など…利かぬ】

オシリスは、槍を抜こうとする。しかし、力を込める程に、槍は、一層輝く。

「己の欲望に酔い痴れる、傲慢不遜の王よ。その力で滅ぶがいい」

エイシスは、剣を横一文字に振り切る。オシリスの体が、光りを放ちながら、崩れていく。

【このオシリスが…冥界の王が…？】
オシリスは、消え去った。エイシスも、そのまま、倒れる。
「やっと、エイシスが勝ったか？」
ダグスの回りにいた、無限の兵士が消えていく。ダグスは、その様を眺めながら呟く。
「盟約は、果たしたな…」

〜真実の道〜

「ここは…神格界…？」
塔の中のリトは、目の前に広がる光景に息をのむ。何も無い景色は、音すら無く広がる。
「どうしよう…」
リトは、立ち尽くしたままで、動揺を隠せない。
「…ダメ。頑張らなくちゃ…」
とりあえず、真直ぐと走り出す。

『汝、神への道を開くのか―』

突然、聞こえた声に立ち止まる。
「あなたは、誰ですか！？私は、終末を止めたくて、此処に来ました！」
リトは、周りを見渡す。そして、一点で視線が止まる。そこには、1人の男が佇んでいた。

『太陽の意思よ。終末は、定めの時。それを止める事は、不可能であり、神への冒涜になるぞ。それでも、終末を止めると申すのか？』

「神への冒涜…それでも…それでも構いません！今、私が導かなければ、罪もない存在まで―」

『自惚れるなぁ！！』

振動が伝わる程の声に、リトは、一歩下がる。

『太陽の意思よ。神の導きを主ごときの導きで、変えられるなどと言うでない。神には神のお考えがあっての導き』

「…。嫌です…。私は、私の信じる神にのみ、光を求めます！」

『まだ、わからぬか。お前が此処に来たのも、神の導きなのじゃ。そして、この後に起こる事も―じゃ』

「この後…？」

リトの目の前に、大きな門が現われる。

「！？」

塔の中に現われた、大きな門に声も出ないリト。

『これは、嘆きの門。神格界と神界の境目じゃ。ここを通れば、神界に辿り着き、主の願いも叶うやも知れぬな…』

「神界…行きます。それが、私の使命ならば、行ってみせます！」

リトは、ゆっくりと歩き出す。

『焦るな。この門は、名前の通り、通る者の嘆きによってのみ開く。主に嘆きが無ければ、開く事はおろか、通る者に永遠の苦しみを与える』

「私の嘆き…」
リトは、これまでの人生を振り返る。

「嘆きなのか、わからない…でも、行くしかないです」
リトは、再度、歩みを始める。

『ならば、止めはせん。主の強さ見せて貰うぞ』

「あなたは、誰なのですか？」

『ワシか…クフの世話係じゃ』

「クフ王の？」

『如何にも。そして、この門を見届ける番人じゃ』

男は、門を軽く叩く。
「見届ける…私を待っていたという事ですか？」

『さぁな。ただ、この門を通るという事は、神に合う資格があるという事かもな…さぁ、通ってみるが良い』

男は、門を指差す。リトは、門を、じっと見詰めて、ゆっくりと頷く。
「番人様、ありがとうございます」リトは、歩き出す。そして、扉に手をかざす。

「…。神よ、聞いてください。私には、この終末が、何故、起きたのか理解が出来ません。人間も人も…同じ様に地上に身を置く事は、出来ないのでしょうか？地上を愛する事は、出来ないのでしょうか？私には、理解出来ません。皆、地上を愛していました。なのに、それ以外を愛する事は、神の定めに反する事なのですか？どうか、答えを教えてください。私達、全ての者に、神の真意を示してください」

『主は、全てを愛すると申すのか？』

男が、哀しい声で問い掛ける。

「はい」

『全てを愛するという事は、許す事だと理解しておるのか？そして、これまでの全ての者の全ての行いを許すと申すのか？』

「…許します」

『ならば、主が愛する男が、奈落の人間に殺されたとしても、許せるのか？』

「え…？」

『どうだ。許せないであろう。これが、人であり人間なのだ。愛するが故に、憎しみも生まれる』

「…。許します。それで世界が救われるなら―きっと…彼は、それを望みますから…私も、同じ事を望みます」

『…無理をしても、心は嘘を付けないぞ』

「嘘なんかではありません。何故なら…彼は、終末なんかで、死ぬ様な存在ではないですから」
リトからオーラが復活して、壁をこじあけだす。

『信頼というヤツか…それも、愛が導くものなのかもしれんな…』

「…人も人間も、同じ地上にいる事を忘れなければ、愛も信頼も、平等に分け与えられると思っています」

『エデンの愛…見事じゃ。終末を止める手段は、ただ一つ！時に選ばれし存在を捧げるのじゃ』

「時に選ばれし存在…誰ですか！？」

『それは、主自身で探すのじゃ』

「…？あなたは、一体、何者なのですか？」

『地上では、神などと呼ばれる事もあるかのぉ』

「それじゃ！？」
嘆きの門が消えていく。

『本当に、我のお告げを聞き届ける存在かを確かめただけじゃ。さぁ、嘆きの門をくぐり、現格へ帰るのじゃ』
男は、嘆きの門を指示す。
「ありがとうございます。私は…戻ります！」
リトは、祈りをして門をくぐる。

『エデンの声が聞こえなくとも感じ取れる者もいたか…まだ、捨てたもんじゃないのぉ…』

「オシリスも片付いたみたいだな」
ダグスが、ようやく、エイシスの元に辿り着く。
「…」
エイシスは、ダグスを見た瞬間に、そのまま倒れる。
「エイシスがここまで…」
ダグスは、エイシスを乗せて消える。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3237d/

終末　～終と始～

2010年10月10日05時30分発行